

令和4年度
野洲市内遺跡発掘調査年報

2023年3月

滋賀県野洲市教育委員会

令和4年度
野洲市内遺跡発掘調査年報

2023年3月

滋賀県野洲市教育委員会

序 文

野洲市は、琵琶湖の東南部に位置し、野洲川と近江富士の三上山に代表される自然豊かなまちです。埋蔵文化財では、大岩山出土の銅鐸 24 個をはじめ、国史跡大岩山古墳群や重要文化財西河原遺跡群出土木簡などが広く知られ、これらを支えた人々の営みが市内各地の遺跡として周知されているところです。

このたびの『野洲市内遺跡発掘調査年報』は、令和 3 年度、4 年度の国庫ならびに県費補助を受けて実施した「市内遺跡発掘調査等事業」の結果を概要報告書として取りまとめたものです。

本書が郷土の歴史、文化財への理解と保護に寄与することができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和 5 年(2023) 3 月

野洲市教育委員会

教育長 西 村 健

例 言

- 1 本書は、令和3年度から令和4年度国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金および滋賀県文化財保存事業費補助金を受けて、野洲市教育委員会が実施した市内遺跡発掘調査等事業の概要報告書である。

- 2 本事業は、文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門、滋賀県文化スポーツ部文化財保護課の指導・助言を得て、野洲市教育委員会が下記の事務局体制で実施した。

令和3年度 教育長 西村 健 教育部長 吉川武克 教育部次長 北脇康久
教育部次長兼歴史民俗博物館館長 進藤 武
(令和3年9月13日～ 文化財保護課長兼務)
文化財保護課長 (～令和3年9月12日) 角 建一
課長補佐 河合順之 課長補佐 福永清治 主幹 杉本源造
技師 芦塚晶太 技師 渡邊貴洋
令和4年度 教育長 西村 健 教育部長 馬野 明 教育部次長 北脇康久
教育部次長兼文化財保護課長兼歴史民俗博物館館長 行俊 勉
課長補佐 河合順之 課長補佐 福永清治 専門員 進藤 武
技師 芦塚晶太 技師 渡邊貴洋

- 3 本書には、令和3年10月から令和4年9月までに現地調査および整理調査を終了した成果を掲載した。本書の執筆は調査補助員の協力を得て、各調査担当者が行い、各文末に明記した。編集は課員の協力のもと芦塚が行った。

- 4 現地調査における基準方位は、特に設定しない限り真北を示す。磁北や座標北を用いる場合はその旨を図中に表記する。

- 5 標高は、野洲市公共下水道台帳図の水準を基準としている。

- 6 遺構の表示記号は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の略号を準用した。

- 7 遺跡名や遺跡範囲については、『平成28年度滋賀県遺跡地図』（滋賀県教育委員会 平成29年3月発行）により、その範囲は随時「野洲市遺跡地図」として改訂している。

- 8 土色は、「新版標準土色帖」（1993年版）などを参考にした。

- 9 出土した遺物および記録などは、野洲市教育委員会が保管している。

- 10 現地発掘調査および整理作業は、下記の方々に参加・協力を得た。（敬称略）

山崎 馨 大黒康弘 松下嘉暢 中川九英 公益社団法人野洲市シルバー人材センター

目 次

序 文

例 言

目 次

収載遺跡一覧・調査地位置図

1. 永原御殿跡	永原字馬場ノ内 1030 番 4 外 3 筆	1
2. 下々塚遺跡	行畑二丁目字下々塚 1127 番 4	6
3. 井口遺跡	井口字内畑 554 番 2、554 番 5	8
4. 十八田遺跡	野洲字浅田 1700 番 1 外 2 筆	11
5. 長島遺跡	長島字大町 387 番、387 番 1	15
6. 十八田遺跡	野洲字浅田 1716 番外 3 筆	17
7. 野田遺跡	野田字里ノ内 1681 番、1682 番	20
8. 富波東遺跡	富波乙 236 番	22
9. 富波東遺跡	富波字町乙 355 番の一部	24
10. 吉川遺跡	吉川字里ノ内 985 番の一部	27
11. 比留田遺跡	比留田字上大込 1372 番 2 外 3 筆	29
12. 富波東遺跡	富波字山口乙 353 番の一部外 2 筆	31
13. 小篠原遺跡	小篠原字附毛 1403 番 9、字狭間 1373 番 2	34
14. 光明寺遺跡	西河原字川ケ中 921 番 5、921 番 6	40
15. 小篠原遺跡	小篠原字附毛 1403 番 8、字狭間 1376 番 5	42
16. 六条遺跡	六条字杉ノ木 758 番 1	50
17. 西河原遺跡	西河原字六反田 883 番 4 外 3 筆	54
18. 西河原遺跡	西河原字坊ノ前 711 番 7 外 2 筆	64
19. 吉川東出遺跡	吉川字西浦 1451 番 2	66
20. 長島遺跡	長島字大町 364 番	68

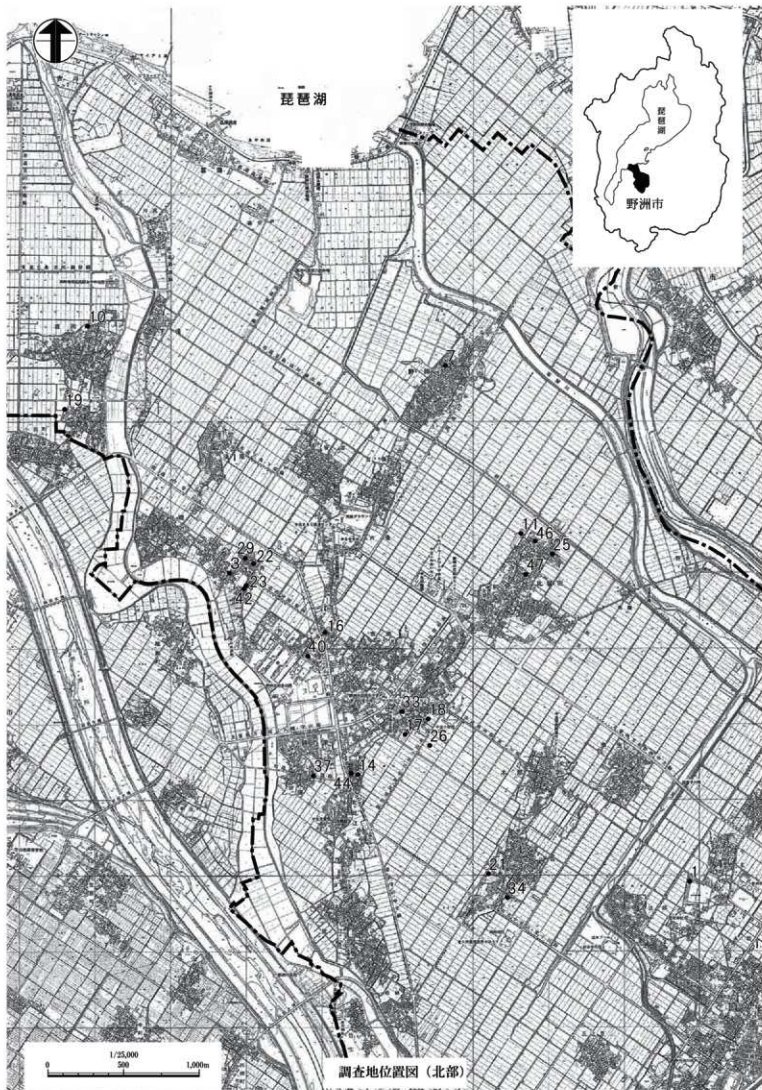
21. 八夫西ノ後遺跡	八夫字西ノ後 1381 番 3、1382 番 8	70
22. 井口遺跡	井口字東内畑 606 番	85
23. 井口遺跡	井口字東内畑 618 番 1	87
24. 三上遺跡	三上字寺田 299-1 外 11 筆	90
25. 比留田遺跡	比留田字八ノ前 568 番 1	97
26. 西河原・湯ノ部遺跡	西河原字天皇前 2026 番外 11 筆	100
27. 久野部遺跡	久野部字南出 228 番 1 外 3 筆	124
28. 小篠原遺跡	小篠原字附毛 1403 番 7、字狭間 1376 番 4	128
29. 井口遺跡	井口 582 番	132
30. 小篠原遺跡	小篠原字沢町 1522 番 2	135
31. 三上山西遺跡	三上字山原 234 番 4 外 8 筆	138
32. 大篠原南遺跡	大篠原字野村 2853 番 2、2854 番	140
33. 西河原遺跡	西河原字西浦 562 番 1 の一部外 3 筆	143
34. 八夫遺跡	八夫字今林 1444 番の一部	145
35. 常楽寺遺跡	富波字馬場甲 962 番 8	147
36. 久野部遺跡	久野部字畑ヶ田 150 番 98	150
37. 乙窪遺跡	乙窪字里ノ内 194 番 7	152
38. 富波東遺跡	富波字町乙 281 番の一部	154
39. 富波東遺跡	辻町 522 番 1	156
40. 吉地薬師堂遺跡	六条字東塔ノ本 990 番 9	159
41. 三上山西・本命寺遺跡	三上字中日ヤリ 168 番 2 外 11 筆	161
42. 井口遺跡	井口字東内畑 618 番 2	163
43. 中畑・古里遺跡	行畑字高道下 799 番 5	166
44. 光明寺遺跡	西河原字川ヶ中 1036 番 16	169
45. 野々宮遺跡	富波字殿町甲 182 番 7	172
46. 比留田遺跡	比留田字口切 1213 番	174
47. 比留田遺跡	比留田 645 番 1	177

令和 4 年 工事立会一覧

報告書抄録

収載遺跡一覧表

番号	遺跡名	調査年度	調査地	調査の目的	担当者
1	永原御殿跡	R 3	永原字馬場ノ内 1030 番 4 外 3 筆	史跡の内容確認	福永
2	下々塚遺跡	R 3	行畑二丁目下々塚 1127 番 4	試掘調査	渡邊
3	井口遺跡	R 3	井口字内畑 554 番 2、554 番 5	試掘調査	芦塚
4	十八田遺跡	R 3	野洲字浅田 1700 番 1 外 2 筆	試掘調査	芦塚
5	長島遺跡	R 3	長島字大町 387 番、387 番 1	試掘調査	芦塚
6	十八田遺跡	R 3	野洲字浅田 1716 番外 3 筆	試掘調査	芦塚
7	野田遺跡	R 3	野田字里ノ内 1681 番、1682 番	試掘調査	芦塚
8	富波東遺跡	R 3	富波乙 236 番	試掘調査	渡邊
9	富波東遺跡	R 3	富波字町乙 355 番の一部	試掘調査	芦塚
10	吉川遺跡	R 3	吉川字里ノ内 985 番の一部	試掘調査	渡邊
11	比留田遺跡	R 3	比留田字上大込 1372 番 2 外 3 筆	試掘調査	渡邊
12	富波東遺跡	R 3	富波字山口乙 353 番の一部外 2 筆	試掘調査	芦塚
13	小篠原遺跡	R 3	小篠原字附毛 1403 番 9、字狭間 1373 番 2	本発掘調査	芦塚
14	光明寺遺跡	R 3	西河原字川ケ中 921 番 5、921 番 6	試掘調査	芦塚
15	小篠原遺跡	R 3	小篠原字附毛 1403 番 8、字狭間 1376 番 5	本発掘調査	芦塚
16	六条遺跡	R 3	六条字杉ノ木 758 番 1	試掘調査	杉本
17	西河原遺跡	R 3	西河原字六反田 883 番 4 外 3 筆	試掘調査	芦塚
18	西河原遺跡	R 3	西河原字坊ノ前 711 番 7 外 2 筆	試掘調査	渡邊
19	吉川東出遺跡	R 3	吉川字西浦 1451 番 2	試掘調査	渡邊
20	長島遺跡	R 3	長島字大町 364 番	試掘調査	渡邊
21	八夫西ノ後遺跡	R 3	八夫字西ノ後 1381 番 3、1382 番 8	本発掘調査	芦塚
22	井口遺跡	R 3	井口字東内畑 606 番	試掘調査	渡邊
23	井口遺跡	R 3	井口字東内畑 618 番 1	試掘調査	渡邊
24	三上遺跡	R 3	三上字寺田 299-1 外 11 筆	試掘調査	杉本
25	比留田遺跡	R 4	比留田字八ノ前 568 番 1	試掘調査	芦塚
26	西河原・湯ノ部遺跡	R 4	西河原字天皇前 2026 番外 11 筆	試掘調査	芦塚
27	久野部遺跡	R 4	久野部字南出 228 番 1 外 3 筆	試掘調査	進藤
28	小篠原遺跡	R 4	小篠原字附毛 1403 番 7、字狭間 1376 番 4	本発掘調査	進藤
29	井口遺跡	R 4	井口 582 番	試掘調査	芦塚
30	小篠原遺跡	R 4	小篠原字沢町 1522 番 2	本発掘調査	渡邊
31	三上山西遺跡	R 4	三上山原 234 番 4 外 8 筆	試掘調査	渡邊
32	大篠原南遺跡	R 4	大篠原字野村 2853 番 2、2854 番	試掘調査	進藤
33	西河原遺跡	R 4	西河原字西浦 562 番 1 の一部外 3 筆	確認調査	福永
34	八夫遺跡	R 4	八夫字今林 1444 番の一部	試掘調査	進藤
35	常楽寺遺跡	R 4	富波字馬場甲 962 番 8	試掘調査	芦塚
36	久野部遺跡	R 4	久野部字畑ヶ田 150 番 98	試掘調査	渡邊
37	乙窪遺跡	R 4	乙窪字里ノ内 194 番 7	試掘調査	芦塚
38	富波東遺跡	R 4	富波字町乙 281 番の一部	試掘調査	芦塚
39	富波東遺跡	R 4	辻町 522 番 1	試掘調査	渡邊
40	吉地薬師堂遺跡	R 4	六条字東塔ノ本 990 番 9	試掘調査	進藤
41	三上山・本命寺遺跡	R 4	三上字中日ヤリ 168 番 2 外 11 筆	試掘調査	渡邊
42	井口遺跡	R 4	井口字東内畑 618 番 2	試掘調査	進藤
43	中畑・古里遺跡	R 4	行畑字高道下 799 番 5	試掘調査	進藤
44	光明寺遺跡	R 4	西河原字川ケ中 1036 番 16	試掘調査	進藤
45	野々宮遺跡	R 4	富波字殿町甲 182 番 7	試掘調査	福永
46	比留田遺跡	R 4	比留田字口切 1213 番	試掘調査	進藤
47	比留田遺跡	R 4	比留田 645 番 1	試掘調査	進藤





野洲川左岸域

永原御殿跡

桜生史跡公園

野洲市役所

三上山

調査地位置図（南部）

1/25,000

500

1,000m

なが はら ご てん あと 1. 永原御殿跡

調査地 野洲市永原字馬場ノ内 1030 番地 4、1032 番地 2、1032 番地 3、1032 番地 9
調査原因 史跡の内容確認調査
調査期間 令和 3 年 7 月 12 日～令和 4 年 3 月 29 日

1. 調査経過

永原御殿は、江戸時代初期に徳川家康から徳川家光までの 3 代の将軍が、江戸から京までの行程の中で当地に宿泊した将軍家専用の宿館である。当遺跡については、野洲市による平成 29 年度からの総合調査を受け、令和 2 年 3 月に国史跡の指定を受けた。発掘調査は平成 29 年度に初めて本丸内において実施し、令和 2 年度からは史跡整備に向けた発掘調査を再開した。平成 29 年度の発掘調査は本丸の殿舎本体について実施したものであり、令和 2 年度調査は主要周辺施設の本丸「南之御門」について実施し、引き続き令和 3 年度では、本丸「東之御門」の基本的な規模・構造を解明するための発掘調査を実施した。

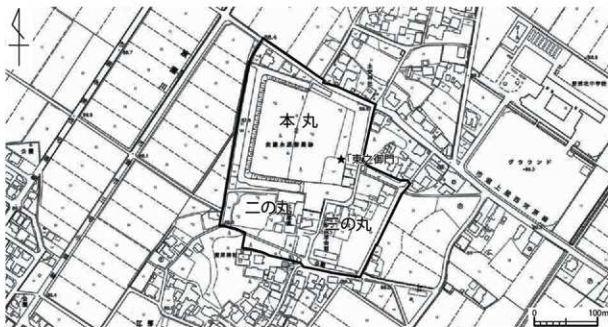
調査区は、大工頭中井家関係資料の「江州永原御茶屋御指図」(以下、「指図」)を現地測量図に投影し、本丸「東之御門」の位置にあたる範囲に設定した。

本丸「東之御門」は本丸の東辺土塁に接続して存在する。本丸の現状は、その西側半分の外周に土塁が残存しており、東側半分の外周土塁は残存していない。本丸「東之御門」推定地周辺には、地表面で明確に確認できる遺構が残存しておらず、門の規模・形状とともに、想定される土塁や堀との位置関係・接続状況なども解明すべき点に挙げられた。

調査の進行と必要性に合わせて調査区を拡張していき、最終的には約 108.84㎡の調査区となった。

2. 調査成果

本丸「東之御門」推定地である調査区周辺の旧状は、地目が畑である。現在本丸内に進入する唯一の道がかつての「東之御門」の進入路を踏襲すると当初から想定しており、その両側に存在した土塁



第 1 図 永原御殿跡位置図

1. 永原御殿跡



第2図 永原御殿跡「本丸」内発掘調査配置図

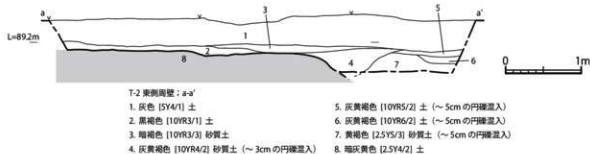
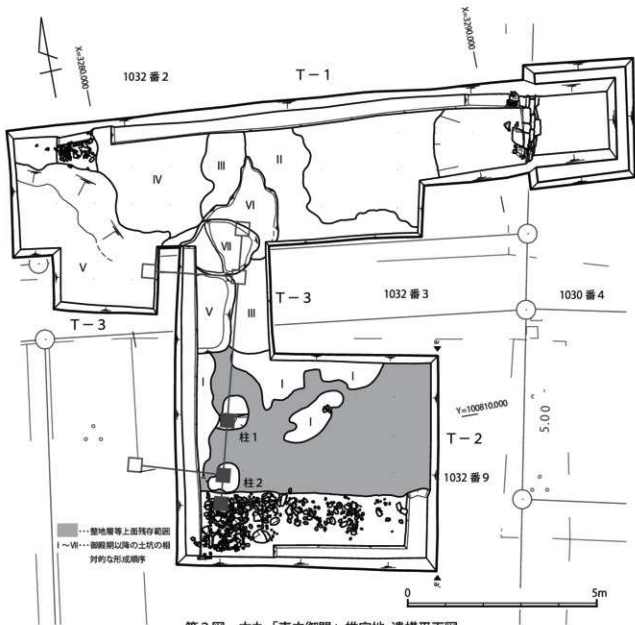
の痕跡は存在しないが、土塁と造成済みの堀範囲との境界は、0.2～0.4 mの段差が存在している。

調査区の基本層序は、現地表から0.3～0.4 mの深さまでは畑耕作土等の堆積で、その直下は暗褐色系の土などの堆積が10cm程度の堆積で認められる。その直下で地表面から0.4～0.5 mの深さにおいて暗灰黄色を主体とする固く締まった砂質土を確認した。これが残存する御殿期の整地土層であると見られる。

検出できた永原御殿関連の遺構を列挙すると、櫓門の正面左側と見られる親柱とその左側に存在した脇柱の礎石抜き取り痕、櫓門正面左側の石垣を撤去した痕跡と見られる土坑、地表面で見られた土塁と堀の境界と見られる段差に沿う形でかつての堀を検出した。

(1) 櫓門の礎石抜き取り痕

「指図」に記される「東之御門」は形式が櫓門であり、左右に門扉がとりつく親柱2柱、門に向かって左に配される脇戸（潜り戸）の脇柱1柱、門両側の石垣法面に取り付け寄掛柱2柱、郭内側両方向に配置される控柱2柱が配される構造となる。



第4図 調査区周壁土層断面図

今回の調査で検出した礎石抜取痕は、門に向かって左側の親柱(柱1)、門に向かって左側に配される脇戸の左側脇柱(柱2)、である。その他の柱で、門に向かって右側に位置する柱の痕跡は、御殿廃絶後の攪乱によって確認することができなかった。門に向かって左側の寄せ掛け柱の位置には礎

1. 永原御殿跡

石に該当する可能性のある大型石材が存在したが、石垣撤去後に置かれた石材である可能性もある。門に向かって左側の控柱は調査区に含めることができなかった。

(2) 櫓門正面左側の石垣を撤去した痕跡と見られる土坑

礎石採取痕を検出した地点の南側に接して、直線的な掘り方を示す土坑を検出した。土坑の範囲は調査区外へと続いている。この範囲には大きさ 10 ～ 30cm の垂角礫の散乱が認められ、瓦片も出土している。検出面からの深さは 0.3 m 以上存在し、底面の確認には至っていない。想定される櫓門から推定すると、この土坑がかつて櫓門に接して存在していた石垣を撤去した痕跡であると考えられた。出土した垂角礫は、おそらく石垣の裏込石に使用されていたものであり、石垣の撤去に伴って現地に散乱的に二次堆積したものと考えられた。この状況は、「南之御門」の調査において門に向かって右側の石垣想定範囲で見られた状況と酷似するものであった。なお、先述のとおり、指図でいう櫓門の寄せ掛け柱にあたる地点では、平面規模で 30 × 40cm で平らな上面がやや南傾する石材を検出している。

(3) 堀

地表面においては、現状の地番でいう 1030 番地 4 と 1032 番地 2 の境界に約 0.4 m の段差が存在し、かつての堀と土塁との境界にあたと解釈された。当初設定していた調査区は 1032 番地 2 の範囲内であったが、堀部分の範囲確認のために調査区を 1030 番地 4 まで拡張した。この地点で掘り下げを進めたところ、地番の境界部において地形の急な落ち込みを確認し、土塁と堀の境界を確認した。

堀は昭和 30 年代までは水田として利用されており、その後造成されて現在に至っている。現状の地表面から約 1.8 m の深さまでは造成土が堆積しており、その直下は砂礫層を確認している。かつての水田耕作土は除去されているようであったが、造成土直下で確認した砂礫層が堀底にあたるかは明確ではない。

また、境界部の土塁への立ち上がりでは、石材 3 段分の石垣を検出した。ちょうど堀と土塁の境界部にあたるが、表面で 20 ～ 35cm 四方の間知石の布積みを呈しており、近現代の段階の遺構であると考えられる。指図の記述からも、おそらくかつては御殿期の石垣が存在したと思われるが、造成される前の露出していた段階において新しい石垣が再構築されたものと考えられる。

(4) 出土遺物

遺物整理コンテナで 8 箱分が出土した。種類の内訳は、瓦片が最も多く、次いで土師器片・陶磁器片である。指図や中井家文書によると、東之御門は榎葺きの屋根であり、瓦葺ではないが、屋根頂部の棟には飾り瓦が使用されていたと思われ、御殿の他の場所でも出土している小菊紋の棟飾瓦が数点出土した。瓦葺きの記録が残る「南之御門」と比較して出土量は圧倒的に少なく、記録の内容を正確に反映しているものと見られる。

3. まとめ

検出した遺構としては、当初想定した櫓門が完全に残っている状況は確認できなかった。この範囲は本丸の他の場所と異なり、畑として現代まで利用されており、御殿の廃絶後から一定の土地の改変がなされたからか、攪乱（第 3 図 I ～ VII の範囲）による破壊が進んでいた状況であった。しかし、わずかながら認められた遺構は、指図の内容と概ね合致するものであり、現状ではこの遺構が御殿期のものであると推定するのが妥当であると考えられる。今後においても遺構・遺物の整理を進め、史跡整備の資料としてまとめていく予定である。（福永）

1. 永原御殿跡



調査区全景（その1）



調査区全景（その2）



礎石抜き取り痕等の遺構

2. 下々塚遺跡

調査地 野洲市行畑二丁目字下々塚 1127 番 4
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 3 年 10 月 6 日

1. 調査経過

下々塚遺跡は、弥生時代から室町時代にかけての集落跡と周知されており、遺跡の範囲は南北約 430 m、東西 415 m を測る。

調査地は下々塚遺跡の南隅に位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。周辺の既往の調査としては、平成元年（1988）に北西側約 30 m 地点で調査が行われ、ピット等を検出している⁽¹⁾。また、北東側約 30 m 地点でも昭和 49 年（1974）に調査が行われ、溝や掘立柱建物を検出している⁽²⁾。現地での調査は令和 3 年 10 月 6 日に行った。

2. 調査結果

調査は、建物建築範囲に約 6.25m²の調査区を設定した。地表面下約 0.8 m の深さまで掘削を行った結果、最上層には盛土（1 層）があり、その下に水田の作土層と考えられる黄灰色極細砂層（2 層）、オリーブ灰色シルト層（3 層）、灰黄色極細砂層（4 層）が続く。その下に、遺物を含む暗褐色粘質土層（6 層）を確認し、遺構の確認に努めたが遺構は確認できなかった。さらにその後、地表面下約 1.6m まで掘り下げを行ったところ、地山であるにぶい褐色シルト層（10 層）を確認した。上面で精査を行ったが、同様に遺構は確認できなかった。

3. 調査成果

調査区からは主に地表面下約 0.8m の暗褐色細砂層から土師器が出土した。いずれも小片であり、実測には至らなかった。

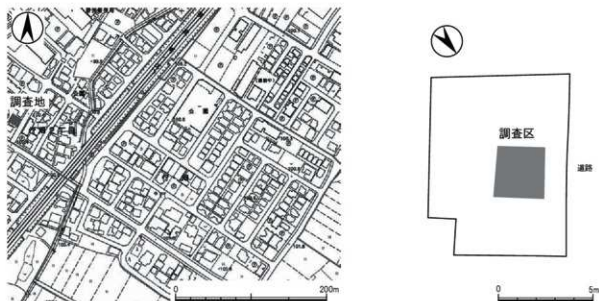


図 1 調査地位置図・調査区配置図

4. まとめ

調査区では明確な遺構を確認することができず、本調査地は下々塚遺跡の縁辺部と考えられる。

(渡邉)

(1) 野洲市教育委員会 2005『1987年埋蔵文化財調査年報』

(2) 野洲市教育委員会 2005『野洲市埋蔵文化財調査集報』

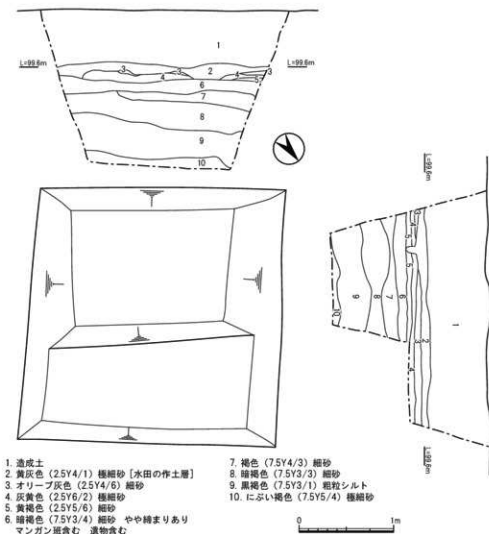


図2 調査区平面図・断面図



調査区全景 (南東から)



南壁土層 (北東から)

3. ^{いのくち}井口遺跡

調査地 ^{いのくちあざうちばた}野洲市井口字内畑 554 番 2、554 番 5
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 3 年 10 月 7 日

1. 調査経過

井口遺跡は奈良時代から江戸時代にかけての集落跡と周知されているが、調査回数も少なくその実態はいまだに未解明な部分の多い遺跡である。遺跡の規模は東西 600 m、南北 700 m にわたり、東は六条薬師堂遺跡・六条遺跡、西は堤遺跡、北は須原遺跡に隣接する。調査地は遺跡のほぼ中央部に位置する。

近隣の既往の調査では、調査地に西接する地点で実施された老人憩の家建設に伴う昭和 58 年度の調査⁽¹⁾で、2 面の遺構面が確認され、上層で近世の溝、下層で時期未詳の溝が検出されているほか、調査地から東に約 100 m の地点で実施された個人住宅の建設に伴う平成 22 年度の調査では堀跡⁽²⁾や中世の柱穴跡群⁽³⁾が確認されている。

調査は個人住宅の建設に伴う試掘調査で、建物建築範囲に約 9.0m²の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

2. 調査成果

地表面下約 1.4 m まで掘削を行った結果、地表面下約 0.6 m までは近現代による造成土で非常に固くしめられていた。近現代の造成土以下約 0.6 m（地表面下約 0.6 m～約 1.2 m）は出土遺物から、中世～近世にかけての堆積土と考えられる。遺構は、地表面下約 0.8 m でピット 2 基を確認したものの、土層間の切り合いが激しく、明確な遺構面として残存している状況ではなかった。これは中世以降の継続的な土地利用に起因するものと判断される。

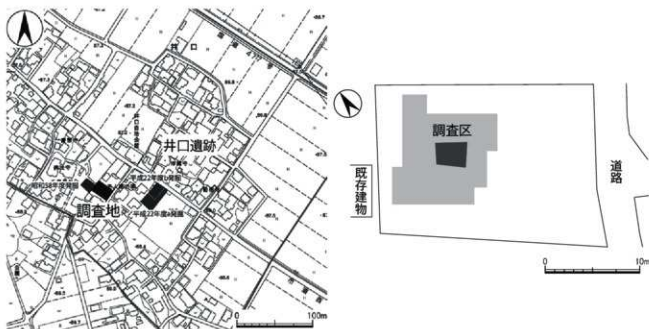


図1 調査地位置図・調査区配置図

中世以前の遺構の有無を確認するために、地表面下約 1.4 m まで掘り下げを行ったが、遺構は検出されなかった。

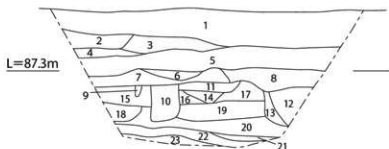
3. まとめ

明確な遺構面は確認できなかったものの、調査区壁面土層断面の観察から、本調査地集権における中世以降の継続的な土地利用が窺えた。本調査地は井口遺跡の集落の一角と評価できる。

(芦塚)

- (1) 野洲市教育委員会 2006 「第 5 章 井口遺跡第 1 次発掘調査」『野洲市内遺跡発掘調査収容 VI』
 (2) 野洲市教育委員会 2011 「33. 井口遺跡」『平成 22 年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』
 (3) 野洲市教育委員会 2011 「34. 井口遺跡」『平成 22 年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』

1. 造成土 2. 暗オリーブ色 (5Y 4/3) 粘土 (しまりあり) 3. 灰オリーブ色 (5Y 4/2) 極細粒砂
 4. オリーブ色 (2.5Y 4/4) 粘質土 5. 黄褐色 (2.5Y 5/4) 極細粒砂 (しまりあり)
 6. 暗オリーブ褐色 (7.5Y 6/2) 粘土 (炭化物含む) 7. オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 極細粒砂
 8. オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) シルト (混入物が多い) 9. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 粘質土 (混入物が多い)
 10. 暗オリーブ色 (5Y 4/2) 極細粒砂 11. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 粘質土 (土層片を含む)
 12. 暗オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 粘質土 (径 10mm ~ 40mm 程度の礫を含む)
 13. 暗灰黄色 (2.5Y 5/4) 砂 14. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 粘質土 (土層片を含む) 15. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂
 16. 暗オリーブ色 (5Y 4/2) シルト 17. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂 18. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 粘質土
 19. オリーブ灰色 (5GY 5/1) 粘質土 20. オリーブ灰色 (10Y 6/2) 粘質土 21. 灰色 (7.5Y 4/1) シルト質砂



1. 造成土 2. オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) 粘質土 3. 灰オリーブ色 (7.5Y 4/2) 極細粒砂 (しまりあり)
 4. 黄褐色 (2.5Y 5/4) 極細粒砂 (しまりあり) 5. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 粘質土 (混入物が多い)
 6. オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) シルト (混入物が多い) 7. オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 粘質土
 8. 黄褐色 (2.5Y 5/3) 砂 (混入物が多い) 9. 灰色 (5Y 4/1) 砂混シルト
 10. 灰色 (5Y 4/1) 粗粒砂混極細粒砂 [遺構埋土] 11. 黄褐色 (2.5Y 5/3) 砂 12. にぶい黄色 (2.5Y 6/3)
 13. 暗オリーブ灰色 (5GY 4/1) 砂 14. 灰オリーブ色 (5Y 5/3) 砂 (混入物が多い)
 15. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂 16. オリーブ灰色 (10Y 6/2) 砂
 17. オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) 砂 (炭化物含む) 18. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂混粘土 (混入物が多い)
 19. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 粘質土 20. 黄灰色 (2.5Y 6/1) 粘質土 21. オリーブ黒色 (10Y 3/2) 粘土
 22. オリーブ灰色 (2.5GY 5/1) 粘土 23. 暗緑灰色 (10GY 4/1) シルト

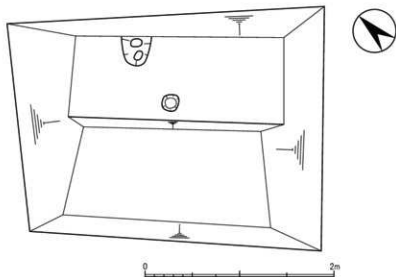
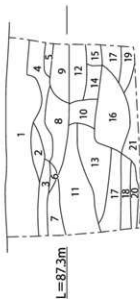


図2 調査区平面図・土層断面図

3. 井口遺跡



全景（南東から）



北壁土層断面



東壁土層断面

4. 十八田遺跡

調査地 野洲市野洲字浅田 1700 番 1、1701 番 1、1702 番 4
調査原因 倉庫建設
調査期間 令和 3 年 10 月 21 日

1. 調査経過

十八田遺跡は縄文時代から室町時代にかけての集落跡・墓跡と周知され、野洲市内で唯一野洲川左岸に位置する遺跡である。遺跡の規模は東西 700 m、南北 1,000 m にわたり、調査地は遺跡の中央やや北側にあたる。

近隣の既往の調査では、調査地に南接する県道大津能登川長浜線建設に伴う平成 3 年度の発掘調査で、主に弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居群や溝、ピット群が検出されている⁽¹⁾。他にも本調査地より南東側を中心に弥生時代～古墳時代にかけての住居跡等が多数確認されている。

その一方で、調査地から西に約 30 m の地点で実施した作業所建設に伴う平成 16 年度の試掘調査⁽²⁾では、遺構・遺物は確認されておらず、本調査地周辺が遺跡の北西端部にあたる可能性が考えられる。

調査は倉庫建設に伴う試掘調査で、基礎部（調査区 1）と地中梁設置部（調査区 2・3）に計 3 ヶ所の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。調査面積は約 20.0m²である。

2. 調査成果

基本層序は以下の通りである。第 1 層が造成土、第 2 層が旧耕作土、第 3 層が灰オリブ色極細粒砂層、第 4 層がマンガンを含む灰オリブ色極細粒砂層、第 5 層がマンガンを含む暗オリブ粘土層、第 6 層が黄褐色シルト層である。第 6 層上面が遺構面と判断される。

調査区 1 では地表面下約 1.2 m で遺構面と判断される黄褐色シルト層を確認したが、遺構は検出さ

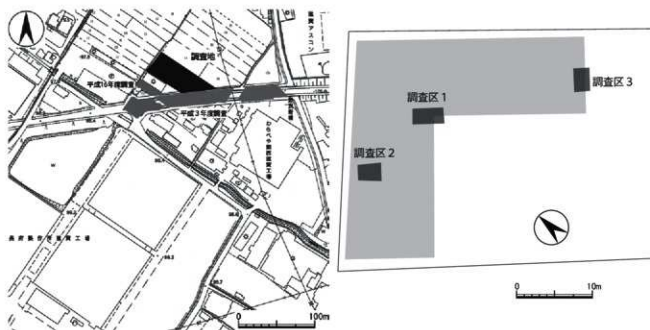
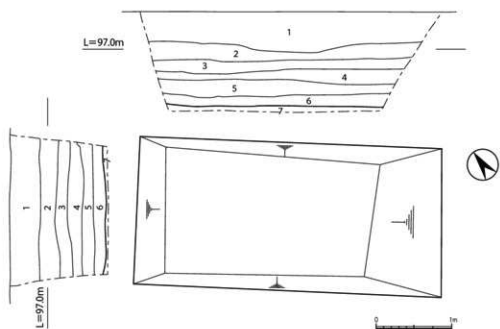


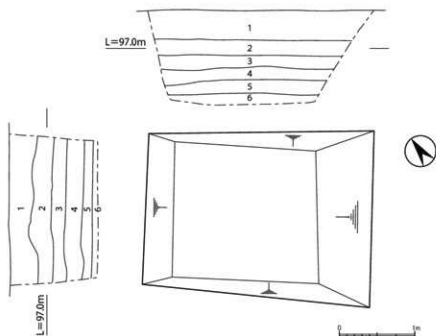
図 1 調査地位置図・調査区配置図

4. 十八田遺跡



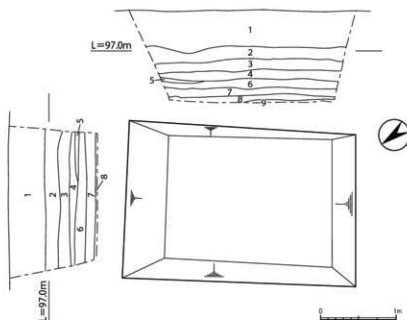
1. 造成土 (第1層) 2. オリーブ黒色 (5Y3/1) 極細粒砂 [旧耕作土] (植物遺体を含む、第2層)
 3. 灰オリーブ色 (7.5Y5/3) 極細粒砂 (第3層) 4. オリーブ色 (5Y5/4) 極細粒砂 (マンガンを含む、第4層)
 5. 明黄褐色 (2.5Y6/6) 粘質土 (マンガンを含む、第5層) 6. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 粘土 (マンガンを含む、第5層)
 7. 黄褐色 (2.5Y5/4) シルト (第6層)

図2 調査区1平面図・土層断面図



1. 造成土 (第1層) 2. オリーブ黒色 (7.5Y3/2) 極細粒砂 [旧耕作土] (植物遺体を含む、第2層)
 3. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 極細粒砂 (第3層) 4. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 極細粒砂 (マンガンを含む、4層)
 5. オリーブ色 (5Y5/4) 粘質土 (マンガンを含む、第5層) 6. 明黄褐色 (2.5Y6/6) 粘土 (マンガンを含む、第5層)

図3 調査区2平面図・土層断面図



1. 造成土（第1層） 2. オリーブ黒色（SY 2/2）極細粒砂〔旧耕作土〕（植物遺体を含む、第2層）
 3. 灰オリーブ色（7SY 4/2）極細粒砂（第3層） 4. 灰オリーブ色（7SY 5/3）粘質土（マンガンを含む、第4層）
 5. 暗オリーブ色（5GY 4/1）極細粒砂（第4層） 6. 暗オリーブ色（5Y 4/3）粘質土（マンガンを含む、第5層）
 7. 暗オリーブ色（SY 4/4）粘土（マンガンを含む、第5層） 8. 黄褐色（2.5Y 5/4）粘土（マンガンを含む、第5層）
 9. 黄褐色（2.5Y 5/6）粘土（マンガンを含む、第6層）

図4 調査区3平面図・土層断面図

れなかった。調査区2・3では、工事の計画深度内で遺構面を確認することはできず、もう少し下層に遺構面が存在するものと想定されるが、実態は不明である。

遺物は各調査区から弥生土器や土師器の小片が数点出土した。

3. まとめ

少量の遺物が出土したものの、明確な遺構を確認することはできなかった。本調査地は遺跡の北西端部、もしくは空白地と考えられる。

（芦塚）

- （1）滋賀県教育委員会文化財保護課・滋賀県文化財保護協会 1995『県道大津能登川長浜線建設に伴う野洲川左岸遺跡発掘調査報告書』
 （2）滋賀県野洲市教育委員会 2005「6.十八田遺跡」『平成16年度 野洲市内遺跡発掘調査概要1』

4. 十八田遺跡



調査区1 全景（東から）



調査区1 西壁土層断面



調査区2 全景（東から）



調査区2 西壁土層断面



調査区3 全景（南から）



調査区3 北壁土層断面

5. ^{ながしま}長島遺跡

調査地 ながしまあざむらち 野洲市長島字大町 387 番、387 番 1
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 3 年 10 月 28 日

1. 調査経過

長島遺跡は古代から中世にかけての遺物散布地として周知され、野洲市の東部に位置している。遺跡の規模は東西 800 m、南北 500 m にわたり、南は夕日ヶ丘遺跡に隣接する。調査地は遺跡の西部にあたる。

近隣の既往の調査では、調査地から西に約 100 m の地点で実施された個人住宅建設に伴う平成 28 年度の調査⁽¹⁾で、近世の寺院の境内に伴う溝が 1 条検出されている。調査地に東接する地点で実施された専用住宅建設に伴う平成 12 年度の調査⁽²⁾では遺構・遺物は確認されていない。

調査は個人住宅の建設に伴う試掘調査で、建物建築範囲に約 6.0 m² の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

2. 調査成果

地表面下約 1.0 m まで掘削を行った結果、最上層に耕作土（1 層）があり、その下層に黄褐色粘質土層（2 層）、にぶい黄色粘質土層（3 層）、灰黄色粘土層（4 層）、黄褐色粘土層（5 層）、黄灰色シルト層（6 層）が堆積していた。6 層上面で検出を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。

3. まとめ

本調査地は長島遺跡の空白地と評価できる。

(芦塚)

(1) 野洲市教育委員会 2018「5. 長島遺跡」『平成 29 年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』

(2) 野洲町教育委員会 2001「第 4 章 長島遺跡」『平成 12 年度 野洲町内遺跡発掘調査概要』

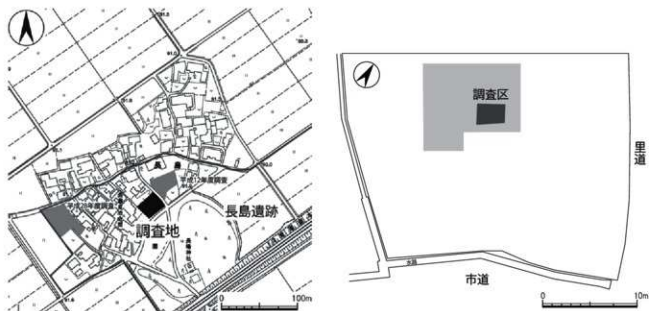
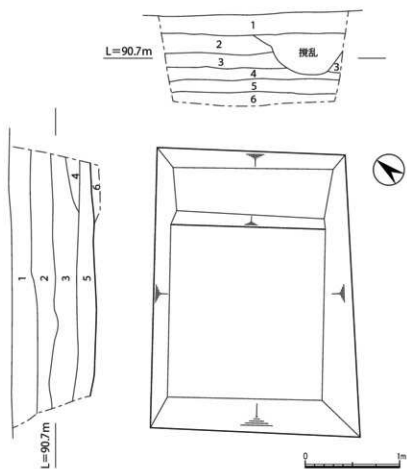


図1 調査地位置図・調査区配置図

5. 長島遺跡



1. オリーブ黒色 (5Y 3/2) 細粒砂 [耕作土]
2. 黄褐色 (2.5Y 5/4) 粘質土 (しまりあり)
3. にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 粘質土
4. 灰黄色 (2.5Y 6/2) 粘土
5. 黄褐色 (2.5Y 5/3) 粘土
6. 黄灰色 (2.5Y 6/1) シルト [遺構面]

図2 調査区平面図・土層断面図



全景 (南西から)



北壁土層断面

6. 十八田遺跡

調査地 野洲市野洲字浅田 1716 番、1717 番、1718 番、1719 番
調査原因 露天駐車場
調査期間 令和 3 年 11 月 2 日

1. 調査経過

十八田遺跡は縄文時代から室町時代にかけての集落跡・その他墓跡と周知され、野洲市内で唯一野洲川左岸に位置する遺跡である。遺跡の規模は東西 700 m、南北 1,000 m にわたり、調査地は遺跡の北西部にあたる。

近隣の調査事例については、本書収録の「4. 十八田遺跡」と重複するため、そちらを参照願いたい。

調査は露天駐車場の建設に伴う試掘調査で、油水分離槽設置範囲に約 6.0m²の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

2. 調査成果

地表面下約 1.2 m まで掘削を行った。最上層はオリーブ黒極細粒砂層（1 層）で、旧耕作土である灰オリーブ色粘質土層（2 層）が続く。その下層にはマンガン少し含む灰オリーブ色粘土層（3 層）、オリーブ灰色粘土層（4 層）、マンガンを含む灰色粘土層（5 層）、マンガンを少し含むオリーブ灰色粘土層（6 層）が堆積していた。オリーブ灰色粘土層からは古代の須恵器が出土した（図 3）。

これらの下層で確認したマンガンを含まないオリーブ灰色シルト層（7 層）が遺構面と判断されるが、遺構・遺物は確認されなかった。

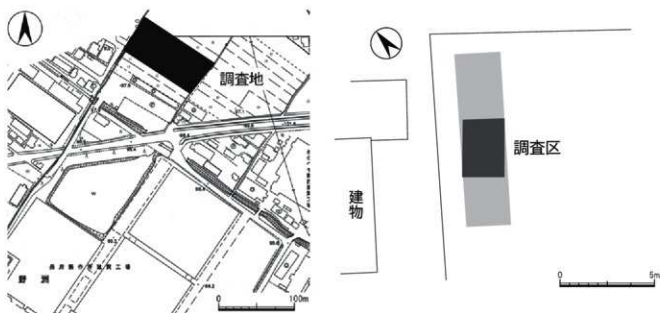
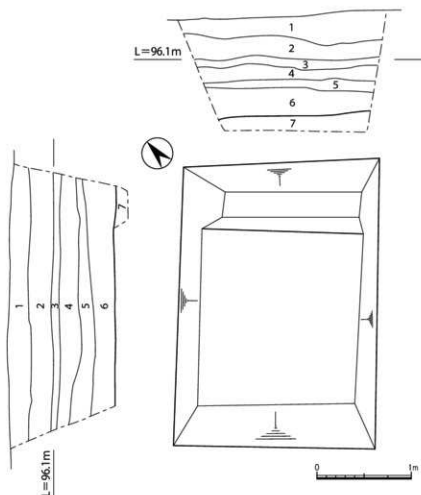


図1 調査地位置図・調査区配置図

6. 十八田遺跡



1. オリーブ黒色 (75Y 3/1) 極細粉砂 2. 灰オリーブ色 (7.5Y 5/2) 粘質土 3. 灰オリーブ色 (5Y 4/2) 粘土 (マンガンを少し含む)
 4. オリーブ灰色 (5GY 5/1) 粘土 (マンガンを少し含む) 5. 灰色 (10Y 5/1) 粘土 (マンガンを含む)
 6. オリーブ灰色 (2.5GY 5/1) シルト (マンガンを少し含む) 7. オリーブ灰色 (2.5GY 6/1) シルト (遺構面)

図2 調査区平面図・土層断面図

3. 遺物

1・2ともに高台をもつ須恵器の杯である。立ち上がりは緩やかに内傾し、内外面ともに回転ナデで、回転ヘラケズリののち高台を貼り付ける。1は残存高3.6cm、2は残存高2.2cmを測る。



図3 出土遺物実測図

4. まとめ

少量の遺物が出土したものの、明確な遺構は確認されなかった。本調査地は十八田遺跡の空閑地と評価される。

(芦塚)

6. 十八田遺跡



全景（南西から）



北壁土層断面



西壁土層断面

7. のだ 野田遺跡

調査地 野洲市野田字里ノ内 1681 番、1682 番
調査原因 個人住宅
調査期間 令和3年11月10日

1. 調査経過

野田遺跡は古墳時代から江戸時代にかけての集落跡と周知されているが、調査回数も少なくその実態はいまだに未解明な部分の多い遺跡である。遺跡の規模は東西 700 m、南北 800 m にわたり、東は彼岸地遺跡、西は安治口戸遺跡、南は五条今屋遺跡・五条遺跡に隣接する。調査地は遺跡のほぼ中央やや北よりに位置し、北に広がる水田はかつて「野田沼」と呼ばれた内湖であり、昭和 18 年（1943）～昭和 26 年（1951）にかけて干拓された土地となる。

調査は個人住宅の建設に伴う試掘調査で、建物建築範囲に約 6.0m²の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

2. 調査成果

地表面下約 1.4 m まで掘削を行った結果、最上層に耕作土があり（1 層）、その下層に暗灰黄色砂層（2 層）、にぶい黄褐色砂層（3 層）、黄褐色砂層（4 層）が堆積していた。これらの砂層は人工的に堆積させた盛土・造成土と判断される。

人口堆積土の下層には、自然堆積と判断されるオリーブ褐色、オリーブ黄色、にぶい黄褐色、灰オリーブ色を呈する砂（5～11 層）が堆積しており、それらの下でオリーブ色粘土層（12 層）を確認した。このオリーブ色粘土層上面で精査を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。下層確認のため、部分的に地表面下 2.2 m まで重機による掘り下げを行ったが、大きな変化はみられなかった。

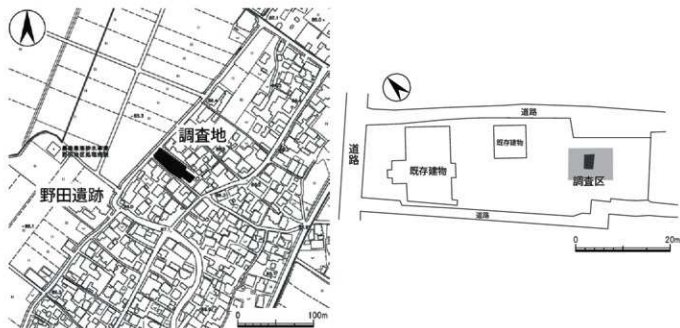


図1 調査地位置図・調査区配置図

3. まとめ

調査の結果、遺構・遺物は確認できなかった。近世の絵図を参照すると、本調査地周辺は水損場と明記されており、昭和に干拓されるまで湖辺部であったことなどを考慮すると、本調査地は野田遺跡の縁辺部と考えられる。

(芦塚)

1. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 砂 [耕作土]
2. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 砂 (炭化物混ざる)
3. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 砂 (炭化物混ざる)
4. 黄褐色 (2.5Y 5/3) 砂 (ブロック土混ざる)
5. オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) 細かい砂
6. オリーブ黄色 (5Y 6/4) 砂
7. オリーブ黄色 (5Y 6/3) 砂
8. にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 砂
9. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂 (粘土ブロック土含む)
10. 灰オリーブ色 (5Y 5/3) 砂
11. 灰オリーブ色 (5Y 6/2) 粗い砂 (鉄分を含む)
12. 灰オリーブ灰色 (5GY 4/1) 粘土

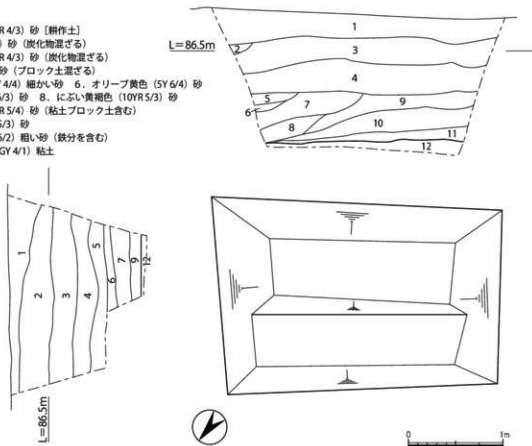


図2 調査区平面図・土層断面図



全景 (南西から)



東壁土層断面

8. 富波東遺跡

調査地 やすしとばつ 野洲市富波乙 236 番
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 3 年 11 月 18 日

1. 調査経過

富波東遺跡は、中世から近世にかけての集落跡と周知されている。

調査地は富波東遺跡の南西隅に位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。周辺の既往の調査として、平成 15 年（2003）の北東側約 80 m 地点倉庫建設に伴う調査⁽¹⁾が挙げられる。当調査ではビット・土坑を確認しており、弥生時代後期に所属する弥生土器の壺や 13 世紀代の黒色土器が出土している。

現地での調査は令和 3 年 11 月 18 日に行った。

2. 調査成果

調査は、建物建築範囲に約 6.0㎡の調査区を設定した。地表面下約 1.0 m まで掘削を行った結果、最上層に耕作土があり、その下に暗褐色細砂層（2 層）、灰黄褐色細砂層（4 層）が堆積していた。

明黄褐色中粒砂層（5 層）の上面が遺構面と判断されるが、精査の結果、遺構は確認できなかった。調査区からは重機掘削時に近世～近代にかけての陶磁器の小片と須恵器の小片が出土した。

3. まとめ

本調査地は富波東遺跡の縁辺部と評価できる。

（渡邊）

（1）野洲町教育委員会 2003『平成 15 年度 野洲町内遺跡発掘調査概要』

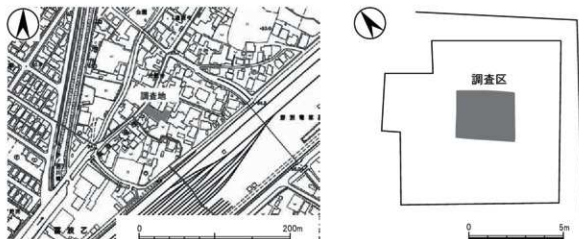


図1 調査地位置図・調査区配置図

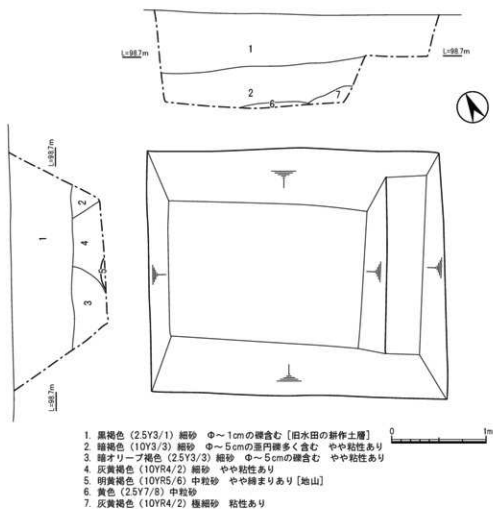


図2 調査区平面図・壁面図



調査区全景 (東から)



東壁土層断面 (東から)

9. 富波東遺跡

調査地 野洲市富波字町乙 355 番の一部
 調査原因 個人住宅
 調査期間 令和3年11月19日

1. 調査経過

富波東遺跡は弥生時代から室町時代にかけての集落跡と周知され、野洲市のほぼ中央に位置している。遺跡の規模は東西 600 m、南北 900 m にわたり、東は辻町遺跡、西は富波遺跡、北は常楽寺遺跡・野々宮遺跡に隣接する。調査地は遺跡の北西部にあたり、朝鮮人街道に面している。

近隣の既往の調査では、調査地から北東に約 40 m の地点で実施された造成に伴う平成 19 年度の調査(1)で、中世の掘立柱建物群や櫓、区画溝が確認されている。

調査は個人住宅の建設に伴う試掘調査で、建物建築範囲に約 10.0m²の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

2. 調査成果

地表面下約 1.1 m まで掘削を行った結果、堆積している土層はいずれも炭化物やブロック土を含んでおり、出土する遺物の年代が近世以降であることから、後世の人為的影響をかなり受けているものと判断される。

地表面下約 1.1 m (標高約 92.7 m) で確認した灰色砂層 (11 層) はとても固くしまっており、この層の上面を検出面として精査を行ったが、遺構は確認されなかった。この検出面とした灰色砂層は調査区の北半でのみ認められ、南半にはしまりのない粘土 (10 層) が堆積していた。

図面作成後、調査区南端を地表面下約 2.3 m まで掘り下げて下層を確認したが、大きな変化はみられなかった。下層確認に近現代の陶器が出土し、後世の土地利用によって中世以前の遺構面が削平されてしまった可能性が考えられる。

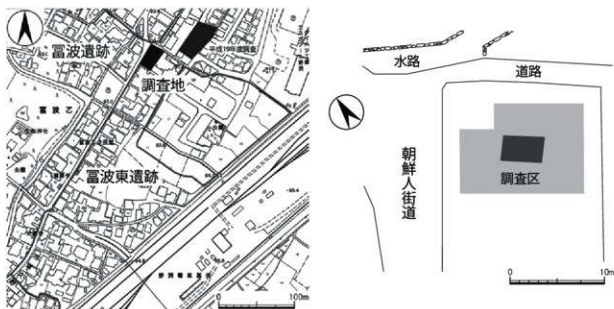


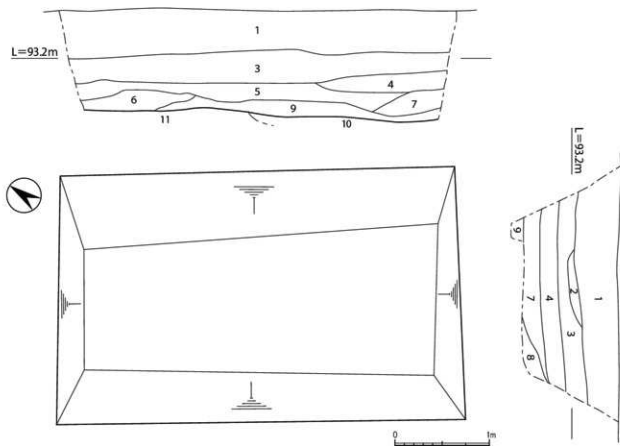
図1 調査地位置図・調査区配置図

3. まとめ

明確な遺構は確認されなかったものの、近世以降の土器が多数出土し、継続的な土地利用が窺えることから、本調査地は富波東遺跡の集落の一角と評価できる。

(芦塚)

(1) 野洲市教育委員会 2009『第5章 富波東遺跡』『平成20年度 野洲市埋蔵文化財調査概要報告書』



1. 表土 2. 明黄褐色 (10YR 6/6) 粗い砂 3. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 極細粒砂 (炭化物混ざる) 4. 灰色 (5Y 4/1) 砂混粘質土
5. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 粗粒砂 (にぶい黄色 (2.5Y 6/4) 粘土ブロック土を含む) 6. 黄褐色 (10YR 5/6) 粘土 (しまりあり)
7. 灰色 (5Y 4/1) 粗砂 (灰白色 (5Y 8/2) 粘土ブロック土を含む) 8. にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 粗い砂 9. オリーブ黒色 (5Y 3/1) 粗砂
10. 黒褐色 (2.5Y 3/1) 粘土 11. 灰色 (10Y 5/1) 砂 (非常にしるる)

図2 調査区平面図・土層断面図

9. 富波東遺跡



全景（南東から）



東壁土層断面

10. 吉川遺跡

調査地 野洲市吉川字里ノ内 985 番の一部
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 3 年 11 月 24 日

1. 調査経過

吉川遺跡は、平安から江戸時代にかけての集落跡と周知されている。

調査地は吉川遺跡の北側に位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。周辺の調査事例は少ないが、平成 30 年（2018）には東側約 20 m 地点で調査が行われており、近世の陶磁器等が出土している。

現地での調査は令和 3 年 11 月 24 日に行った。

2. 調査成果

調査は、建物建築範囲に 3.0 × 2.0 m の調査区を設定した。調査面積は約 6.0 m² である。

調査区は地表面下約 1.3 m まで掘削を行った。地表面下約 0.3 m までは造成土で、その下にふい黄褐色土（7 層）、褐色土（12 層）、灰白色土（13 層）、褐灰色土（14 層）、灰色土（15 層）が堆積する。その直下で遺構面と想定される灰色粘土層（16 層）を確認し、精査を行ったが遺構は確認できなかった。その後土層等の記録を作成したのち下層確認のため地表面下約 1.7 m まで掘削を行ったが、同様に遺構は確認できなかった。

今回の調査区では遺構を確認できず、遺物も出土しなかった。

3. まとめ

当調査地は吉川遺跡の縁辺部と評価できる。

（渡邊）

（1）野洲市教育委員会 2019『平成 30 年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』

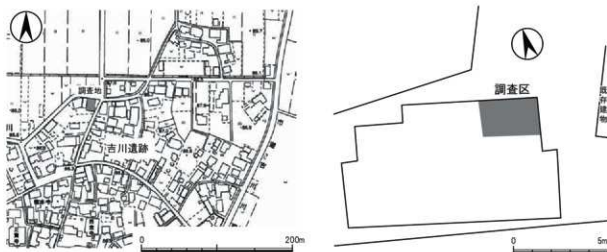


図1 調査地位置図・調査区配置図

10. 吉川遺跡

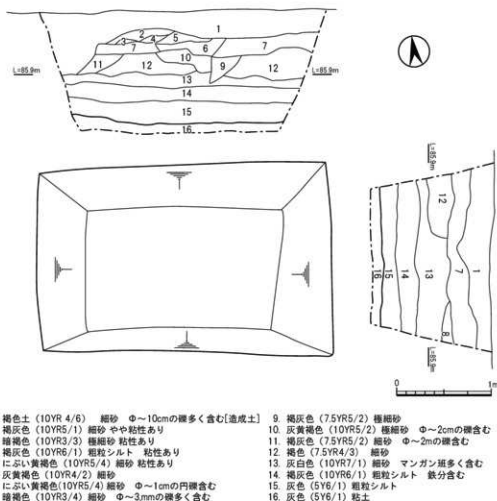


図2 調査区平面図・壁面図



調査区全景 (東から)



北壁土層断面 (南から)

11. 比留田遺跡

調査地 野洲市比留田字上大込 1372 番 2、1372 番 3、1372 番 5、1373 番 2
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 3 年 12 月 8 日

1. 調査経過

比留田遺跡は、弥生時代から江戸時代にかけての集落遺跡と周知されている。

調査地は比留田遺跡の北西隅に位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。周辺の既往の調査として、平成 28 年（2016）には南側約 50 m 地点で調査が行われているが⁽¹⁾、明確な遺構・遺物とともに確認できていない。

現地での調査は令和 3 年 12 月 8 日に行った。

2. 調査成果

調査区は、上からにぶい黄褐色粗粒砂層（1 層）、灰黄褐色細砂層（3 層）、灰色細砂層（5 層）、灰色粗粒シルト層（8 層）、オリーブ灰色粘土層（9 層）、オリーブ灰色細砂層（11 層）、灰色粗粒砂層（12 層）、灰色極細砂層（14 層）が順に堆積し、地表面下約 1.5 m で黄灰色粗粒シルト層（15 層）を確認した。この層が遺構面と判断されるが、遺構は確認できず、遺物も出土しなかった。

3. まとめ

当調査区の地表面下約 0.7 m 以下の層はグライ化しており、粗粒砂層や 5mm ほどの礫を多く含む極細砂層などが堆積することから第 8 層以下は旧埋没河道による堆積と思われる。

（渡邊）

（1）野洲市教育委員会 2016『平成 28 年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』

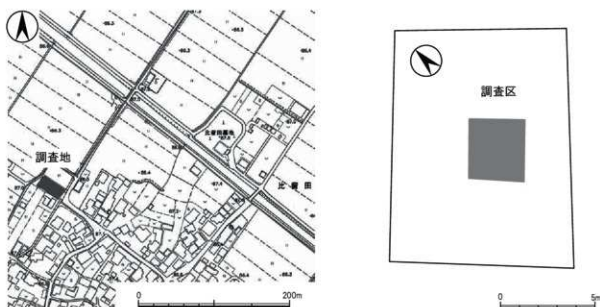


図1 調査地位置図・調査区配置図

11. 比留田遺跡

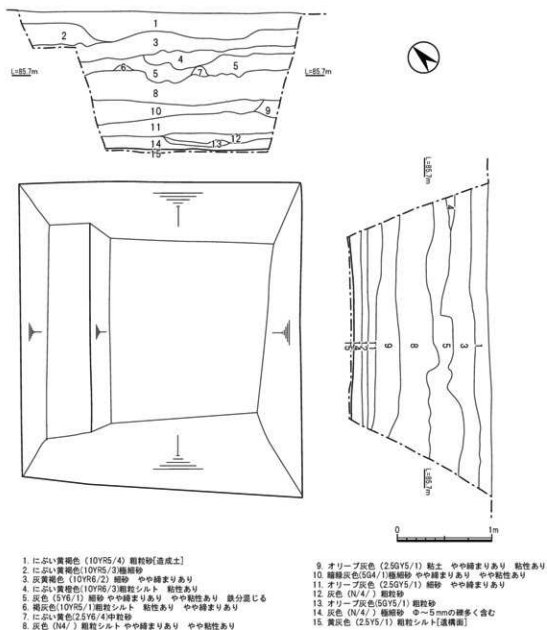


図2 調査区平面図・壁面図



調査区全景(東から)



北壁土層断面(南西から)

12. 富波東遺跡

調査地 野洲市富波字山口乙 353 番の一部、342 番 2 の一部、352 番 3
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 3 年 12 月 9 日

1. 調査経過

富波東遺跡は弥生時代から室町時代にかけての集落跡と周知され、野洲市のほぼ中央に位置している。遺跡の規模は東西 600 m、南北 900 m にわたり、東は辻町遺跡、西は富波遺跡、北は常楽寺遺跡・野々宮遺跡に隣接する。調査地は遺跡の北西部にあたり、祇王井川に面している。

近隣の既往の調査では、調査地から北東に約 50 m の地点で実施された共同住宅および分譲宅地造成に伴う平成 16 年度の調査(1)で、古墳時代初頭の方形周溝墓 2 基と中世の掘立柱建物群、区画溝が確認されている。

調査は個人住宅の建設に伴う試掘調査で、建物建築範囲に約 6.0m²の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

2. 調査成果

地表面下約 1.4 m まで掘削を行った結果、最上層には解体工事の残土（1 層）があり、その下層には盛土（2 層）、暗灰黄色粗粒砂層（3 層）、灰黄褐色粘土層（4 層）、黄褐色砂層（5 層）、にぶい黄色極細粒砂粘質土層（6 層）、にぶい黄色褐色土層（7 層）、灰色粘土層（8 層）が堆積していた。

5 層の黄褐色砂層には現代遺物が含まれており、1 層から 5 層までは後世の影響をかなり受けているものとみられる。地表面下約 1.3 m（標高約 92.2 m）で確認した 8 層灰色粘土層が遺構面と判断され、精査を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。

また、4 層と 7 層の層理面は、調査地の西側を流れる祇王井川の川底とほぼ同じレベルになっており、まとまった量の湧水が認められた。

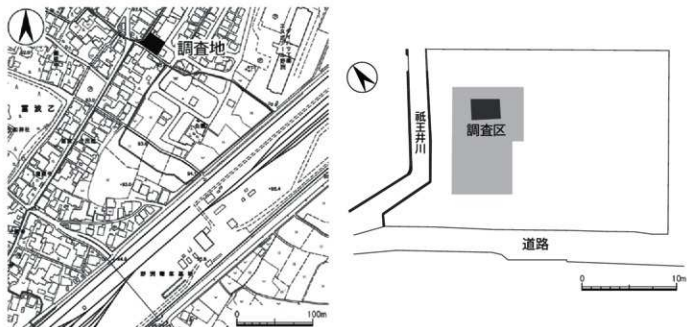


図1 調査地位置図・調査区配置図

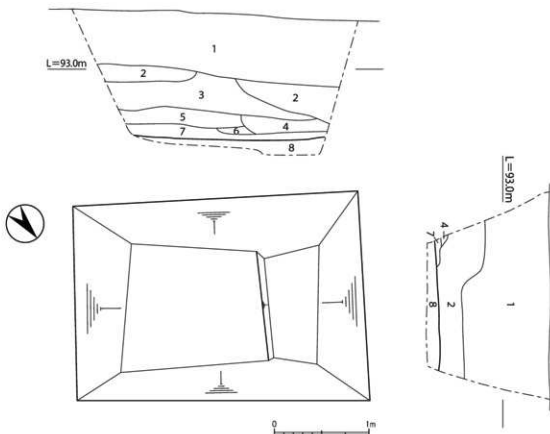
12. 富波東遺跡

3. まとめ

調査の結果、明褐色砂質土層の地山を基盤とする遺構面が確認された平成 16 年度の調査地点と全く異なった様相を呈することが明らかになった。遺構・遺物も確認されず、本調査地は富波東遺跡の縁辺部と評価できる。

(芦塚)

(1) 野洲市教育委員会 2004「第三章 富波東遺跡」『2004 年埋蔵文化財調査年報』



1. 残土 2. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 山砂 [盛土] 3. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 粗粒砂 4. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘土
5. 黄褐色 (2.5Y 5/3) 砂 6. にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 極細粒砂混粘質土 7. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 粘土
8. 灰色 (10Y 6/1) 粘土 [地山]

図2 調査区平面図・土層断面図



全景（北東から）



西壁土層断面



南壁土層断面

13. 小 篠 原 遺 跡

調 査 地 野洲市小篠原字附毛 1403 番 9、字狭間 1373 番 2
 調査原因 個人住宅
 調査期間 令和 3 年 12 月 14 日～20 日

1. 調査経過

小篠原遺跡は縄文時代から江戸時代にかけての集落跡と周知され、野洲市内でもっとも遺構密度が高い遺跡の 1 つである。遺跡の規模は東西 700 m、南北 1,000 m にわたり、調査地は遺跡の南部に位置する。

近隣の既往の調査では、本調査地を含んだ宅地造成に先立つ発掘調査において、擁壁敷設部分 (T-7) から古代の掘立柱建物群や井戸を検出している。(1) また、本調査地から南西に約 40 m の地点で実施した分譲住宅建設に伴う発掘調査では流路が確認されている(2)。

調査は個人住宅建設に伴う本発掘調査で、建物建築範囲に約 63.0㎡の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

2. 調査成果

基本層序は、第 1 層が碎石土、第 2 層が暗オリーブ灰色粘質土層、第 3 層が暗オリーブ灰色粘質土層、第 4 層が灰色粘質土層、第 5 層が暗オリーブ灰色粘土層、第 6 層が褐色粘土層である。第 2 層は現代の造成土で、第 4 層は金属やビニール片を含んだ近現代の攪乱層である。第 6 層上面が遺構面に相当する。

遺構面は地表面下約 1.0 m (標高 97.3 m) で確認した。調査区の北半は大きく攪乱を受けており、遺構面が残存していたのは調査区の南半のみである。遺構はピット、土坑、溝、落ち込みを確認した。SK01 調査区の南東隅で検出した土坑である。調査区端での検出のため大きさは不明であるが、深さ約 0.3 m を測り、平面は隅丸方形とみられる。土師器片が 3 点出土した。

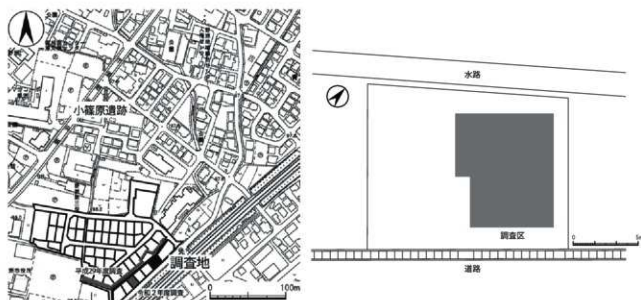


図 1 調査地位置図・調査区配置図

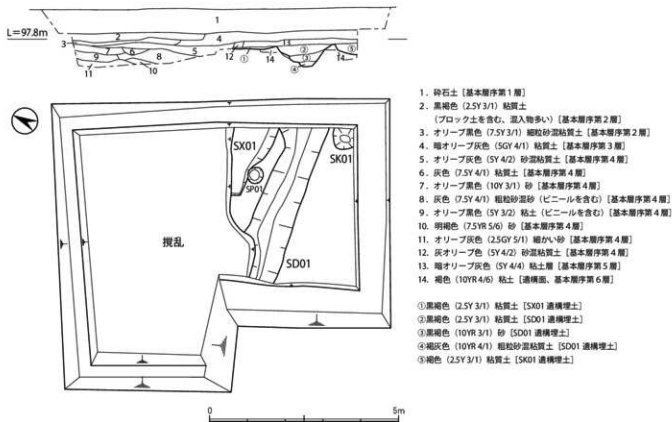


図2 調査区平面図・土層断面図

SP01 調査区の中央やや南東側で検出したピットである。平面は円形で、直径約0.4m、深さ約0.1mを測る。土師器片と須恵器片が1点ずつ出土した。

SD01 調査区のやや南側で検出した東西向きの溝である。幅約1.1m、深さ0.6mを測り、断面はV字形を呈する。遺構埋土は大きく3つに分けることができ、上層が黒褐色粘質土層、中層が黒褐色砂層、下層が褐色灰色粗粒砂混粘質土層である。上層と中層から土師器、須恵器、灰軸陶器などの遺物が出土した。

SX01 調査区の中央東側で検出した落ち込みである。攪乱によって破壊されてしまっており、形状は不明である。深さ約0.1mを測る。小片ばかりであるが、土師器、須恵器、灰軸陶器などの遺物が約30点出土した。

3. 遺物

本調査ではSD01を主として土師器・須恵器・灰軸陶器などの遺物が整理コンテナ1箱分出土したが、そのほとんどは小片であるので図示できなかった。

4. まとめ

調査区の北半は攪乱を受けていたものの、南半において溝や土坑、ピットといった古代の遺構を確認することができた。本調査地は小篠原遺跡の古代の集落跡と評価できる。

(芦塚)

(1) 野洲市教育委員会 2020「第8章 T-7」『平成29年度 小篠原遺跡発掘調査概要報告書』

(2) 野洲市教育委員会 2022「第6章 小篠原遺跡」『令和3年度 野洲市埋蔵文化財調査概要報告書』

13. 小篠原遺跡



調査区南半全景①（西から）



調査区南半全景②（南東から）



調査区南半壁面土層断面



SD01 遺構断面

13. 小篠原遺跡



SK01 遺構断面



SP01 遺構断面



SX01 遺構断面



調査区北半全景（東から）



調査区北半壁面土層断面

14. 光明寺遺跡

調査地 野洲市西河原字川ヶ中 921 番 5、921 番 6
 調査原因 宅地造成
 調査期間 令和 4 年 1 月 12 日

1. 調査経過

光明寺遺跡は奈良時代から江戸時代にかけての集落跡と周知され、野洲市の北西部に位置している。遺跡の規模は東西 600 m、南北 1,000 m にわたり、東は西河原遺跡・西河原森ノ内遺跡、西は乙窪遺跡、南は太田遺跡・小比江遺跡、北は光相寺遺跡・吉地大寺遺跡に隣接する。

近隣の既往の調査では、調査地から北に約 100 m の地点で実施された区画整理事業に伴う昭和 60 年度の調査(1)で、平安時代後期の掘立柱建物群・ピット群・土坑を検出し、土師器・黒色土器・輸入陶磁器・漆塗松扇などの遺物が整理箱 30 箱分出土している。

調査は宅地造成に伴う試掘調査で、市道敷設範囲に約 9.0㎡の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

2. 調査成果

地表面下約 1.5 m まで掘削を行った結果、表土（1 層）の下に砕石土（2 層）があり、オリーブ黒色粘土層（3 層）、暗緑灰色細かい砂層（4 層）、暗青灰色砂層（5 層）、黄褐色粘土層（6 層）、暗緑灰色粘土層（7 層）が堆積していた。暗緑灰色上面で精査を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。

下層確認のため、地表面下 2.1 m まで掘削を行ったが、状況は大きく変わらず粘土層の堆積が続いていた。

3. まとめ

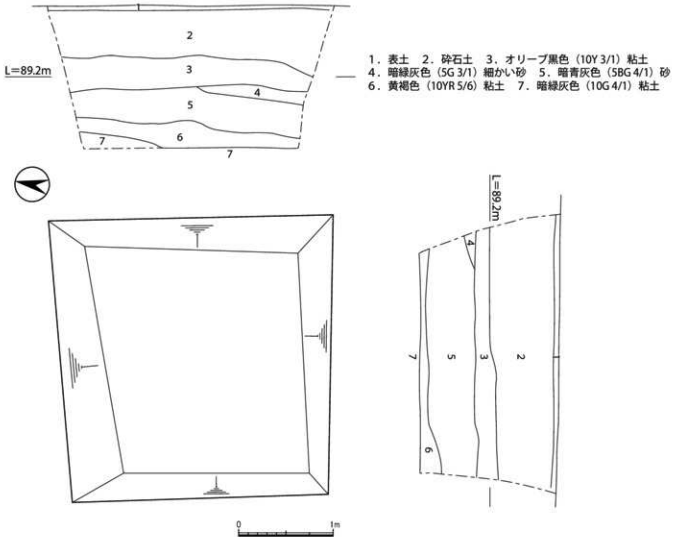
本調査において、遺構・遺物は確認されず、本調査地は光明寺遺跡の緑辺部と評価できる。

(芦塚)



図1 調査地位置図・調査区配置図

(1) 中主町教育委員会 1990「第10章 光明寺遺跡 14次調査」『中主町土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—光明寺遺跡 1～6次・10次・12次・14次調査、吉地大寺遺跡 1・2次調査—』



全景（北西から）



東壁土層断面

15. 小篠原遺跡

調査地 野洲市小篠原字附毛 1403 番 8、字狭間 1376 番 5
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 4 年 1 月 19 日～1 月 31 日

1. 調査経過

小篠原遺跡は縄文時代から江戸時代にかけての集落跡と周知され、野洲市内でもっとも遺構密度が高い遺跡の 1 つである。遺跡の規模は東西 700 m、南北 1,000 m にわたり、南は安城寺遺跡、下々塚遺跡、西は久野部遺跡と隣接する。調査地は遺跡の南部に位置し、本書収載「13. 小篠原遺跡」の南西隣の宅地である。北東に約 400 m の地点には林ノ腰古墳がある。

調査は個人住宅建設に伴う本発掘調査で、建物建築範囲に約 73.0㎡の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

2. 調査成果

基本層序は、第 1 層が碎石土、第 2 層が盛土、第 3 層が旧耕作土、第 4 層が黒褐色粘土層、第 5 層がオリーブ褐色粘土層である。第 5 層は地山で、調査区の中央付近で南東から南西に向けて落ち込んでおり、この落ち込みに遺物を含んだ第 4 層が堆積する。遺構は第 4 層上面（第 1 遺構面）、第 5 層上面（第 2 遺構面）で確認した。

第 1 遺構面では、ピット 7 基と溝状遺構 2 条を検出した。遺構埋土から遺物がほとんど出土しなかったため、具体的な年代は不明である。

第 2 遺構面では、土坑 1 基とピット 12 基、溝 3 条を検出した。
SD01 調査区のほぼ中央で検出した北東－南西を主軸とする溝である。幅約 0.7 m、深さ約 0.3 m を測る。遺構埋土は大きく 2 つに分けることができ、上層は黄灰色砂層、下層はオリーブ黒色シルト層である。

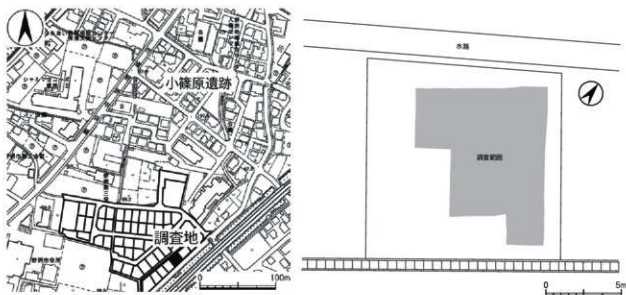


図 1 調査地位置図・調査区配置図

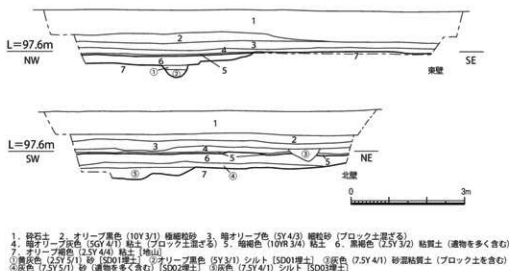


図2 調査区土層断面図

SD02 調査区の北西端で検出した北東－南西を主軸とする溝である。深さ 0.3 m を測り、埋土は灰色砂である。土師器や須恵器などの古代の遺物が出土した。本遺構は、後述の SD03 埋没後に形成されたものである。

SD03 調査区の南西端で検出した北西－南東を主軸とする溝である。幅 3.0 m 以上、深さ約 0.5 m を測る。埋土は灰色シルト層である。遺物が出土しなかったため、具体的な年代は不明であるが、本遺構は先述の SD02 に先行するものである。

3. 遺物

埴輪、土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦などの遺物がコンテナ 5 箱分出土した。出土した遺物は全て小片あり、図化できたものは 2 点である。

1 は須恵器の杯である。貼付高台をもち、内外面に横ナデを施す。口径 14.6cm、高さ 4.0cm を測る。焼成は良好で、灰白色を呈す。



図3 出土遺物実測図

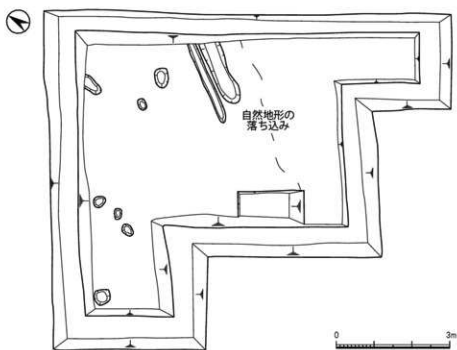
2 は須恵器の杯である。口径 11.8cm、高さ 3.3cm を測る。焼成は良好で、色調は灰白色を呈す。

4. まとめ

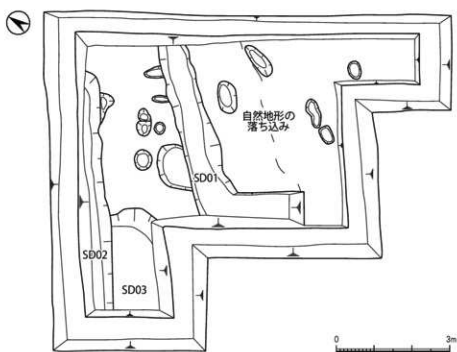
今回の調査では 2 面の遺構面を確認し、ビット・土坑・溝を検出した。遺物は第 4 層黒褐色粘土層及び第 2 遺構面の遺構埋土から古代の土師器・須恵器が出土し、少数ながら埴輪や中世以降の土器・瓦が出土した。埴輪は林ノ腰古墳に関係するものとみられる。中世の遺物は混入品と考えられ、本調査地の主要な時期は古代である。周辺の調査でも古代の遺構が確認されており、今回の調査結果と整合する。

(芦塚)

15. 小篠原遺跡



第1遺構面



第2遺構面

図4 調査区遺構平面図



調査区南半第1遺構面
検出（南西から）



調査区南半第2遺構面
検出（北東から）



調査区南半
完掘状況（南西から）

15. 小篠原遺跡



調査区南半第1遺構面
検出（南西から）



調査区南半第2遺構面
検出（北東から）



調査区南半
完掘状況（南西から）



調査区東壁土層断面図（北西から順に①）



調査区東壁土層断面図②

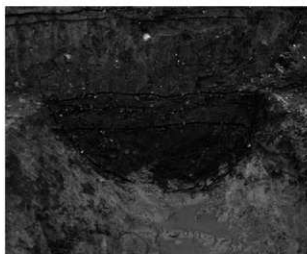


調査区東壁土層断面図③

15. 小篠原遺跡



調査区北壁土層断面図



SD01 遺構断面



SD02 遺構断面



SD03 遺構断面

16. 六条遺跡

調査地 野洲市六条字杉ノ木 758 番 1
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 4 年 2 月 14 日

1. 調査経過

六条遺跡は野洲市六条の集落を中心に東西約 800 m、南北約 700 m の範囲に広がり、1987 年～1988 年に六条集落の南を通過する国道 477 号線の敷設工事の事前調査で中世前期の遺構面から掘立柱建物、井戸、屋敷墓等が検出されている。

本調査地の北に 50 m 離れた近接地でも中世の遺構、遺物が検出されていることから試掘調査を実施した。

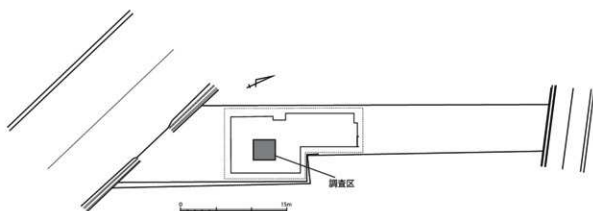
2. 調査成果

個人用住宅用地に 9 m² (3 × 3 m) の調査区を設定し、現地表下 (標高 86.7 m) から約 1.8 m (標高 84.9 m) まで掘り下げ、遺構・遺物の有無の確認をおこなったが、遺構、遺物は検出されなかった。

基本層序は現地表下約 90 cm までは宅地造成時の整地土層、その下に①暗灰色土 (微砂質)、②暗灰色土 (やや粘質)、③灰色土 (やや粘質)、④淡灰色粘土 (有機質を含む) ⑤淡灰褐色粘土 (有機質を多く含む) ⑥灰色粗砂層、⑦灰色粘土であった。①からは溝跡、③からは畔と溝跡とみられる土層が確認でき③まで耕作地であったことが確認できる。⑥の灰色粗砂層は約 5 cm の堆積で洪水の跡と推察する。



第 1 図 調査地位置図



第2図 トレンチ配置図

3. まとめ

本調査地に北に 50 m に近接する字杉ノ木 761-1・789-2 で溝 8、土坑 3、ピット、落ち等
とから黒色土器、土師器、須恵器、白磁、青磁、砥石が出土していることから、居住区があった可能
性を報告書では指摘しているが、周辺部の試掘調査では、遺構は検出されていないため居住区ではな
く集落外の耕作地の中に小規模な施設があったのであろう。

本調査区については、土層観察から水田耕作地であったと確認することができた。

(杉本)

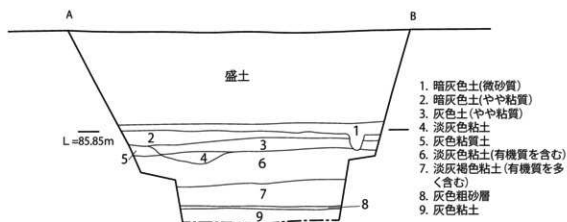
引用文献

- 1983「中主町文化財調査報告書第1集」中主町教育委員会
- 1990「六条遺跡発掘調査報告書」一瀬賀県中主町六条所在一 瀬賀県教育委員会 瀬賀県文化財保護協会
- 2016「野洲市埋蔵文化財立会調査・試掘調査集報Ⅰ」(旧中主町編)野洲市教育委員会
- 2016「野洲市埋蔵文化財立会調査・試掘調査集報Ⅱ」(旧中主町編)野洲市教育委員会
- 2019「平成30年度 野洲市内遺跡発掘調査年報」野洲市教育委員会

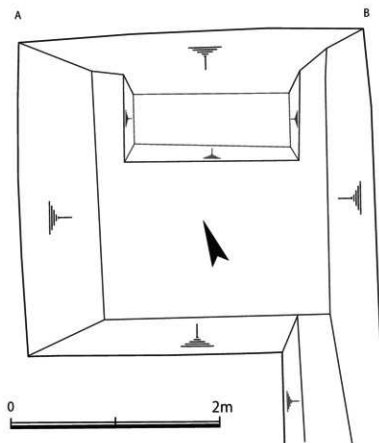


調査作業状況

16. 六条遺跡

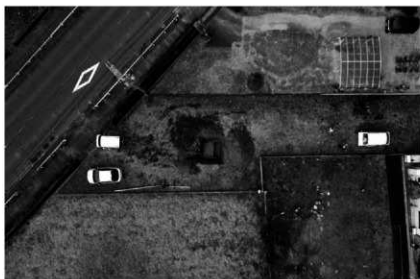


調査区北壁土層断面



調査区平面図

第3図 調査区平断面図



調査地全景



調査トレンチ



調査トレンチ北壁断面

17. ^{にし が わら}西河原遺跡

調査地 野洲市西河原字六反田 883 番 4、885 番 1、886 番 1 の一部、887 番 1
調査原因 宅地造成
調査期間 令和 4 年 2 月 14 日～2 月 16 日

1. 調査経過

西河原遺跡は奈良時代から江戸時代にかけての集落跡と周知されている。西河原周辺からは 95 点の木簡が出土しており、古代の地域木簡として有数の出土数を誇る。内容は人名録などの公文書が多く、古代の地方役所の性格を解明するうえで重要な地域である。

調査地は遺跡の南西部にあたる。周辺の調査事例では、平成 7 年度に実施した第 7 次発掘調査で飛鳥～奈良時代を中心とする柱跡や溝、柵が検出されている(1)。

調査は宅地造成に伴う試掘調査で、道路敷設部(T-1～T-3)と擁壁敷設部(T-4～T-7)に調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。調査面積は約 82.0㎡である。

2. 調査成果

T-1 では、最上層に水田耕土、床土が堆積しており、オリーブ褐色砂層、黄灰色粘土層、灰色砂混粘土層、灰色粘土層が続く。それらの下層で確認した灰色砂質シルト層上面(地表面下約 0.7 m)で検出を試みたが、遺構・遺物は確認されなかった。重機による下層確認を行い、地表面下約 2.2 m でバラス層に到達したが、遺構・遺物は確認されなかった。

T-2 では、最上層に水田耕土が堆積しており、灰色粘土層、暗オリーブ灰色シルト層、オリーブ灰色シルト層、灰色砂混粘土層、灰色シルト層が続く。それらの下層で確認した灰色シルト層上面(地表面下約 1.1 m)で検出を試みたが、遺構・遺物は確認されなかった。T-3 は T-2 と似た様相を呈しており、灰色シルト層上面(地表面下約 1.1 m)で検出を試みたが、遺構・遺物は確認されなかった。いずれの調査区も地表面下約 2.5 m まで重機による下層確認を行ったが、大きな変化は認められなかった。



図1 調査地位置図・調査区配置図

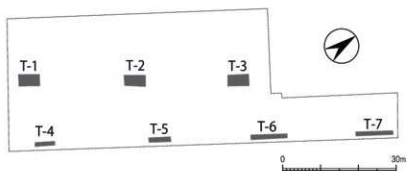


図2 調査区配置図

T-4～T-7は、擁壁敷設時の掘削深度である地表面下約0.7 mまで掘削を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。

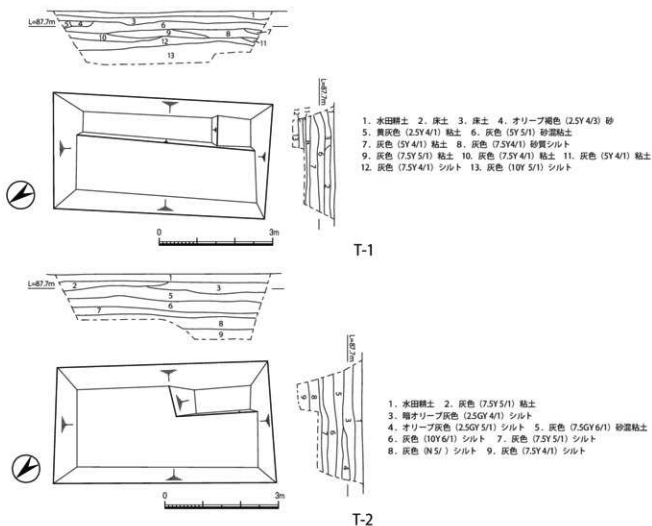


図3 調査区平面図・周壁土層断面図①

17. 西河原遺跡

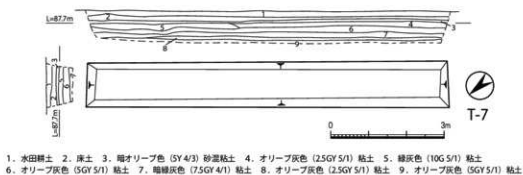
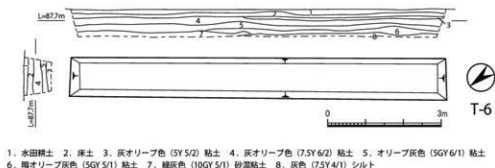
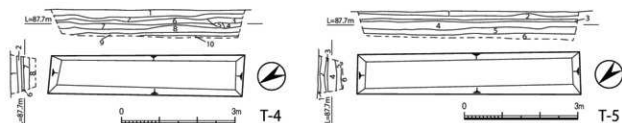
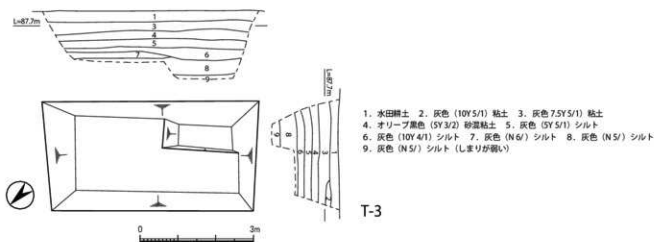


図4 調査区平面図・周壁土層断面図②

3. まとめ

遺構・遺物は確認されず、本調査地は西河原遺跡の縁辺部と評価できる。

(芦塚)

参考文献

- (1) 中主町教育委員会 1997「第2章 西河原遺跡」『平成8年度 中主町内遺跡発掘調査集報1』



T-1 全景（北東から）



T-1 東壁土層断面

17. 西河原遺跡



T-1 南壁土層断面



T-2 全景（北東から）



T-2 東壁土層断面



T-2 南壁土層断面



T-3 全景（北東から）



T-3 東壁土層断面

17. 西河原遺跡



T-3 南壁土層断面



T-4 全景（南西から）



T-4 東壁土層断面



T-4 北壁土層断面



T-5 全景



T-5 東壁土層断面

17. 西河原遺跡



T-5 北壁土層断面



T-6 全景 (南西から)



T-6 東壁

17. 西河原遺跡



T-6 北壁土層断面



T-7 全景（南西から）



T-7 東壁土層断面

18. にしがわら 西河原遺跡

調査地 にしがわらあざばう まえ 野洲市西河原字坊ノ前 711 番 7、711 番 8、711 番 14
 調査原因 個人住宅
 調査期間 令和 4 年 2 月 16 日

1. 調査経過

西河原遺跡は、奈良時代から江戸時代にかけての集落跡と周知されている。

調査地は西河原遺跡の中央やや左側に位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。周辺の既往の調査として、平成 31 年（2019）には南側約 5 m 地点で調査(1)が行われているが明確な遺構・遺物とともに確認できていない。

現地での調査は令和 4 年 2 月 16 日に行った。

2. 調査成果

建物建築範囲に約 5.0 m の調査区を設定して調査をおこなった。

地表面下約 1.6 m まで掘り下げた結果、地表面下約 0.6 m までは造成土でその下に灰色中粒シルト層（2 層）、灰色中粒シルト層（4 層）、灰色細砂層（6 層）、灰色粘土層（8 層）が順に堆積し、地表面下約 1.2 m で灰色粘土層（10 層）を確認した。この層が遺構面と思われるが明確な遺構及び遺物は確認できなかった。遺構面のレベルは 86.7 m を測る。

3. まとめ

本調査地周辺の調査として、本調査地の東側の令和元年（2019）調査(2)が挙げられる。当調査地と同様で、明確な遺構は確認されていないことから本調査地周辺は集落の縁辺部にあたると思われる。

（渡邊）

（1）野洲市教育委員会 2020 『令和元年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』

（2）野洲市教育委員会 2021 『令和 2 年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』

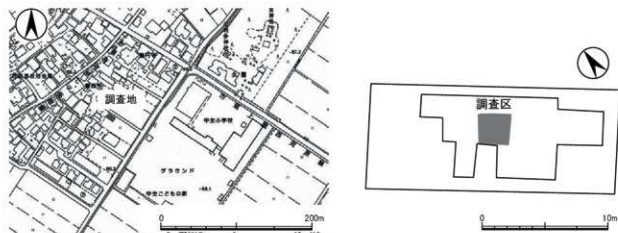


図1 調査地位置図・調査区配置図

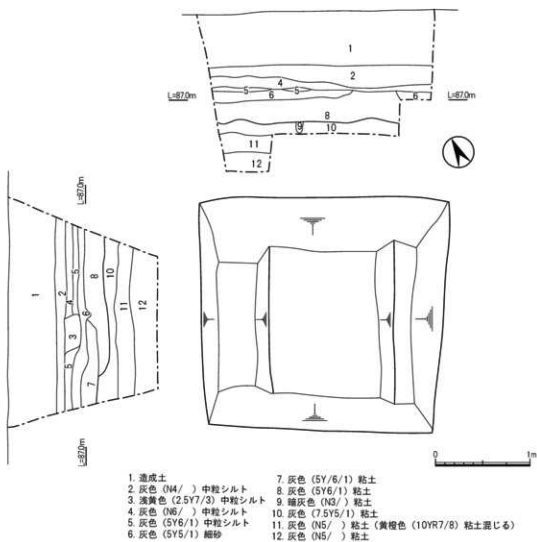


図2 調査区平面図・壁面図



調査区全景 (東から)



北壁土層断面 (南から)

19. 吉川東出遺跡

調査地 野洲市吉川字西浦 1451 番地 2
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 4 年 2 月 22 日

1. 調査経過

吉川東出遺跡は、中世から近世にかけての集落跡と周知されている。

調査地は吉川東出遺跡の北西隅に位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。周辺の既往の調査として、平成 25 年（2013）には南東側約 100 m 地点で調査が行われているが、明確な遺構・遺物とともに確認できていない。

現地での調査は令和 4 年 2 月 22 日に行った。

2. 調査成果

調査は、建物建築範囲に約 6.0 m²の調査区を設定した。地表面下約 1.3 m まで掘り下げた結果、上から造成土、にぶい黄褐色粗粒砂層（2 層）、褐灰色極細砂層（3 層）、褐灰色極細砂層（4 層）が堆積し、地表面下約 1.0 m で明黄褐色粗粒砂層（5 層）を確認した。図面等の記録を作成したのち、地表面下約 1.7 m まで掘り下げたところ、明黄褐色粗粒砂層は 0.7 m 以上堆積していた。この層が地山と考えられるが、明確な遺構・遺物とともに確認できなかった。明黄褐色粗粒砂層は河床堆積層と考えられる。

3. まとめ

本調査地の南東側約 100 m 地点での調査では、表土下約 1.35 m では明灰茶色の砂礫層が確認されており、本調査地で確認した明黄褐色粗粒砂層と同一のものと思われる。このことから、当地域は古くから河川が流れており、現在はその上に盛土で造成を行い、集落を形成していると考えられる。以上のことから、本調査地は吉川東出遺跡の縁辺部と評価できる。

（渡邊）

（1）野洲市教育委員会 2015『平成 25 年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』

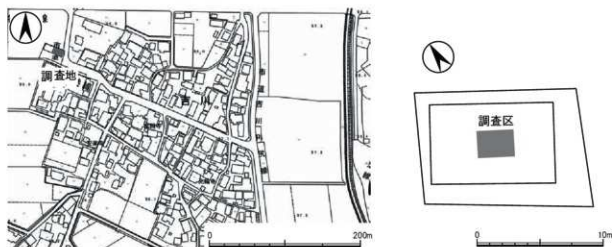


図1 調査地位置図・調査区配置図

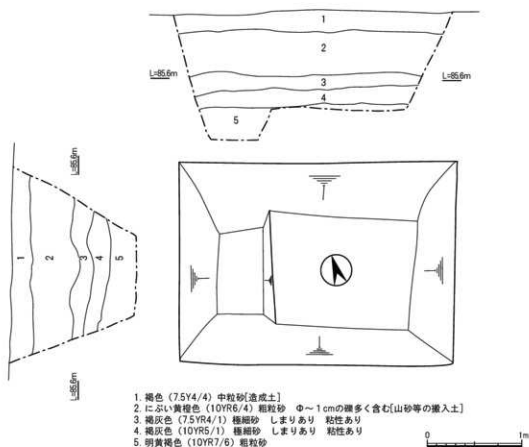


図2 調査区平面図・壁面図



調査区全景（東から）



東壁土層断面（東から）

ながしま 20. 長島遺跡

調査地 野洲市長島字大町 364 番
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 4 年 2 月 25 日

1. 調査経過

長島遺跡は、奈良時代の遺物散布地として周知の遺跡である。現在の長島の東側一帯に広がる遺跡で、これまでに奈良時代の遺物のほかに信楽焼の中世陶器等が出土している。なお、周辺は非条里地域で溜池が多く分布し、もとより低湿地が広がる地域である。

調査地は長島遺跡のほぼ中央部に位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に約 4.0m の調査区を設定し、試掘調査を実施した。周辺の既往の調査としては、平成 16 年（2004）に南西側約 70 m 地点で調査が行われ、落ち込み一基を確認しており、落ち込みからは羽釜が出土している（1）。

現地での調査は令和 4 年 2 月 25 日に行った。

2. 調査成果

調査は、建物建築範囲に約 4.0m の調査区を設定した。地表面下約 1.5 m まで掘削を行った結果、造成土の下に暗灰色極細砂層（2 層）があり、オリーブ灰色中粒シルト層（3 層）、灰色中粒シルト層（9 層）、灰色粘土層（11 層）などが堆積していた。その下で遺構面である灰黄色細砂層（15 層）を確認したが、遺構は確認できなかった。

3. まとめ

調査区では明確な遺構を確認することができず、本調査地は長島遺跡の縁辺部と考えられる。

また、本調査区はシルト層や細砂層が互層となって堆積しており、本調査地周辺は古くから低湿地であったことが示唆される。

（渡邊）

（1）野洲市教育委員会 2004 『平成 16 年度 野洲市内遺跡発掘調査概要 1（野洲編）』

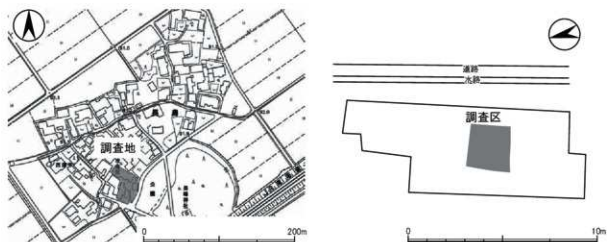


図1 調査地位置図・調査区配置図

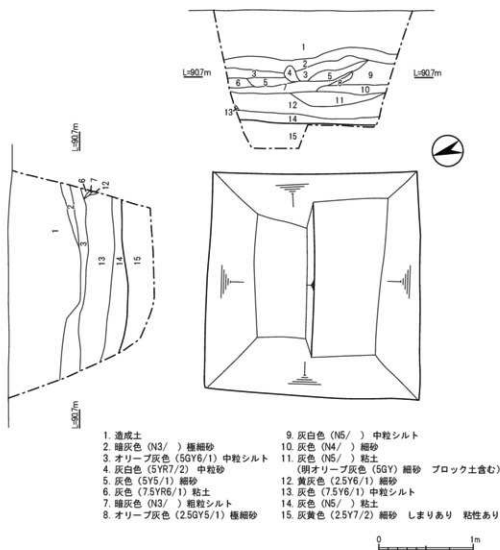


図2 調査区平面図・断面図



調査区全景 (北西から)



東壁土層断面 (北西から)

21. やぶにし の うしろ 八 夫 西 ノ 後 遺 跡

調 査 地 やぶにし の うしろ 野洲市八夫字西ノ後 1381 番 3、1382 番 8
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 4 年 3 月 2 日～3 月 10 日

1. 調査経過

八夫西ノ後遺跡は、奈良時代から室町時代にかけての寺院跡と周知されている。遺跡の規模は東西 400 m、南北 300 m にわたり、周辺には八夫遺跡、八夫流遺跡等が隣接する。

周辺の既往の調査では、平成 6 年度に実施した第 1 次調査で礎石 2 基とともに正方位に区画する南北・東西列の柵跡が検出され、柵跡の外側からは多量の瓦片が出土している⁽¹⁾。平成 13 年度の発掘調査では 2 面の遺構面を確認し、上面で 9 世紀～10 世紀の掘立柱建物群や区画溝、下層で弥生時代後期の方形周溝墓を検出している⁽²⁾ほか、平成 16 年度に実施した発掘調査では、奈良時代後半～平安時代前半の溝、掘立柱建物を検出し、寺と記された墨書土器が出土している⁽³⁾。

調査当初は試掘調査であったが、遺構が確認されたためそのまま継続して本発掘調査を実施した。最終的な調査面積は約 40m²である。

2. 調査成果

基本層序は第 1 層が砕石土、第 2 層が造成土、第 3 層が旧耕作土、第 4 層が遺物包含層、第 5 層が灰色粘土層、第 6 層が灰色砂層である。遺構は旧耕作土直下から切り込んでいたが、見極めが困難であったため、第 5 層上面まで掘り下げてその面を検出面とした。本来の遺構面のレベルは約 89.0 m (地表面下約 0.9 m) である。検出した遺構は掘立柱建物 1 棟と数基のピット、土坑、落ち込みである。



図1 調査地位置図・調査区配置図

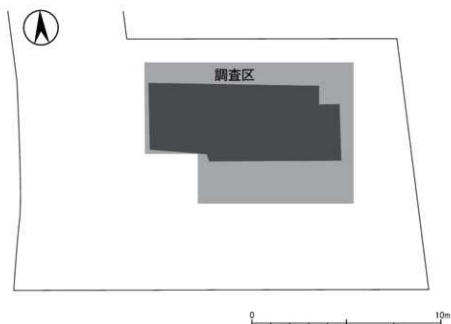


図2 調査区配置図

SB01 調査区の東側で検出した南北方向を主軸とする掘立柱建物である。柱穴2基のみの検出のため、平面プラン・規模ともに不明である。どちらの柱穴にも柱根が残存しており、柱根の大きさから建物と判断した(図3)。

SP01 調査区の中央部で検出したピットである。平面は長細い円形を呈し、深さ0.2mを測る。埋土はオリブ褐色粘質土の単層である。

SK01 調査区の中央部で検出した土坑である。平面はやや歪な円形を呈し、長さ約0.9m、深さ0.2mを測る。埋土は上層が灰色極細粒砂層、下層はオリブ黒色粘質

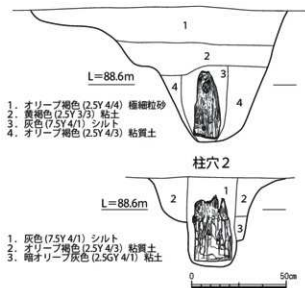
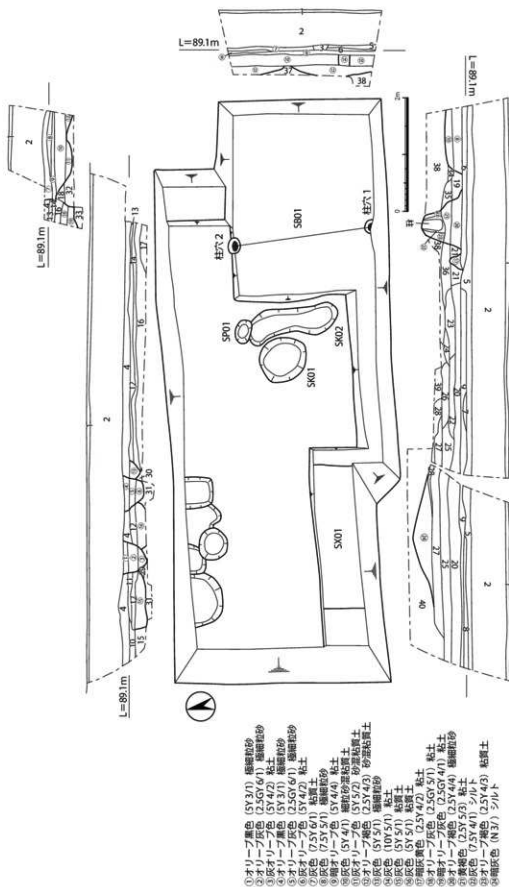


図3 柱穴遺構断面図



図4 遺構断面図



1. 除石土 [基本層序第1層] 2. オリーブ黒色 (SY 3/2) 粗粒砂質粘質土 (径10~60mm程度の塊を多く含む) [基本層序第2層] 3. オリーブ灰色 (2.5GY 5/1) 粘土 [第2層]
 4. 灰色 (7.5Y 5/1) 極細粒砂 [基本層序第3層] 5. 灰色 (7.5Y 4/1) 粘質土 [第3層] 6. 暗オリーブ色 (SY 4/4) シルト [第3層] 7. 暗オリーブ灰色 (2.5GY 4/1) 砂 [第3層]
 8. 灰色 (SY 5/1) 粘土 [第3層] 9. 暗オリーブ色 (7.5Y 5/2) 粘土 [第3層] 10. 暗オリーブ色 (7.5Y 5/2) 粘質土 [第3層] 11. 灰オリーブ色 (SY 5/2) 粘土 [第3層] 12. オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) 粘土 [第3層]
 13. 灰オリーブ色 (SY 4/3) 粘土 [第3層] 14. 暗オリーブ色 (2.5GY 4/1) 粘土 [第3層] 15. 灰色 (10Y 5/1) 粘土 [基本層序第4層] 16. 灰オリーブ色 (7.5Y 4/2) 粘土 [第4層]
 17. 暗オリーブ色 (SY 4/3) 粘土 [第4層] 18. 灰色 (10Y 6/1) 砂質粘質土 [第4層] 19. 灰色 (10Y 5/1) 粘土 (SY 4/2) 粘土 [第4層] 20. 灰オリーブ色 (SY 6/2) 粘土 [第4層]
 21. 灰褐色 (SY 5/1) 粘土 [第4層] 22. 灰褐色 (SY 5/1) 粘土 [第4層] 23. 灰褐色 (SY 5/1) 粘土 [第4層] 24. 灰褐色 (SY 5/1) 粘土 [第4層] 25. 灰褐色 (SY 5/1) 粘土 [第4層]
 26. 灰褐色 (SY 6/1) 粘土 [第5層] 27. 暗灰褐色 (2.5Y 4/2) シルト [第5層] 28. 暗灰褐色 (2.5Y 4/1) 粘土 [第5層] 29. 暗灰褐色 (2.5Y 4/2) 粘土 [第5層]
 30. 灰オリーブ色 (SY 5/2) 粘土 [第5層] 31. 黄灰色 (2.5Y 4/1) 砂 [基本層序第6層] 32. 灰色 (7.5Y 4/1) 砂 [基本層序第6層] 33. 灰色 (10Y 5/1) 塊かない砂 [第6層] 34. 灰色 (7.5Y 5/1) 砂質粘土 [第6層]
 35. 灰色 (10Y 6/1) 砂 [第6層] 36. 灰色 (2.5Y 5/1) 砂質粘質土 [第6層] 37. 灰色 (7.5Y 5/1) 砂質粘質土 [第6層] 38. 灰色 (7.5Y 6/1) 砂 [第6層] 39. 灰色 (SY 4/1) 砂質シルト [第6層]
 40. 灰色 (SY 4/1) 砂 [第6層]

図5 調査区平面図・土層断面図

土層である。少量の土器片が出土した。

SK02 調査区の中央部で検出した土坑である。平面は細長い瓢箪形を呈し、長さ約 1.6 m、幅 0.4 m、深さ約 0.2 m を測る。遺構の一部を前述の SP01 に切られている。埋土は単層で、黒褐色粘質土である。少量の土器片が出土した。

SX01 下層確認中に検出した落ち込みである。検出レベルは約 88.5 m（地表面下約 1.4 m）である。埋土は暗灰色シルトで、弥生土器の小片が 1 点出土した。このほか、調査区の北西部で数基のビット・土坑を検出した。

3. 遺物

本調査では、主に遺物包含層から古代の土器や瓦などの遺物が整理コンテナ 8 箱分出土した。全体としては小片が多く、以下に図示可能であった 27 点を報告する（図 6～10）。

1・2 は SB01 を構成する柱穴出土の柱である（図 6）。表面には工具による加工痕が認められる。1 は柱穴 1 から出土し、残存高 39.9 cm、底径 15 cm を測る。2 は柱穴 2 から出土し、残存高 35.6 cm、底径 19.5 cm を測る。

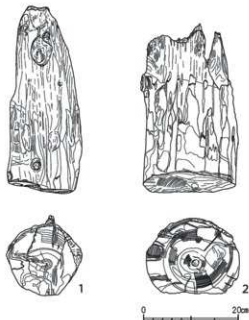


図 6 柱実測図

3～6 は土師器の燈明皿である。煤の付着が認められる。3 は平たい底部をもち、立ち上がりは直線的で、口縁端部はやや外反する。復元口径 11.0 cm、高さ 2.0 cm を測る。

7～9 は須恵器である。7 は杯蓋で、復元口径 11.8 cm、残存高 1.8 cm を測る。内外面にロクロナデを施す。8 は高台をもつ壺の底部で、復元底径 15.4 cm、残存高 6.7 cm を測る。ローリングの影響を受ける。9 は平底の壺の底部で、復元底径 8.8 cm、残存高 8.1 cm を測る。

土器は土師器が 8 世紀、須恵器は 8 世紀後半にそれぞれ比定できる。

瓦は整理コンテナ約 6 箱分出土した。丸瓦と平瓦の比率は平瓦が圧倒的に高く、これには小片のため丸瓦と認識しえなかったものも多分に含まれると思われる。軒瓦は出土しなかった。

10～13 は丸瓦である。10 は残存幅 5.2 cm、残存高 7.1 cm、厚さ 1.9 cm を測る。凸面を縦方向のヘラケズリで仕上げ、凹面には布目、工具痕が残る。凸凹面の側面を面取りする。色調は浅黄橙色を呈

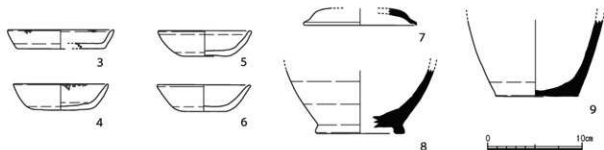


図 7 出土遺物実測図①

21. 八夫西ノ後遺跡

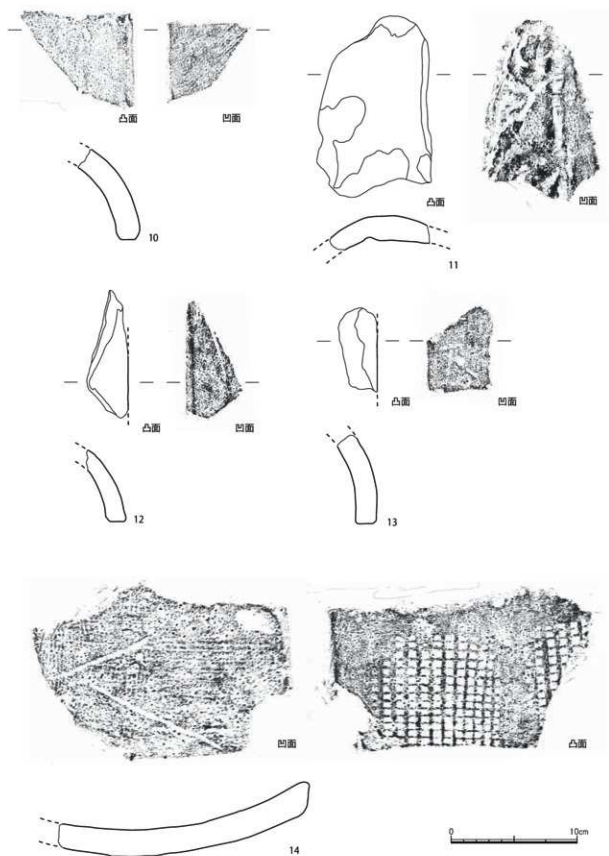


図8 出土遺物実測図②

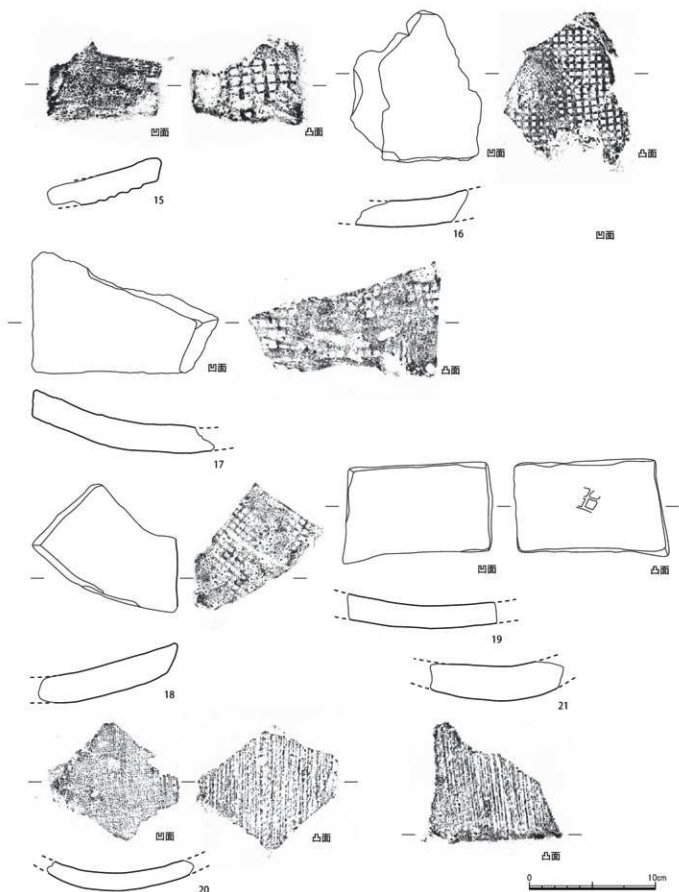


図9 出土遺物実測図③

21. 八夫西ノ後遺跡

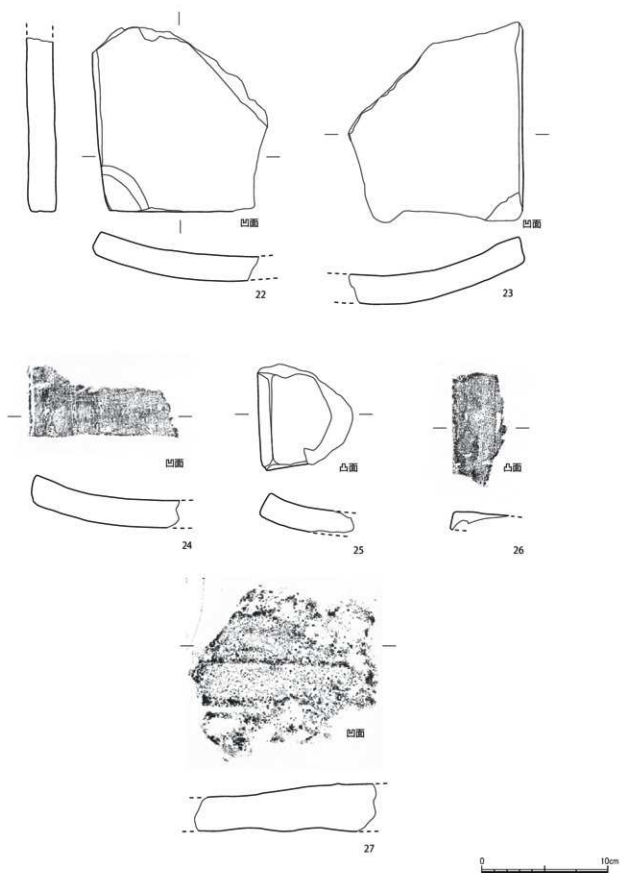


図10 出土遺物実測図④

し、胎土は2mm以下の砂粒を含む。焼成は硬質である。11は残存幅8.5cm、厚さ1.7cmを測る。凹凸面ともに摩耗が激しく、凹面に布目が僅かに残り布の縦目が確認できる。色調は灰白色を呈し、胎土は5mm以下の砂粒を含む。焼成は軟質である。12は残存幅3.2cm、5.6cm、幅1.5cmを測る。凹凸面ともに摩耗が激しく、凹面に布目が僅かに残る。凹面の側面を面取りする。色調は黄灰色を呈し、3mm以下の砂粒を含む。焼成は硬質である。13は残存幅3.1cm、残存高7.0cm、厚さ1.7cmを測る。凸面は摩耗しており、凹面には布目が残る。色調は灰白色を呈し、胎土は2mm以下の砂粒を含む。焼成は硬質である。

14～26は平瓦である。凹面の調整方法から、格子タタキ目を残すもの、縄タタキ目を残すもの、摩耗によって調整方法が不明のもの3つに大別できる。

14～19は凸面に格子タタキ目を残す平瓦である。格子タタキ目は正格子(14～18)と斜格子(19㊟)の2種類が認められる。14は残存幅20.3cm、残存長14.7cm、厚さ2.0cmを測る。凹面には布目残り、模骨痕は観察されない。凸面に正格子タタキ目をよく残す。色調は灰白色を呈し、胎土は5mm以下の砂粒を含む。焼成は軟質である。15は残存幅8.8cm、残存長6.6cm、厚さ1.8cmを測る。凹面には布目残り、模骨痕は観察されない。凸面は正格子タタキ目をよく残す。色調は灰白色を呈し、胎土は2mm以下の砂粒を含む。焼成は軟質である。16は残存幅10.0cm、残存長11.6cm、厚さ2.1cmを測る。凹面は摩耗しているが、凸面は正格子タタキ目をよく残す。色調は浅黄褐色を呈し、胎土は5mm以下の砂粒を含む。焼成は硬質である。17は残存幅14.6cm、残存長9.5cm、厚さ2.2cmを測る。凹面には布目と布の縦じ目残り、模骨痕は観察されない。凸面は正格子タタキ目が僅かに残る。凹面側の側面を面取りする。色調は灰白色を呈し、胎土は2mm以下の砂粒を含む。焼成は軟質である。18は残存幅11.7cm、残存長7.4cm、厚さ2.1cmを測る。凹面は摩耗しているが、凸面は正格子タタキ目が僅かに残る。色調は黄灰色を呈し、胎土は細かな砂粒を含む。焼成は軟質である。

19は幅11.5cm、長さ7.0cm、厚さ1.8cmを測る。凹凸面ともに摩耗が激しいが、凹面に布目と布の縦じ目残り、模骨痕は観察されない。凸面に斜格子タタキ目が部分的に残る。色調は灰白色を呈し、胎土は2mm以下の砂粒を含む。焼成は軟質である。

20～21は凸面に縄タタキ目を残す瓦である。20は残存幅11.0cm、残存長10.5cm、厚さ1.4cmを測る。凹面には布目残り、模骨痕は観察されない。凸面は縄タタキ目目がよく残る。色調は褐白色を呈し、胎土は2mm以下の砂粒を含む。焼成は硬質である。21は残存幅10.9cm、残存長9.7cm、厚さ2.7cmを測る。凹面は剥離しているが、凸面に縄タタキ目が残る。色調は灰白色を呈し、胎土は2mm以下の砂粒を含む。焼成は硬質である。

22は残存幅13.6cm、残存長14.5cm、厚さ2.1cmを測る。凹凸面ともに摩耗しており、凹面に布目が僅かに残る。凸面の側面を面取りする。色調は灰白色を呈し、胎土は2mm以下の砂粒を含む。焼成は軟質である。23は残存幅13.7cm、残存長15.6cm、厚さ2.1cmを測る。凹凸面ともに摩耗している。色調は灰白色を呈し、胎土は2mm以下の砂粒を含む。焼成は軟質である。24は残存幅12.8cm、残存長5.8cm、厚さ2.2cmを測る。凹面に布目残り、模骨痕は観察されない。色調は灰白色を呈し、胎土は2mm以下の砂粒を含む。焼成は軟質である。25は残存幅7.4cm、残存長8.2cm、厚さ1.9cmを測る。凹凸面ともに摩耗している。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は細かな砂粒を含む。焼成は軟質である。26は残存幅4.6cm、残存長9.4cm、厚さ1.4cmを測る。凹面は布目がよく残るが、凸面は剥離している。色調は灰白色を呈し、胎土は細かな砂粒を含む。焼成は軟質である。27は厚さ3.6cmを測る。凹凸面を著しく摩耗しているが、凹面に模骨痕が観察できる。色調は浅黄褐色を呈し、胎土は細かな砂粒や小石を含む。焼成は軟質である。

21. 八夫西ノ後遺跡

4. まとめ

今回の発掘調査では遺物包含層から多量の瓦が出土し、古代寺院の存在が窺える。瓦から推測される古代寺院の建立時期は飛鳥時代白鳳期～奈良時代初頭で、瓦の葺替えが考えにくいこと、出土土器が8世紀後半を下限とすることから、その存続期間は短期間であったとみられる。遺構としては掘立柱建物の柱穴を2基検出したが、それ以外に特に顕著な遺構は認められなかった。掘立柱建物は遺物包含層を切り込んで柱穴を形成しており、寺院廃絶後の再開発によって建てられたものと考えられ、その際の整地土が遺物包含層にあたると推測される。掘立柱建物の年代は、柱穴の埋土から遺物が出土しなかったため不明確であるが、寺院の存続期間を考慮すると平安時代が上限と考えられる。平成6年度に実施した発掘調査では平安時代初期に比定される柵を検出しており、本調査で確認した掘立柱建物との関係が注目される。

調査の結果、当該地周辺に古代寺院が存在し、寺院廃絶後の再開発で掘立柱建物が建てられるといった変遷を明らかにすることができた。しかし、寺院関連の遺構は確認できず、古代寺院の規模・伽藍配置の解明は今後の課題として残る。包含層から出土した遺物の大多数が小片であることを考慮すると、寺院廃絶後の再開発によって古代寺院の遺構はすでに破壊されてしまっている可能性も考えられる。

(芦塚)

- (1) 中主町教育委員会 1997「第6章 八夫西ノ後遺跡第1次発掘調査概要」『平成6・7年度 中主町内発掘調査年報』
- (2) 中主町教育委員会 2003「第2章 八夫遺跡」『平成13年度 中主町内遺跡発掘調査年報』
- (3) 野洲市教育委員会 2005「第2章 八夫遺跡第12次発掘調査」『平成16年度 野洲市内遺跡発掘調査概要Ⅱ』



調査区全景（西から）



調査区全景（南東から）

21. 八夫西ノ後遺跡



調査区土層断面①



調査区土層断面②



調査区土層断面③



柱穴1断面

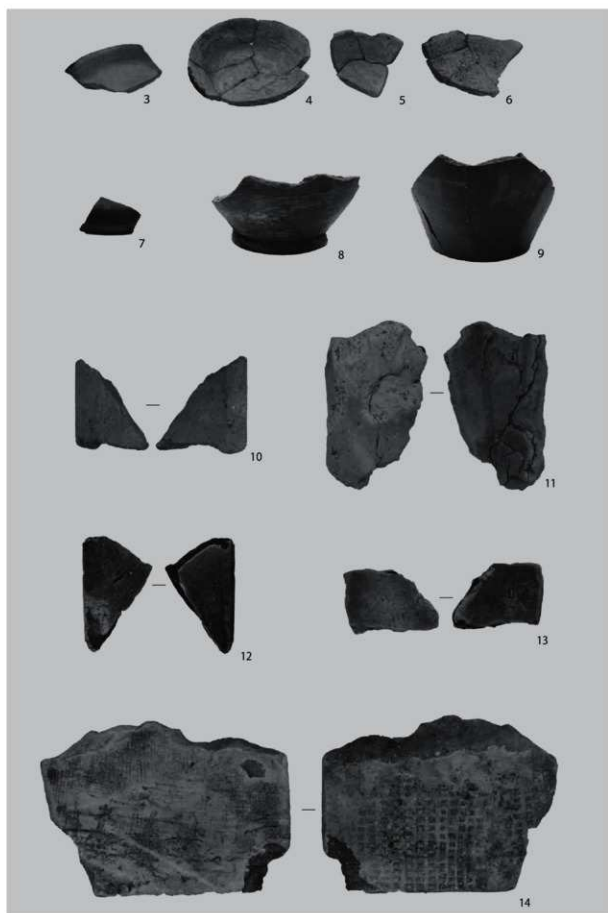


柱穴2断面

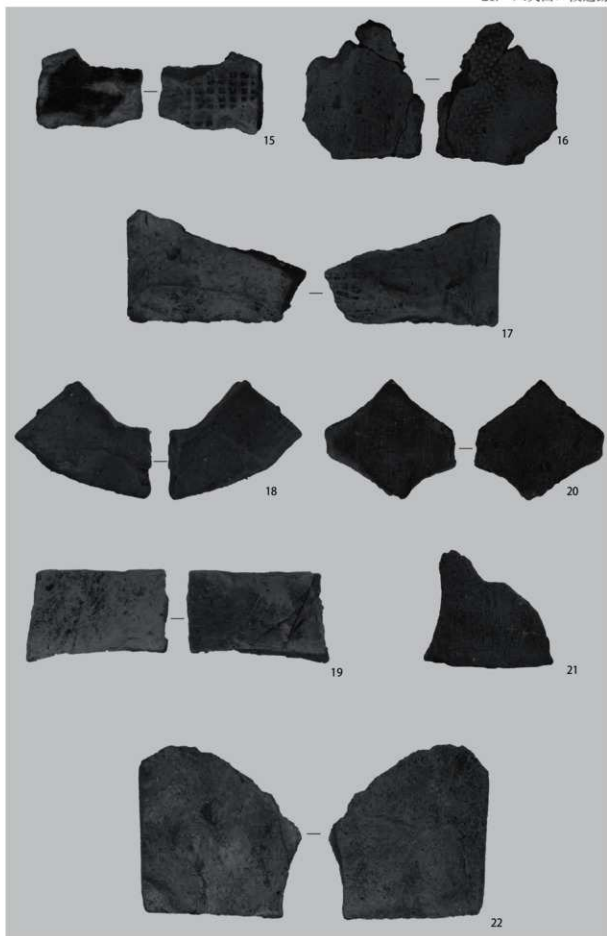


下層落ち込み断面

21. 八夫西ノ後遺跡

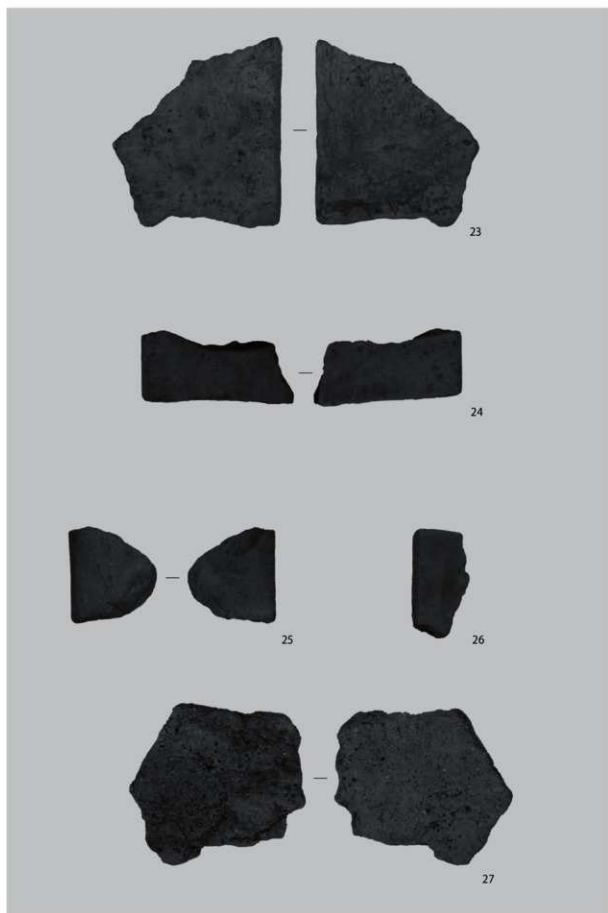


出土遺物①



出土遺物②

21. 八夫西ノ後遺跡



出土遺物③

22. ^{いのくち}井口遺跡

調査地 ^{いのくちあざひがしうちはた}野洲市井口字東内畑 606 番
調査原因 個人住宅
調査期間 令和4年3月3日

1. 調査経過

井口遺跡は、奈良時代から近世にかけての集落跡と周知されている。

調査地は井口遺跡の東側に位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。周辺の既往の調査としては、平成22年(2010)に南西側約80m地点で調査が行われ、柱穴跡を確認している⁽¹⁾。また、南西側100m地点でも平成22年(2010)に調査が行われ、堀跡や土塁状遺構を検出している⁽²⁾。両調査事例とも、中世の土器片が出土しており、中世集落の存在が指摘されている。

現地での調査は令和4年3月3日に行った。

2. 調査成果

調査は、建物建築範囲に約6.0㎡の調査区を設定した。地表面下約1.6mまで掘り下げた結果、地表面下約0.3mまでは造成土でその下に青灰色極細砂層(3層)、青灰色粗粒シルト層(5層)、黄灰色粗粒シルト層(6層)、黄褐色粗粒シルト層(8層)、褐灰色中粒シルト層(9層)が順に堆積し、地表面下約1.2mで暗オリーブ灰色粘土層(10層)を確認した。この層が遺構面と思われるが明確な遺構及び遺物は確認できなかった。遺構面のレベルは86.5mを測る。

3. まとめ

調査区では明確な遺構を確認することができず、本調査地は井口遺跡の縁辺部と考えられる。

(渡邊)

(1)(2) 野洲市教育委員会 2011『平成22年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』

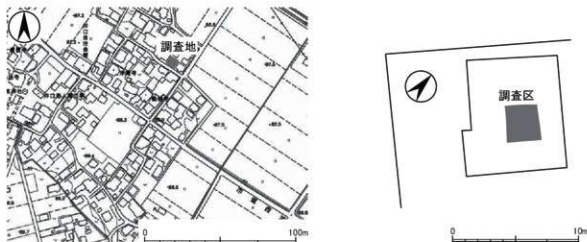


図1 調査地位置図・調査区配置図

22. 井口遺跡

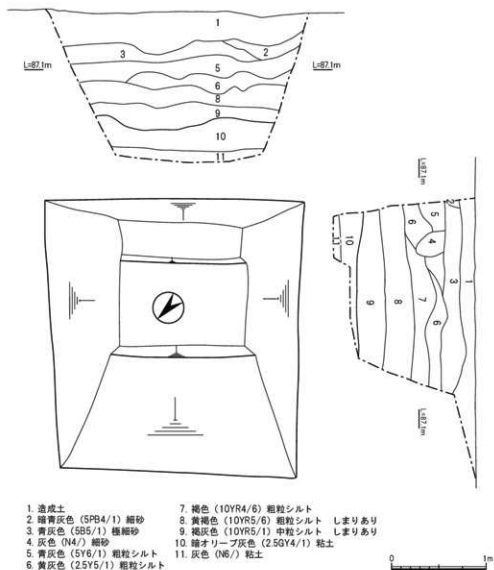


図2 調査区平面図・断面図



調査区全景（北西から）



東壁土層断面（北西から）

23. 井口遺跡

調査地 いのくちあざひがしうへはた 野洲市井口字東内畑 618 番 1
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 4 年 3 月 3 日

1. 調査経過

井口遺跡は、奈良時代から近世にかけての集落跡と周知されている。

調査地は井口遺跡の南東部に位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。周辺の既往の調査としては、平成 22 年（2010）に北西側約 50 m 地点で調査が行われ、柱穴跡を確認している⁽¹⁾。また、北東側 70 m 地点でも平成 22 年（2010）に調査が行われ、堀跡や土塁状遺構を検出している⁽²⁾。両調査事例とも、中世の土器片が出土しており、中世集落の存在が指摘されている。

現地での調査は令和 4 年 3 月 3 日に行った。

2. 調査成果

調査は、建物建築範囲に約 6.0m²の調査区を設定した。地表面下約 0.3m までは造成土で、その下に褐色極細砂層（2 層）、にぶい黄褐色細砂層（4 層）、にぶい黄褐色極細砂層（7 層）、褐灰色極細砂層（8 層）、褐灰色細砂層（9 層）が順に堆積し、地表面下約 1.1 m で暗オリーブ褐色細砂層（13 層）を確認した。この層が遺構面と思われ、ビットを 1 基確認したが土層間の切り合いが激しく、明確な遺構面として残存している状況ではなかった。

調査地からは 15～16 世紀代の土器が出土し、SP01 から遺物が出土している。図 3-1 は国産焼締陶器の播鉢である。播目は 6 条以上確認できる。図 3-2 は国産焼締陶器の播鉢である。信楽産と思われる、焼成はやや甘く、乳白色を呈す。15 世紀の所産と思われる。図 3-3 は焙烙である。外面には煤が付着する。15 世紀の所産と思われる。

3. まとめ

本調査地ではビットを 1 基確認し、15～16 世紀代の遺物が出土した。本調査地周辺の発掘調査

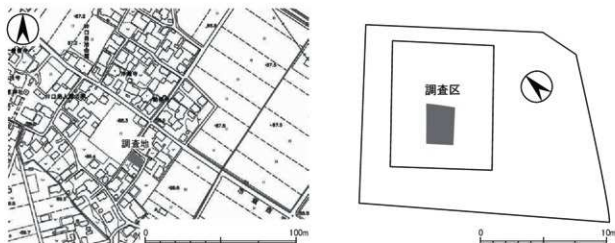


図1 調査地位置図・調査区配置図

23. 井口遺跡

例では、主に中世の遺構・遺物の存在が明らかとなっており、本調査地にも中世の遺構が存在することが明らかとなった。

(渡邉)

(1) (2) 野洲市教育委員会 2011『平成 22 年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』

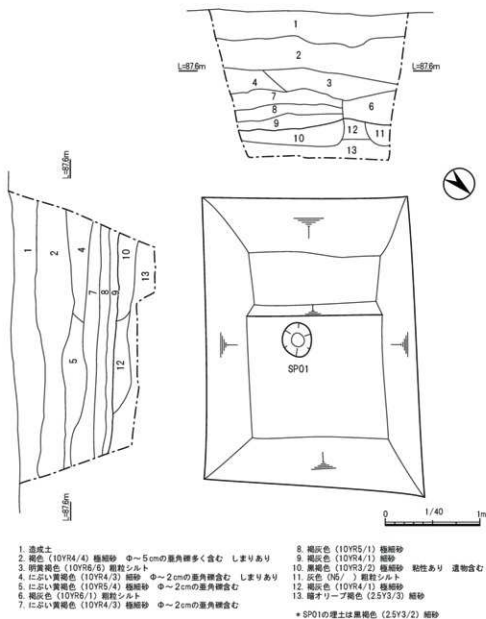


図2 調査区平面図・断面図

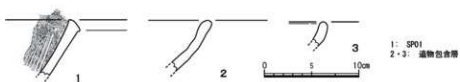


図3 遺物実測図



南壁土層断面



東壁土層断面



調査区全景（北西から）

24. 三上遺跡

調査地 野洲市三上字寺田 299-1 外 11 筆
調査原因 寺院建築
調査期間 令和 4 年 3 月 7 日～令和 4 年 3 月 9 日

1. 遺跡の概要

三上遺跡は、古墳時代から室町時代に至る複合遺跡として周知されており、調査地は、現地表面標高約 105.4m 付近の水田で、西に約 250m に位置する御上神社境内地が標高約 105 m、高低差約 50 cm で緩やかに西方向に傾斜する平地上に位置している。

南には野洲川が流れ主要地方道野洲・甲西線沿いには氾濫原が広がり、周辺調査で砂を被った層が確認されている。

既往の調査としては、50 箇所以上が調査されており、調査区周辺の主な調査は以下のとおりである。

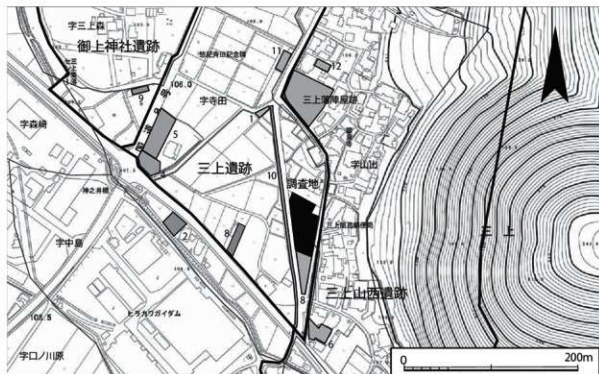
① 字寺田 431 番地の調査では調査面積約 15㎡、約 0.9 m まで掘削したが遺構・遺物は検出されなかった。(1986)

② 字寺田 293 番地の 8 の調査では調査面積約 30㎡、約 1 m まで掘削したが遺構・遺物は検出されなかった。(1989)

③ 字寺田 302 番地の 7 の調査では調査面積約 38㎡、約 1 m まで掘削して幅 0.8 m、深さ 0.2 m の溝 1 条が検出され、厚さ 20 ～ 30cm の砂に覆われていた。出土遺物はなかった。(1989)

④ 字寺田 293 番地の 8 の調査では調査面積約 2.6㎡、約 0.8 m まで掘削し黄褐色土の遺構面から群を確認したが、遺物は検出されなかった。(1987)

⑤ 字寺田 474 番地の 1 の調査では調査面積約 26㎡、約 1.5 m まで掘削したが遺構・遺物は検出さ



第 1 図 調査地位置図・既往調査図

れなかった。(1997)

⑥字寺田 279 番地の 8 の調査では調査面積約 21㎡で遺構は検出されず、遺物は土師器片が出土した。(1987)

⑦字寺田 285 番地の 1 の調査では調査面積約 120㎡、約 0.3 m まで掘削したが遺構・遺物は検出されなかった。(1990)

⑧字寺田 289 番地の 6 の調査では調査面積約 72㎡で掘立柱建物、遺構面からは、7～9 世紀の土師器、須恵器小片、13～14 世紀の土師器小皿、青白磁、瀬戸産鉢、砥石小片が検出されている。(2001)

⑨字寺田 478 番地の 3 の調査では調査面積約 115㎡、約 2.3 m まで掘削したが遺構は検出されなかったが、深さ 1～1.2 m で平安～鎌倉時代の土器片が出土している。(2002)

⑩字山出 462 番地の 1 他 23 筆の調査では調査トレンチを北から 8 箇所設定し、約 0.7～1.3 m まで掘削したが遺構は確認できなかったが、4～6 トレンチから弥生土器が出土し、7 トレンチからは古式土師器が出土している。(1998)

⑪字神守田 480 番地の 17 の調査では調査面積約 14㎡、約 1 m まで掘削したが遺構は検出されなかったが、上層より土師器片、須恵器片が出土している (2012)

⑫字山出 447 番地の調査では調査面積約 20㎡、約 0.8 m まで掘削したが遺構は検出されなかったが、上層より土師器片、須恵器片が出土している (1999)

これまでの調査例からは、⑧で掘立柱建物が検出された以外には明確な遺構は検出されていないが、弥生から室町時代頃の遺物が出土することから、遺跡が近接して存在していると思われる。

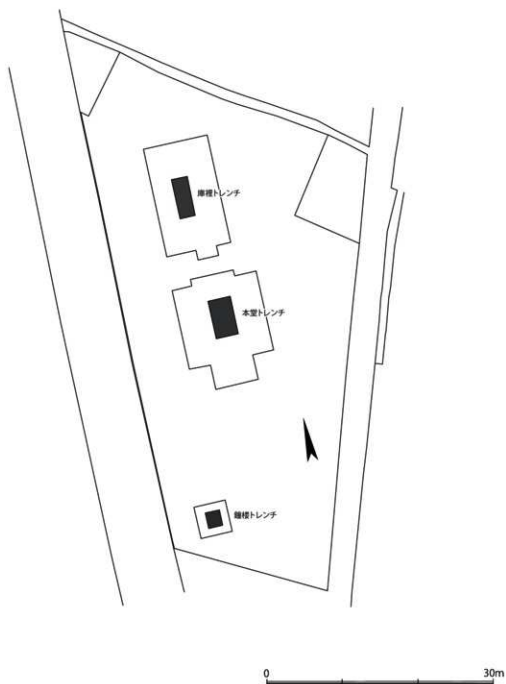
2・調査結果 建物建築範囲毎に調査区を設定した。

庫裡トレンチ 約 5.9 m×約 3.0 m、16.4㎡のトレンチを設け、地表面下約 1 m まで掘り下げた結果、基本土層は上から①灰色土（現水田）、②灰色土（旧水田）、③黄灰色土（床土）、④暗褐色土（小礫・土器を含む）、⑤暗褐色土（やや粘質）、⑥褐色土（礫を多く含む・地山）で遺構はなかった。遺物は⑥層から土師器・須恵器片が出土した。

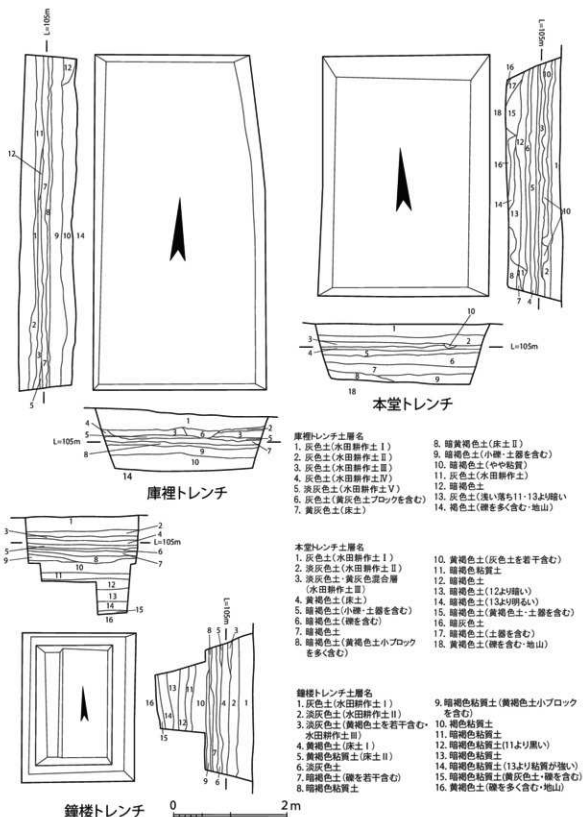
本堂トレンチ 約 4.0 m×約 3.0 m・約 12.0㎡のトレンチを設け、地表面下約 1 m まで掘り下げた結果、基本土層は上から①灰色土（現水田）、②淡灰色土（旧水田）、③黄褐色土（床土）、④暗褐色土（小礫・土器を含む）、⑤暗褐色土（礫を含む）、⑥暗褐色土、⑦黄褐色土（礫を含む・地山）で遺構はなかった。遺物は土師器・須恵器片が出土した。

鐘樓トレンチ 約 2.0 m×約 2.5 m・約 5.3㎡のトレンチを設け、地表面下約 1.7 m まで掘り下げた結果、基本土層は上から①灰色土（現水田）、②淡灰色土（旧水田）、③黄褐色土（床土）、④暗褐色土（小礫・土器を含む）、⑤暗褐色粘質土、⑥褐色粘質土、⑦暗褐色粘質土、⑧黄褐色土（礫を多く含む・地山）で遺構はなかった。遺物は土師器片が出土した。

現地表面から約 1.7 m（標高 103.75 m）で地山を検出しており、野庫裡・本堂トレンチの地山面が標高約 104.5 m で、南に隣接する③の調査では、現地表面から 1 m（標高約 104.5 m）付近で遺構を検出していることから、本トレンチ付近が大きな窪地または溝となっている可能性がある。



第2図 トレンチ配置図



第3図 トレンチ平断面図

24. 三上遺跡

3. 調査結果

今回の調査地からは、周辺調査で検出されている野洲川等の洪水に伴う砂の堆積がみられないことから、洪水の影響が少なく安定した場所で居住地や耕作地として適地あったと推定されるが、他の調査例と同じく明確な遺構が確認されていなかった、小片ではあるが古代から中世の遺物が出土していることから遺構が近接していると思われる。

古代から中世の集落については、更に（1 m～3 mほど）標高の高い三上山裾の現山出集落に遺構が位置しているとみるのが妥当と考える。

また、⑨の調査では弥生時代前期末から中期初頭の壺片や古式土師器片が出土していることから市道を挟んで西側に弥生時代の遺構が存在する可能性がある。

（杉本）



調査地全体



庫裡トレンチ（北から）



庫裡トレンチ西壁断面



本堂トレンチ（北から）

24. 三上遺跡



本堂トレンチ東壁断面



鐘樓トレンチ（北から）



鐘樓トレンチ南壁断面

25. 比留田遺跡

調査地 野洲市比留田字八ノ前 568 番 1
 調査原因 個人住宅
 調査期間 令和 4 年 4 月 6 日

1. 調査経過

比留田遺跡は、家棟川の氾濫原の微高地である自然堤防上に位置する弥生時代から江戸時代にかけての集落跡と周知されている。遺跡の規模は東西 500 m、南北 750 m にわたり、北は焼矢遺跡、東は木部遺跡、南は比留田法田遺跡、西河原森ノ内遺跡、西は西河原薄窪遺跡と隣接する。調査地は比留田の集落の北東部にあたる。

周辺の既往の調査では、同敷地内で実施された平成 28 年度の調査で浅いピットと落ち込み、鎌倉時代の遺物を確認している(1)ほか、北に約 80 m の地点で実施された平成 2 年度の調査では中世後半の溝を検出している(2)。

調査は個人住宅の建設に伴う試掘調査で、独立基礎部に約 2.4 m² の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

2. 調査成果

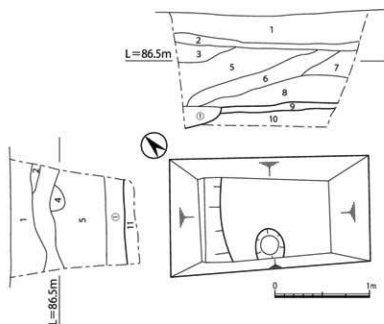
地表面下約 1.2 m まで掘削を行った。基本層序は第 1 層が造成土(図 2-1 ～ 4)、第 2 層が炭化物・遺物を含んだ暗褐色粘質土層(5 ～ 8)、第 3 層が黄灰色粘土層(9)、第 4 層が灰オリーブ色粘土層(10・11)である。遺構面は第 4 層上面であるが、第 3 層上面でも遺構が確認された。

検出した遺構は溝、ピットである。溝は第 3 層上面から切り込んでおり、遺物が出土していないため具体的な年代は不明であるが、年代的には新しいものと判断される。ピットは第 4 層上面で検出し、埋土からは中世の土器片が出土した。



図 1 調査地位置図・調査区配置図

25. 比留田遺跡



1. オリーブ黒色 (5Y 3/1) 極細粒砂 2. 暗褐色 (10YR 3/3) 極細粒砂 3. にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 極細粒砂
 4. 黄褐色 (2.5Y 5/3) 極細粒砂 5. 暗褐色 (10YR 3/3) 粘質土 (土器片・炭化物を含む)
 6. 灰色 (7.5Y 6/1) 極細粒砂 (土器片、炭化物を含む、しまりが弱い)
 7. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粘質土 (炭化物を含む) 8. 暗褐色 (10YR 3/3) 粘質土 (土器片・炭化物を含む)
 9. 黄灰色 (2.5Y 4/1) 粘質土 10. 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 粘土 (しまりあり) 11. 灰色 (10Y 4/1) シルト (混入物なし)
 ③ 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 粗粒砂混粘土

図2 調査区平面図・土層断面図

3. まとめ

本調査地は中世の集落跡と評価でき、比留田集落の北東部が中世段階から機能していることが確認された。

(芦塚)

- (1) 野洲市教育委員会 2017「22. 比留田遺跡」『平成 28 年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』
 (2) 中主町教育委員会 1992「第 11 章 比留田遺跡第 2 次発掘調査概要」『平成 2 年度 中主町内遺跡発掘調査年報』



全景（南東から）



北壁土層断面



西壁土層断面

26. にしがわらのゆのべ 西河原・湯ノ部遺跡

調査地 野洲市西河原字天皇前 2026 番外 11 筆
調査原因 宅地造成
調査期間 令和 4 年 4 月 13 日～5 月 25 日

1. 調査経過

西河原遺跡は奈良時代～江戸時代にかけての集落跡と周知されており、湯ノ部遺跡は弥生時代～室町時代にかけての集落跡と周知されている。周辺には西河原森ノ内遺跡、西河原宮ノ内遺跡、八夫遺跡、太田遺跡、光明寺遺跡等が隣接する。

周辺の既往の調査では、平成 7 年度に実施した西河原遺跡第 7 次調査で、飛鳥時代～奈良時代を中心とする柱跡や溝、柵を検出している(1)。滋賀県教育委員会による県道荒見上野近江八幡線改良工事に伴う発掘調査では、弥生時代中期から布留期にかけての方形周溝墓群、飛鳥時代～奈良時代を中心とする掘立柱建物や溝、鍛冶遺構が確認されており、多量の弥生時代前期の土器群、木偶、木簡が特筆すべき遺物として挙げられる(2)。また、本調査地を含む一帯は、ほ場整備に関連してグリッド調査が実施されており、本調査に設定された調査区から若干の遺物が出土したようであるが詳細は不明である(3)。

西河原周辺からは 95 点にも及ぶ木簡が出土しており、上記の調査結果を踏まえると、調査地周辺は官衙的な性格を帯びた地域として理解される。

調査は宅地造成に伴う試掘調査で、計画地のうち道路敷設部及び調整池設置部に計 23 カ所の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。



図 1 調査地位置図

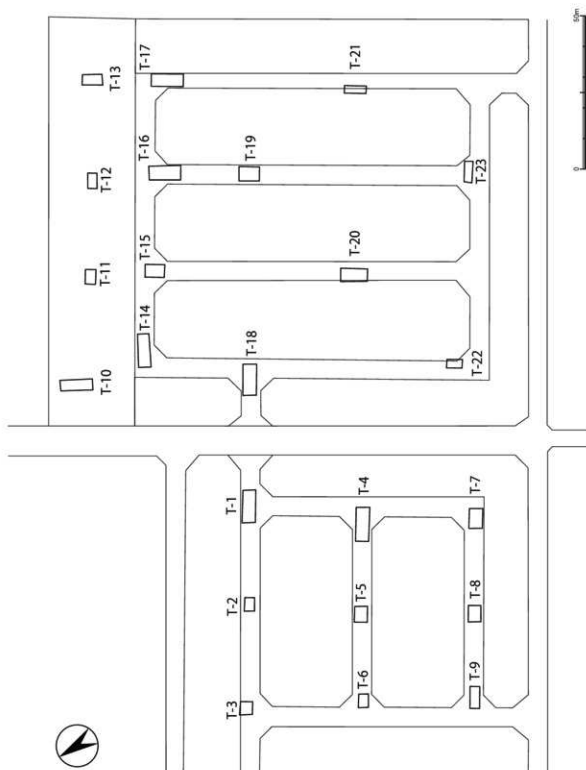
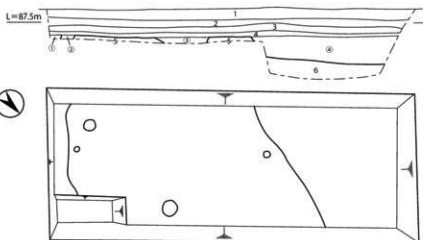


図2 調査区配置図

26. 西河原・湯ノ部遺跡

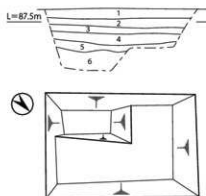
T-1

- | | |
|------------------------------|--------------------|
| 1. 水田粘土 | ①底色 (7.5Y 4/1) 粘土 |
| 2. 灰オリーブ色 (7.5Y 6/2) 粘土 | ②底色 (7.5Y 5/1) シルト |
| 3. 灰色 (7.5Y 5/1) 粘土 | ③底色 (10Y 4/1) シルト |
| 4. 黒褐色 (5YR 2/2) 粘土 | ④底色 (7.5Y 5/1) シルト |
| 5. 明褐色 (7.5YR 5/6) シルト [遺構面] | ⑤底色 (7.5Y 5/1) シルト |
| 6. 灰色 (5Y 4/1) シルト | ⑥底色 (7.5Y 5/1) シルト |
- ⑦植物遺体を含む
⑧土断片、植物遺体、木片を多く含む



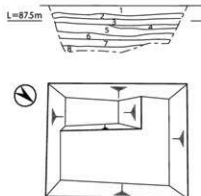
T-2

1. 水田粘土
2. 緑灰色 (7.5GY 5/1) 粘土
3. オリーブ黒色 (7.5Y 3/2) 粘土
4. 灰色 (10Y 4/1) 粘土
5. 灰色 (7.5Y 5/1) シルト
6. 灰色 (10Y 4/1) シルト



T-3

1. 水田粘土
2. 灰色 (7.5Y 5/1) 粘土
3. 灰色 (7.5Y 4/1) 粘土
4. 灰色 (10Y 5/1) 粘土
5. オリーブ灰色 (2.5GY 5/1) 粘土
6. 灰色 (7.5Y 4/1) シルト
7. 灰色 (10Y 5/1) シルト
8. 灰色 (10Y 5/1) シルト (混入物なし)



T-4

1. 水田粘土
2. 灰色 (10Y 4/1) 緑褐色砂
3. 灰オリーブ色 (5Y 4/2) 緑褐色砂
4. 灰色 (10Y 5/1) 砂混粘土
5. 灰色 (10GY 4/1) 粘土
6. 灰色 (10Y 4/1) 粘土
7. 暗オリーブ灰色 (2.5GY 4/1) シルト
8. オリーブ黒色 (10Y 3/2) シルト
9. オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 粘土 [遺構面]
10. オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) 粘土 [遺構面]
11. 灰色 (7.5Y 4/1) 粘土
12. 灰色 (7.5Y 4/1) シルト (混入物少ない)
13. 灰色 (10Y 4/1) 砂質シルト (混入物少ない)
- ①底色 (10Y 4/1) 粘土
- ②底色 (7.5Y 4/1) 粘土
- ③底色 (10Y 4/1) 粘土

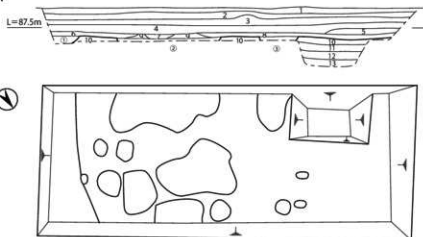


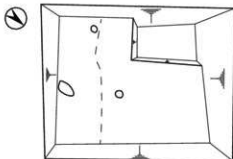
図3 調査区平面図・壁面土層断面図①



T-5

1. 水田耕土
2. 灰色 (5Y 5/2) 極細粒砂
3. 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 極細粒砂
4. 灰色 (7.5Y 4/1) 粘土
5. 灰色 (7.5YR 5/1) 粘土
6. 灰色 (10Y 5/1) 粘土
7. 灰オリーブ色 (5Y 4/2) 粘土
8. 灰オリーブ色 (7.5Y 5/2) 粘土
9. 灰色 (10Y 4/1) シルト
10. 灰色 (10Y 4/1) シルト (混入物なし)

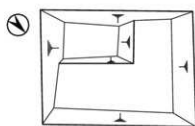
L=875m



T-6

1. 水田耕土
2. 灰色 (7.5Y 5/1) 粘土
3. 灰色 (7.5Y 4/2) 粘土
4. 灰色 (10Y 5/1) 粘土
5. 灰色 (10Y 5/1) シルト
6. 灰色 (7.5Y 5/1) シルト
7. 灰色 (7.5Y 5/1) シルト (混入物なし)

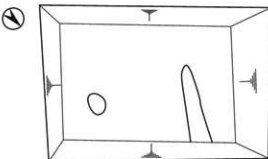
L=875m



T-7

1. 水田耕土
2. 灰色 (5Y 5/1) 粘土
3. 黒褐色 (2.5Y 3/1) 粘土
4. 灰オリーブ色 (7.5Y 5/2) 極細粒砂
5. 暗オリーブ色 (7.5Y 4/3) 粘土
6. 灰色 (10Y 5/1) シルト
7. 灰色 (7.5Y 4/1) 粘土
8. 灰色 (5Y 4/1) シルト

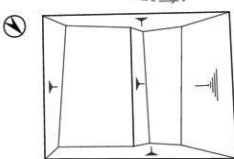
L=875m



T-8

1. 水田耕土
2. 灰色 (10Y 6/1) 極細粒砂
3. オリーブ黒色 (7.5Y 3/1) 粘土
4. 灰色 (7.5Y 4/1) 粘土
5. 灰色 (10Y 4/1) 粘土
6. 灰色 (10Y 5/1) 粘土
7. 灰色 (7.5Y 4/1) 粘土
8. 暗オリーブ色 (2.5GY 4/1) 粘土
9. オリーブ黒色 (10Y 3/1) 粘土 (混入物なし)
10. 暗オリーブ色 (5GY 4/1) シルト
11. 灰色 (10Y 5/1) シルト (混入物なし)

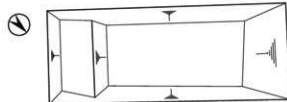
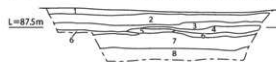
L=875m



T-9

1. 水田耕土
2. 灰色 (7.5Y 4/1) 粘土
3. 暗オリーブ色 (2.5GY 4/1) 粘土
4. 灰色 (7.5Y 5/1) 粘土
5. 灰色 (10Y 5/1) 粘土
6. 褐色 (10YR 4/6) 粘土
7. 灰色 (10Y 4/1) シルト
8. 灰色 (7.5Y 4/1) シルト (混入物なし)

L=875m



0 3m

図4 調査区平面図・壁面土層断面図②

26. 西河原・湯ノ部遺跡

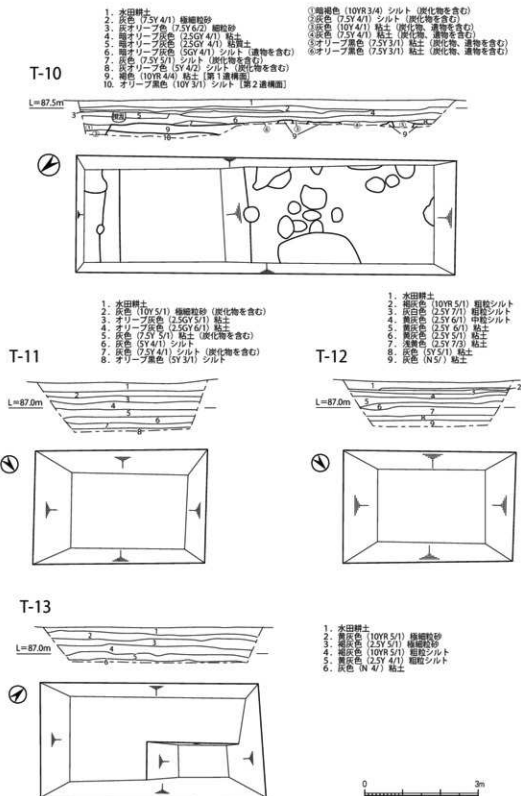


図5 調査区平面図・壁面土層断面図③

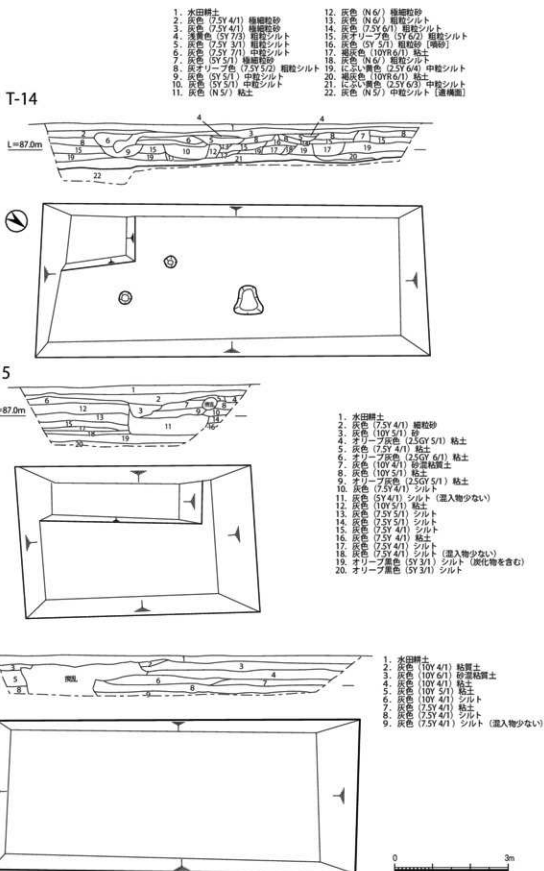


図6 調査区平面図・壁面土層断面図④

26. 西河原・湯ノ部遺跡

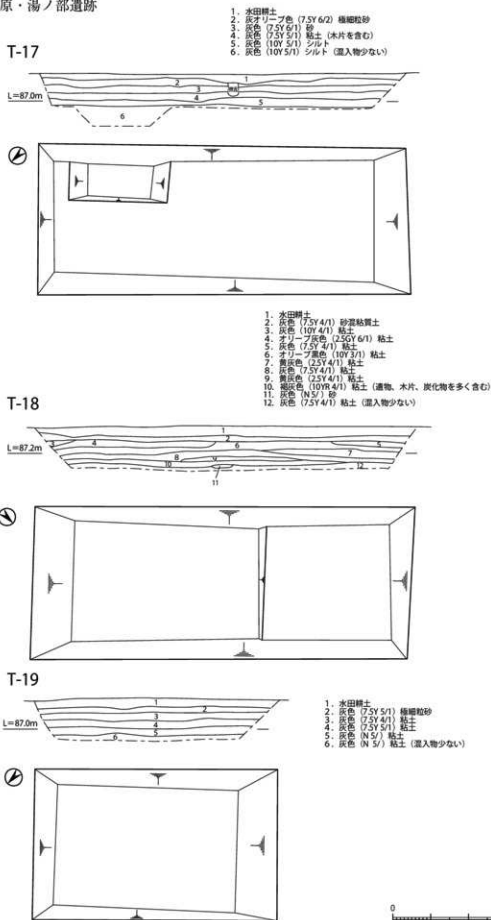
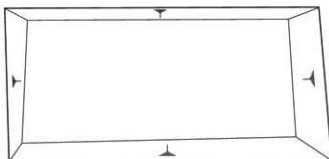


図7 調査区平面図・壁面土層断面図⑤

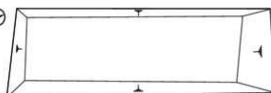
T-20

1. 水田耕土
2. 灰色 (7.5Y 6/1) 粘質土
3. 灰色 (7.5Y 5/1) シルト
4. 灰色 (7.5Y 5/1) 粘土
5. 灰色 (10Y 5/1) 粘土
6. 灰色 (7.5Y 4/1) 粘土
7. 灰色 (7.5Y 4/1) 粘土 (混入物少ない)



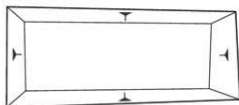
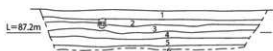
T-21

1. 水田耕土
2. 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 細粒砂
3. オリーブ褐色 (2.5Y 4/6) 砂
4. 灰色 (7.5Y 4/1) 粘土 (混入物少ない)



T-22

1. 水田耕土
2. 灰オリーブ色 (7.5Y 6/2) 粘質土
3. 灰色 (10Y 6/1) シルト
4. 灰色 (10Y 4/1) 粘土
5. 灰色 (7.5Y 4/1) 粘土
6. 灰色 (7.5Y 4/1) 粘土 (混入物少ない)



T-23

1. 水田耕土
2. オリーブ灰色 (2.5Y 6/2) 極細粒砂
3. 灰オリーブ色 (5Y 4/2) 粘土
4. 灰色 (10Y 4/1) 粘土
5. 灰色 (7.5Y 4/1) シルト
6. 灰色 (7.5Y 4/1) 粘土
7. 灰色 (7.5Y 4/1) 粘土 (混入物少ない)

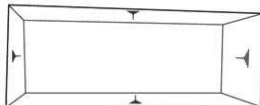
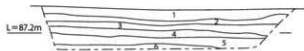


図8 出土遺物実測図

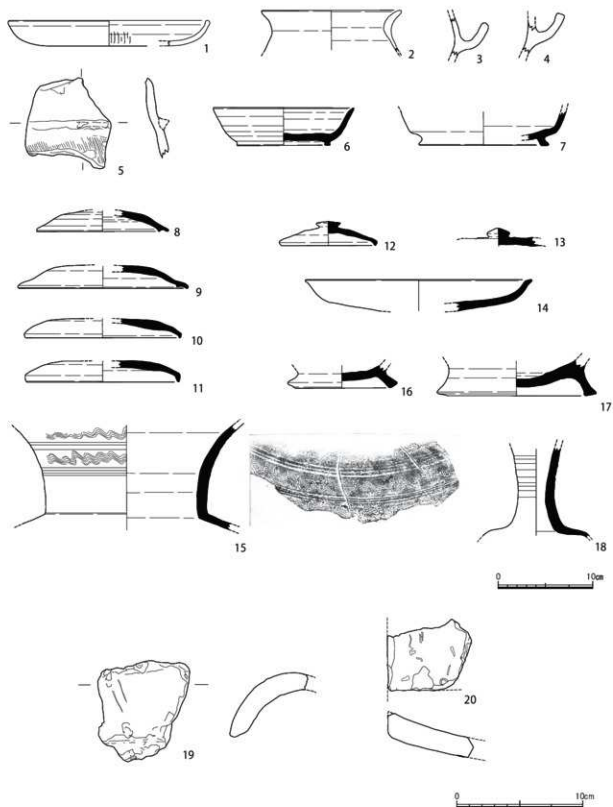


図9 出土遺物実測図

2. 調査成果

調査の結果、T-1、T-4、T-5、T-6、T-7、T-10において古代の遺構を確認した。遺構面は少なくとも2面以上存在しており、第1面が標高約87.1mの褐色粘土層、第2面が標高86.9mの灰色シルト層である。基本的に遺構は掘削せずに検出のみに留め、記録を取って調査を終了した。

3. 遺物

本調査では、整理コンテナ8箱分の遺物が出土した。遺物は主に重機掘削、精査時に出土したものである。それらのうち図化できたもの20点を調査区毎に報告する。

T-1 1は土師器の大皿で、復元口径20.8cm、高さ2.7cmを測る。内面に暗文を施すいわゆる畿内産土師器である。3は甕である。6・8・15～17は須恵器である。6は杯Bで、復元口径14.8cm、高さ4.0cmを測る。8はかえりをもつ杯蓋である。内面に煤が付着しており、燈明皿としても使用されたとみられる。15は甕の頸部に波状文を施す。16・17は高台付壺の底部である。

T-8 20は平瓦である。残存長5.8cm、残存幅7.1cm、厚さ1.6cmを測る。色調は灰色を呈し、焼成は硬質である。

T-9 4は甕の鐙である。

T-10 2は土師器の甕で、復元口径14.7cmを測る。5は土師質煙突の上部である。残存高8.4cm、厚さ約0.9cmを測り、器壁は薄い。推定復元口径は約15cmである。1条のタガを有し、タガより下部はタテハケを施す。内面にはユビオサエが残る。煙管端部は緩やかに高くなっており、手焙り土器のようなドーム状の覆いが付くものと考えられる。7・10・14・18は須恵器である。7は杯Bで復元口径13.8cmを測る。10は杯蓋である。14は皿で、復元口径23.8cm、高さ3.8cmを測る。18は壺の頸部である。

T-15 19は玉縁をもつ丸瓦で、凹面に布目が僅かに残る。色調は灰黄色を呈し、胎土は4mm以下の砂粒を含む。焼成はやや硬質である。

T-18 9・11～13は須恵器の杯蓋である。かえりをもつもの(9)ともたないもの(11～13)が混在する。12・13は宝珠つまみをもつ。

4. まとめ

調査の結果、部分的ではあるが古代の遺構面を2面確認し、煙突などの遺物が出土した。試掘調査の結果を受けて、届出者と協議を行い、本調査で遺構が確認された範囲において、令和4年7月から本発掘調査を実施している。本発掘調査結果は、来年度に報告予定である。

(芦塚)

- (1) 中主町教育委員会 1997「第2章 西河原遺跡(第7次発掘調査概要)」『平成8年度 中主町内発掘調査年報』
- (2) 滋賀県教育委員会 1995『県道荒見上野近江八幡線改良工事に伴う中主町内遺跡(Ⅱ) 湯ノ部遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
滋賀県教育委員会 1997『県道荒見上野近江八幡線改良工事に伴う中主町内遺跡(Ⅲ) 湯ノ部遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
滋賀県教育委員会 1998『県道荒見上野近江八幡線改良工事に伴う中主町内遺跡(Ⅳ) 湯ノ部遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
滋賀県教育委員会 1999『県道荒見上野近江八幡線改良工事に伴う中主町内遺跡(Ⅴ) 湯ノ部遺跡Ⅳ・西河原宮ノ内遺跡Ⅰ』
- (3) 滋賀県教育委員会・湖沼文化財保護協会 1986『はつ整備関係遺跡発掘調査報告書XⅢ-1』

26. 西河原・湯ノ部遺跡



T-1 検出状況（北西から）



T-1 南壁土層断面



T-1 西壁土層断面



T-2 全景（南東から）



T-3 全景（南東から）



T-4 検出状況（南東から）

26. 西河原・湯ノ部遺跡



T-4 南壁土層断面



T-4 西壁土層断面



T-5 検出状況（南東から）



T-5 南壁土層断面



T-5 西壁土層断面



T-6 全景（南東から）

26. 西河原・湯ノ部遺跡



T-7 検出状況（北西から）



T-7 南壁土層断面



T-7 西壁土層断面



T-8 検出状況（北西から）



T-9 全景（南東から）



T-10 検出状況（南西から）

26. 西河原・湯ノ部遺跡



T-10 東壁土層断面



T-10 南壁土層断面



T-11 全景（北西から）



T-12 全景（南東から）



T-13 全景（北東から）



T-14 検出状況（南東から）

26. 西河原・湯ノ部遺跡



T-14 南壁土層断面



T-14 西壁土層断面



T-15 全景（北東から）



T-16 検出状況（北東から）



T-17 検出状況（南西から）



T-18 全景（南東から）

26. 西河原・湯ノ部遺跡



T-18 南壁土層断面



T-19 検出状況（北東から）



T-20 全景（南西から）



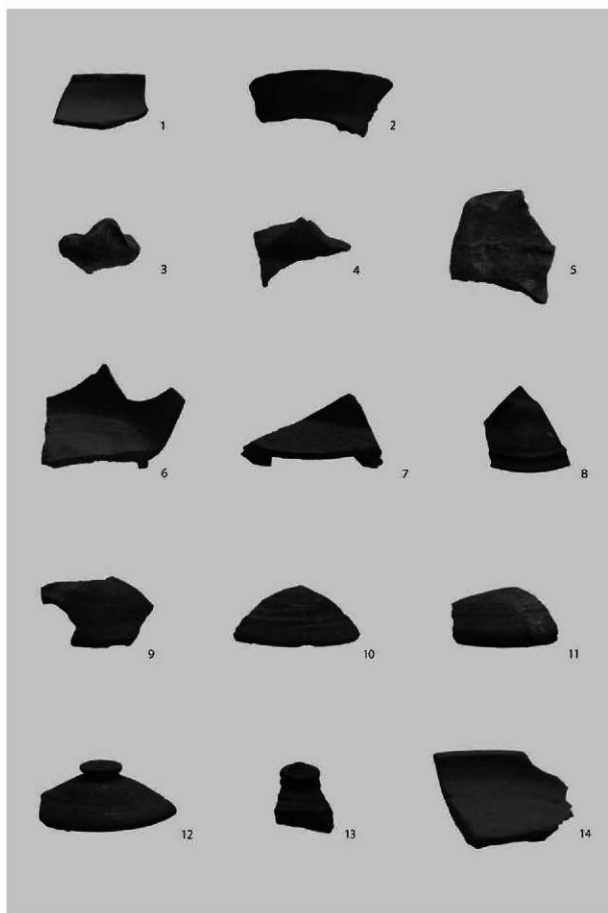
T-21 検出状況（南西から）



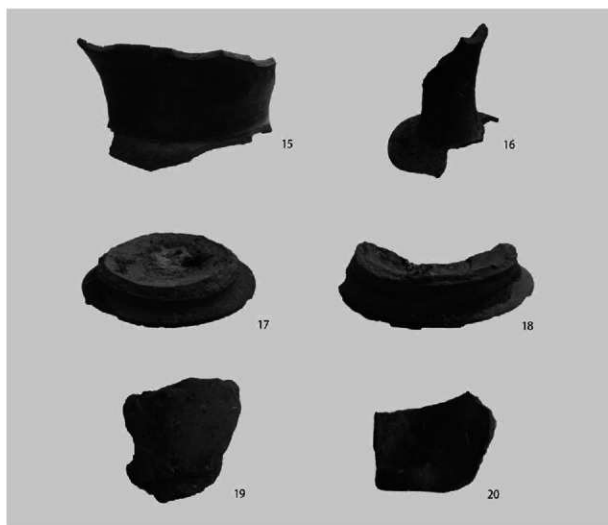
T-22 全景（北東から）



T-23 全景（北西から）



出土遺物①



出土遺物②

27. 久野部遺跡

調査地 野洲市久野部字南出 228 番 1、229 番、230 番 1、231 番 1

調査原因 宅地造成に伴う試掘調査

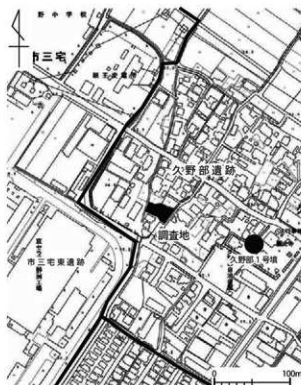
調査期間 令和 4 年 4 月 15 日

調査経過 久野部遺跡は、圓光寺を中心とする弥生時代から室町時代にかけての遺跡である。近隣の調査事例は、調査地の東約 100 m に所在する圓光寺一帯では耕作土直下で遺構を検出しているが、西北に至るほど旧地形が傾斜して低くなり、遺構密度も低下する。今回の調査地南西に隣接する平成 18 年度の試掘調査では、現地表下約 0.4 m のにぶい黄橙色シルト質土上面で近世井戸 1 基を検出したほか、下層で室町時代の遺物が少量出土したが、明確な遺構は認められなかった。このことから今回の調査では旧地形の傾斜境界部にあたる当該地で遺構の広がりを確認することを主眼として試掘調査を実施した。

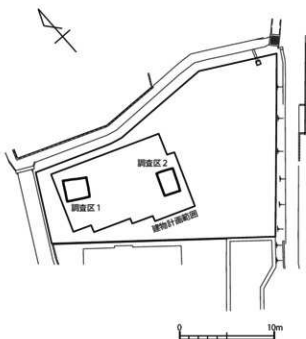
調査は 563.77㎡の対象地内に建築面積 151.19㎡の集合住宅を建設するもので、建物計画地の東西 2 箇所を試掘調査した。調査面積は約 15.0㎡である。

基本層序 上層から第 1 層：暗灰黄色土（耕作土）、第 2 層：にぶい黄色土、第 3 層：明黄褐色土、第 4 層：褐灰色粘質土、第 5 層：黄褐色粘土ないし明黄褐色粘質土である。西側の調査区（調査区 1）は、第 4 層褐灰色粘質土中で僅かに土器片と炭化物を含み現地表下約 80cm の明黄褐色粘質土上面（標高 94.1 m）で遺構を検出した。

東側調査区（調査区 2）では、第 4 層の褐灰色粘質土を欠き、現地表下 60-65cm の黄褐色粘土上面（標高 94.5 m）で遺構を検出した。



第 1 図 調査地位置図



第 2 図 調査区配置図

遺構・遺物 調査区1からは、南北方向の溝（SD1）と小ピット2基を検出した。SD1は幅45－50cm 深さ約10cmで黄灰色シルト質土を埋土とする浅い溝である。ピットは径15-20cm 深さ約20cmで褐灰色粘土を埋土とし、規模から垂直に打ち込まれた杭穴と考えられる。

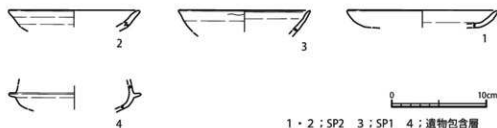
調査区2からは、固く締まった黄褐色粘土上面から掘り込まれた土坑とピットを検出した。これらはともに暗灰黄色礫混じり粘砂で埋まり、検出面の精査から西側土坑（SK1）が東側のピット（SP1）を切っている。SP1は上面が一辺60cmの隅丸方形を呈し、深さ約30cmを測る。SK1は長軸80cm、短軸45cm、深さ約30cmの楕円形土坑である。

遺物は、調査区2の土坑とピットから黒色土器碗や土師器皿などの中世土器片が出土した。調査区1では遺構に伴う遺物は認められなかったが、第4層の褐灰色粘質土中から7世紀前半の須恵器（坏H）や土師器甕の破片などが出土した。

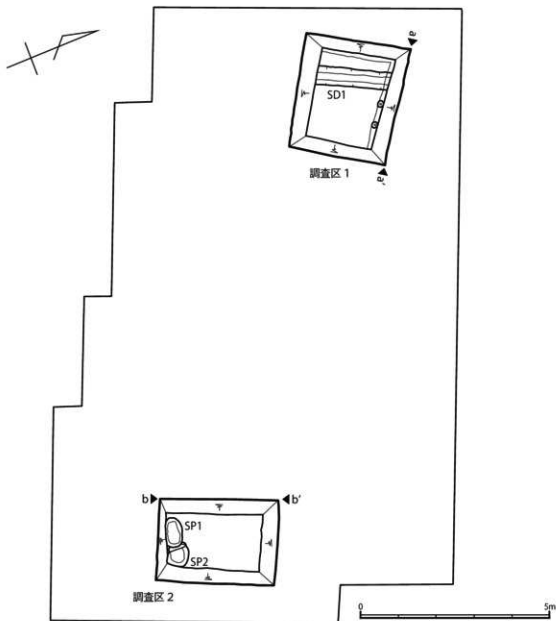
1・2は調査区2のSP2から出土した土師器の皿である。1は器壁が薄く口縁端部を尖り気味におさめ、2は器壁が厚く端部を外方に引出す。3はSP1から出土した黒色土器碗で、口縁部をヨコナデにより立ち上げ口縁端部に沈線をめぐらせる。内面と外面口縁部に煤を吸着させ、内面に螺旋状の粗いヘラ磨きを施す。口径13.8cm。

まとめ 試掘調査の結果、明確な中世遺構を検出した。東・西の調査区で遺構面に約35cmの高低差が認められ、一段低い西の調査区1からは上層から古代の遺物が認められ、東の調査区2からは中世の土坑とピットを検出した。このため届出者と協議のうえ改めて発掘調査を実施することとなった。遺構の性格や形成時期の特定など詳細は発掘調査により明らかとした。

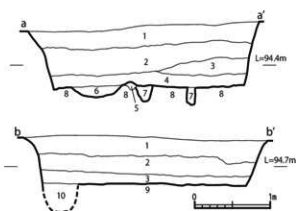
（進藤）



第5図 出土遺物実測図



第3図 遺構平面図



土層凡例：

1. 暗灰黄色 [2.5Y5/2] 土 (耕作土)
2. にぶい黄色 [2.5Y6/4] 土 (礫混入)
3. 明黄褐色 [2.5Y7/6] 土
4. 褐灰色 [10YR6/1] 粘質土 (わずかに炭化物・土師器片含む)
5. 褐灰色 [10YR4/1] 土
6. 黄灰色 [2.5Y6/1] シルト質土 (SD 埋土)
7. 褐灰色 [10YR4/1] 粘土 (8 をブロック状に含む)
8. 明黄褐色 [2.5Y6/8] 粘質土 (遺構面)
9. 黄褐色 [2.5Y5/6] 粘土 (固く締まる)
10. 暗灰黄色 [2.5Y4/2] 粘砂 (礫混入；SP1・2 埋土)

第4図 調査区周壁土層断面図



調査区 1 完掘状況



調査区 2 完掘状況



出土遺物

28. 小篠原遺跡

調査地 野洲市小篠原字附毛 1403 番 7、字狭間 1376 番 4

調査原因 住宅建設に伴う発掘調査

調査期間 令和 4 年 4 月 19 日から 4 月 21 日まで

調査経過 小篠原遺跡は、市街地中心部に重複し、大型前方後円墳「林ノ腰古墳」、郡衙推定地とされる古代を中心に縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。

調査地に近隣の調査事例では、東海道新幹線を挟んだ約 200 m 東北に林ノ腰古墳があり、調査地の北・東域では古代から中世にかけての寺院・集落と考えられる区画溝と多数の掘立柱建物群・井戸などを検出している。

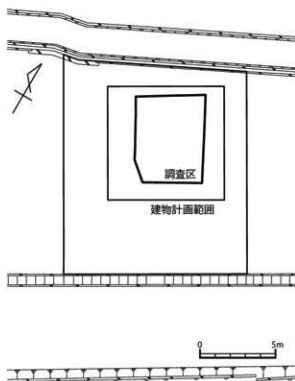
調査地の隣接地の調査では、北西方から北東方向に流れる水路の前身となる古墳時代からの流路と、柱穴などを検出している。今回の調査は、近接地との遺構の繋がりを掴み、遺跡の実態解明を主眼に調査した。

調査は、建物建築部分の中央部に東西 4.5 m 南北 5.8 m の調査区（約 26 m²）を設け調査を行った。

基本層序 調査区の東壁断面で、碎石造成土下に第 1 層：灰色粘質土（旧耕作土）、第 2 層：オリブ黄色土、第 3 層：黄褐色土、第 4 層：明黄褐色粘質土であった。遺構面は北壁直下に第 2 層上面（標高 97.65 m）から切り込まれた溝（SD1）があるほか、第 4 層上面（標高 97.4 m）で溝（SD2）や土坑（SK1）を検出した。北壁は第 1 層の旧耕土以下が SD1 の堆積土である。



第 1 図 調査地位置図



第 2 図 調査区配置図

遺構・遺物 調査区の北で検出したSD1は、上層に現代の堆積物を含む濁灰オリーブ色砂質土、濁黄灰色粘質土が堆積するが、下部の灰色シルト・粘土互層中からは古墳時代後期から古代の土器を含み、SD1は古墳時代まで遡る可能性が高い。下層で標高96.7mまで断割ったものの溝底は確認ではなかった。

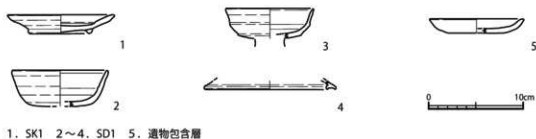
SD2は、調査区の南東で検出した幅1.6m以上、深さ35cmの溝状遺構である。溝の北肩は垂直に近く、南肩は未検出でさらに南へ広がる。北際に沿って幅40cm深さ3cmほどの浅く細長い溝を伴っている。溝底は砂礫を含む固い明黄褐色粘質土で、埋土は2層に分離でき、下層に灰黄色細砂、上層に暗灰黄色土が堆積する。

SK1は、南北0.8m以上、東西0.8mの不整形な土坑である。覆土から9世紀前半の灰軸陶器皿が出土した。二つの溝に挟まれたこの部分は東壁断面で明らかに南側に向かって高まり状を呈し、SD1の堤をなしていた可能性が高い。

1は、SK1の覆土出土の灰軸陶器皿。幅広い高台に見込と体部間に僅かな段をもたせた浅い皿がつく。口径10.8cm 器高2.0cm。2～4はSD1の下層から出土した古墳時代後期から飛鳥にかけての須恵器で、2は口径の小さな杯G。3は無蓋高坏の杯部。4は杯Gの蓋。このほかSD1の下層からは古墳時代の土師器片が出土している。5は上層の黄褐色土から出土した土師器皿である。

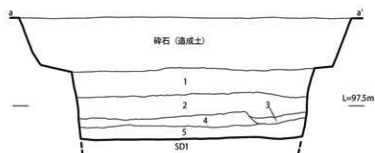
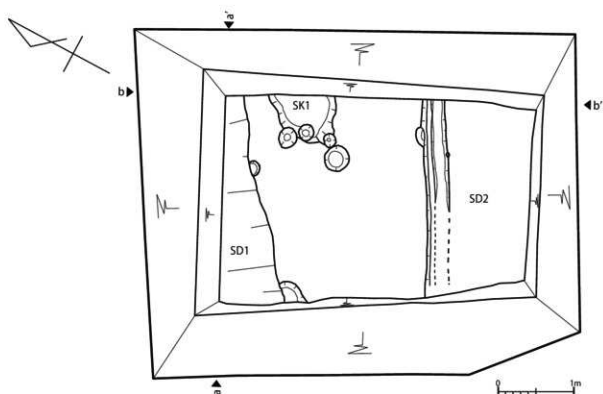
まとめ 隣接地の調査を総合すると、調査区の北で検出した溝（SD1）は、北東方向に流れ、最下層の出土遺物から古墳時代に遡る溝である。SD1は過年度の調査においても調査の北側を流れる河川に並行する溝を検出している。今回の調査結果からもSD1は幾度も改修が行われた形跡が認められた。SD2と合わせ集落間をぬうように設けられた水路とみられ、古墳時代から現在の普通河川（みなし川）まで連綿と踏襲された水路だと考えられる。

（進藤）

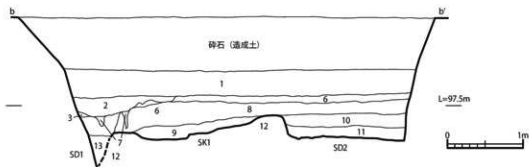


第3図 出土遺物実測図

28. 小篠原遺跡



- 土層凡例；
1. 灰色 [5Y4/1] 粘質土 (水田耕作土)
 2. 濁灰オリブ色 [5Y5/2] 砂質土 (SD1 埋土上層；近現代溝)
 3. にぶい黄色 [2.5Y6/3] シルト質土 (SD1 埋土上層；近現代溝)
 4. 濁灰黄色 [2.5Y6/2] 粗砂 (SD1 埋土上層；近現代溝)



5. 濁黄灰色 [2.5Y4/1] 粘質土 (SD1 埋土；近現代溝)
6. オリブ黄色 [5Y6/4] 土
7. 灰黄色 [2.5Y7/2] 砂
8. 黄褐色 [2.5Y5/3] 土 (固く締まる)
9. オリブ褐色 [2.5Y4/3] 粘質土 (SK1 埋土)
10. 暗灰黄色 [2.5Y4/2] 土 (SD2 埋土)
11. 灰黄色 [2.5Y6/2] 細砂 (SD2 埋土)
12. 明黄褐色 [2.5Y7/6] 粘質土 (上面が遺構面)
13. 灰色 [N4/0] シルト粘土互層 (SD1 下層)

第4図 遺構平面図 (上)・調査区周壁土層断面図 (下)



遺構完掘状況（南から）



遺構完掘状況（西から）



SK1 覆土遺物出土状況

29. 井口遺跡

調査地 野洲市井口 582 番
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 4 年 4 月 26 日

1. 調査経過

井口遺跡は奈良時代から江戸時代にかけての集落跡と周知されている。遺跡の規模は東西 600 m、南北 700 m にわたり、北は須原遺跡、東は六条遺跡、西を堤遺跡と隣接する。調査地は遺跡の東部に位置する。周辺の既往の調査については本書収載「22. 井口遺跡」を参照願いたい。

調査は個人住宅の建設に伴う試掘調査で、建物建築範囲に約 9.0m²の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

2. 調査成果

基本層序は第 1 層が造成土、第 2 層が暗灰黄色中粒砂層、第 3 層が灰色粗粒砂層、第 4 層が灰オリブ色色細粒砂層、第 5 層が緑灰色砂層、第 6 層が暗青灰色層である。

遺構は、第 5 層上面で落ち込みを検出した。落ち込みの埋土から遺物は出土しなかったが、第 5 層は杭や配水用に埋められたと推定される木片を含んでおり、年代的に新しいものと判断される。

部分的に地表面下約 1.6 m まで掘り下げて下層を確認したが、中世以前の遺構を確認することはできなかった。遺物は近世の瓦片や中世の信楽焼片などが少量出土した。

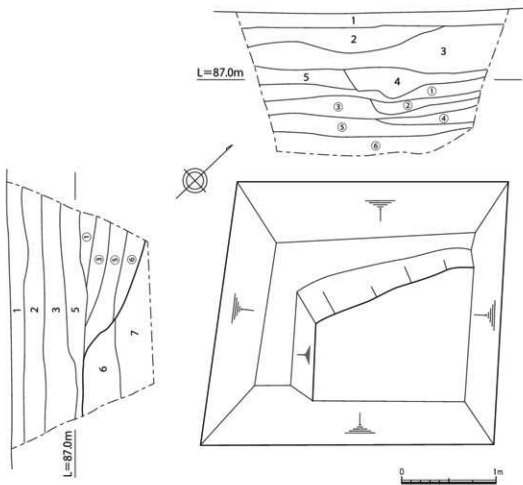
3. まとめ

明確な集落遺構は確認できなかったが、出土遺物から判断すると、少なくとも中世段階には調査地周辺の土地利用が開始されたと考えられる。

(芦塚)



図1 調査地位置図・調査区配置図



1. 表土 2. オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) 極細粒砂 3. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 中流砂 4. 灰色 (10Y 5/1) 粗粒砂
 5. 灰オリーブ色 (5Y 4/2) 細粒砂 6. 緑灰色 (10GY 5/1) 砂 7. 暗青灰色 (10BG 4/1) 砂
 ① 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 砂 ② 灰色 (10Y 6/1) 砂 ③ 灰白色 (7.5Y 7/1) 砂 ④ 灰色 (10Y 6/1) 砂混粘土
 ⑤ 灰色 (10Y 5/1) 砂混粘土 ⑥ 灰色 (10Y 5/1) 粘土

図2 調査区平面図・壁面土層断面図



完掘状況（北東から）



南壁土層断面



西壁土層断面

30. 小 篠 原 遺 跡

調 査 地 野洲市小篠原字沢町 1522 番地 2

調査原因 個人住宅

調査期間 令和 4 年 5 月 10 日・11 日

1. 調査経過

小篠原遺跡は、縄文から近世にかけての集落跡と周知されている。

調査地は小篠原遺跡の南隅に位置し、旧中山道に面している。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。

現地での調査は令和 4 年 5 月 10 日・11 日に行った。

2. 調査成果

地表面下約 0.2 m までは造成土でその下に黒褐色極細砂層（2 層）、オリーブ褐色極細砂層（3 層）、にぶいオリーブ黒色極細砂層（8 層）、暗褐色極細砂層（11 層）が順に堆積し、地表面下約 1.1 m で遺構面の灰黄褐色粗粒シルト層（15 層）を確認した。なお、地表面下約 1.2 m ではにぶい黄褐色極細砂層の地山を確認している。遺構面の灰黄褐色粗粒シルト層では多数のビットを検出した。遺構埋土は暗褐色極細砂土を基調とする。

遺物としては遺構精査時や重機掘削時に 15～16 世紀代の土器が出土した（図 3）。1～6 は土師器の皿である。1 は底部から口縁部にかけ直線的に立ち上がり、器壁は薄い。色調は乳白色を呈す。内面はナデ調整、外面はユビオサエ調整を施す。2 はいわゆる「へそ皿」であり、内面はナデ調整、体部外面はユビオサエ調整を施す。色調は乳白色を呈す。3 は底部の丸みが強く、内面はナデ調整、外面は基本的にユビオサエ調整を施すが、口縁端部のみヨコナデを施す。器壁は厚い。色調は赤褐色を呈す。7 は青磁である。内面には使用痕とみられる擦痕が見られる。4 は SP02 から出土した。口縁端部外面から内面にかけてナデ調整、外面はユビオサエ調整を施す。5 は口縁部を引き上げ気味に収め、内面はナデ調整を施す。6 は口縁部外面を一段ヨコナデ調整を施す。8 は信楽の播鉢である。内面には 3 条の播目が確認できる。外面には煤が全面にわたり付着する。

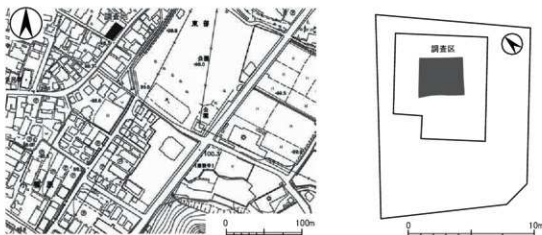


図 1 調査地位置図・調査区配置図

30. 小篠原遺跡

3. まとめ

本調査地の付近の調査例として、平成7年（1995）に北側約20m地点での発掘調査があり、当該調査周辺は中世の遺構が検出されている⁽¹⁾。今回の調査でも同様に中世の所産のものと考えられる遺物が出土し、本調査地一帯は中世の遺構が存在することが明らかとなった。

（渡邊）

（1）野洲町教育委員会 1996『平成7年度 野洲町内遺跡発掘調査概要』

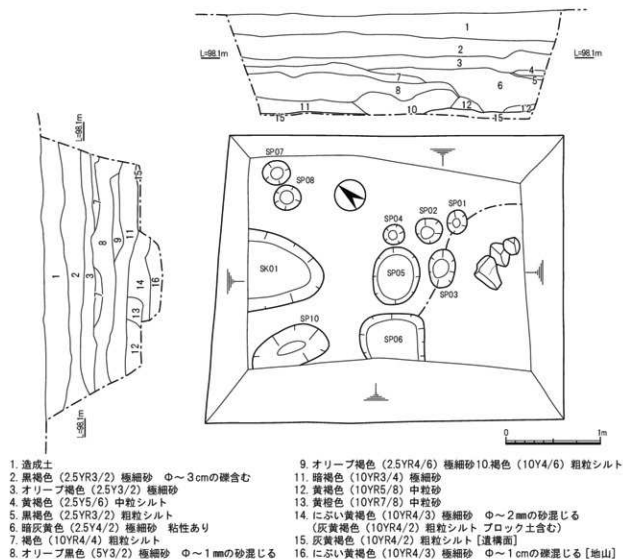


図2 調査区平面図・壁面図

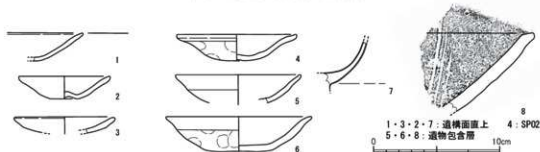


図3 出土遺物実測図



遺構検出状況（南西から）



完掘後（南西から）



北壁土層断面（南から）

31. 三上山西遺跡

調査地	野洲市三上山原 234 番 4、234 番 8、235 番 1、235 番 2、235 番 3、235 番 4、235 番 7、235 番 8、235 番 9
調査原因	工場建設
調査期間	令和 4 年 5 月 13 日

1. 調査経過

三上山西遺跡は、弥生・中世の集落跡と周知されている。

調査地は三上山西遺跡の南東隅に位置する。調査は工場建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。

現地での調査は令和 4 年 5 月 13 日に行った。

2. 調査成果

調査は、建物の基礎部分に約 10㎡の調査区を設定して調査をおこなった。地表面下約 1.3m まで掘り下げた結果、地表面下約 0.6m までは造成土でその下に黒色極細砂層（3 層）、灰オリーブ色極細砂層（5 層）、灰オリーブ色粗粒シルト層（7 層）、角礫を多く含む黒褐色極細砂（10 層）が順に堆積しており、地表面下約 1.2 m で遺構面である灰黄褐色粗粒シルト層（12 層）を確認した。

遺構は確認できず、遺物も出土しなかった。

3. まとめ

本調査地の北西側約 60 m 地点では平成 12 年（2000）に発掘調査が行われ、土坑や溝等を検出している⁽¹⁾。出土遺物としては須臾器や土師器の甕などが挙げられるが、遺構の性格は不明確なものがほとんどである。

今回の調査は、性格がわかる遺構の検出が望まれたが、本調査地では遺構・遺物とともに確認できなかった。

本調査地は三上山西遺跡の集落の縁辺部と判断される。

（渡邊）

（1）野洲町教育委員会 2003『野洲町文化財年報 2000』

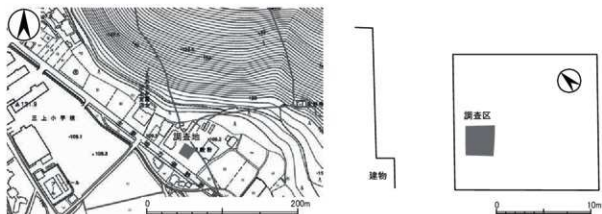


図1 調査地位置図・調査区配置図

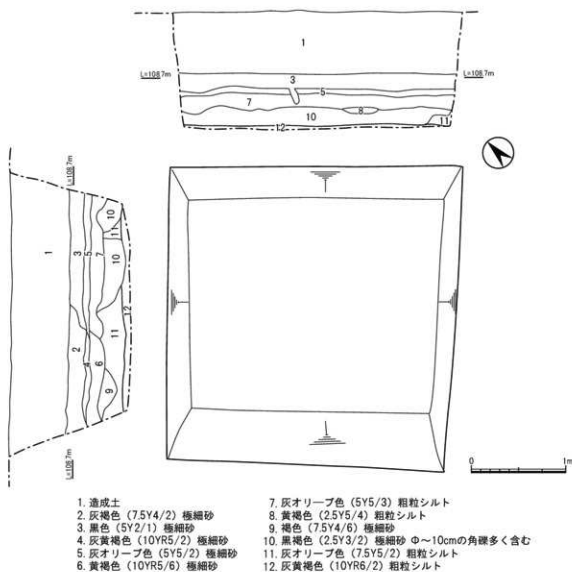


図2 調査区平面図・壁面図



西壁土層断面 (南東から)



調査区全景 (南西から)

32. おおのしのはらみなみ 大篠原南遺跡

調査地 野洲市大篠原字野村 2853 番 2、2854 番

調査原因 住宅建設に伴う発掘調査

調査期間 令和 4 年 5 月 19 日

調査経過 大篠原南遺跡は、岩倉山から北へ派生する丘陵裾部の大篠原字光谷・野村・篠山東山田にかけて広がる散布地である。昭和 54 年から 58 年にかけて実施した分布調査で古代から中世の遺物が散布していたが、これまで発掘調査は皆無である。

今回、住宅建設に先立ち、北西に隣接して慶長 3 年（1598）に性誓空山上人の開山とする浄土宗南北山勝安寺（本尊阿弥陀如来立像）があることなどから、試掘調査を実施した。

調査は、建物建築部分に東西 4.6 m 南北 3.3 m の調査区（約 15.2 m²）を設け調査を行った。調査区は、丘陵裾部を平坦に整地して建てられた宅地を解体して新たに住宅を建設するもので、表層に第 1 層：明黄褐色土と第 2 層：明黄褐色粗砂質土が堆積し、その下層に第 3 層：にぶい黄色土、第 4 層：灰色粘質土、第 5 層：灰黄色砂質土が堆積していた。

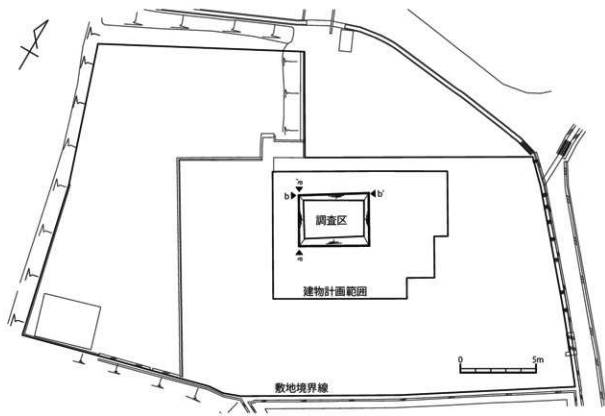
このうち安定した堆積を示す第 4 層及び第 5 層上面を精査して遺構検出を行った。

調査結果 この結果、調査区の西隅で第 3 層上面から構築された漆喰壁をもつ前住宅に伴う近現代の構造物がみられた以外、近世以前に遡る遺構・遺物は認められなかった。

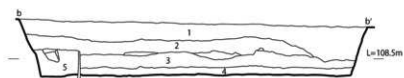
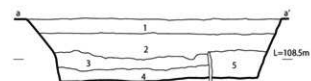
（進藤）



第 1 図 調査地位置図



第2図 調査区配置図



土層凡例；

1. 明黄褐色土（盛土）
2. 明黄褐色砂質土（盛土）
3. 灰色粘質土
4. 灰黄色砂質土
5. 淡黄色土（側面は漆喰）



第3図 調査区周壁土層断面図

32. 大篠原南遺跡



調査区全景（北東から）



調査区全景（南東から）



周壁土層断面（南東から）

33. ^{にし が わら}西河原遺跡

調査地 ^{にし が わら あざ にしうら}野洲市西河原字西浦 562 番 1 の一部、655 番の一部、665 番、666 番 3
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 4 年 5 月 23 日

1. 調査経過

西河原遺跡は、奈良時代～江戸時代の遺跡と周知されている。河川の氾濫に伴う自然堤防の微高地が乙窠→西河原→比留田と連続しており、当調査地周辺においては鎌倉時代から室町時代にかけての遺構・遺物の密度が高い状況である。今回の調査地は西河原旧村部の西側端部にあり、地形としては微高地の縁辺に近い。

なお、建物の工事計画で変更があり、本来必要である届出がなされなかったため、工事施工中に建物計画範囲に接して調査区を 1 か所設定した。調査区の面積は約 4.5㎡である。

2. 調査成果

調査区の基本層序は、地表面から約 0.3 m までが黄灰色土で畑耕作土である。0.3 ～ 0.6 m の深さでは暗灰黄色土、0.6 ～ 1.0 m ではオリーブ褐色土が認められる。地表面下約 1.0 m（標高約 87.8 m）において黄褐色土があり、この上面が近辺で検出される遺構面に相当すると見られる。その直下では、地表面下約 1.4 m（標高約 87.4 m）において灰色砂が認められる。

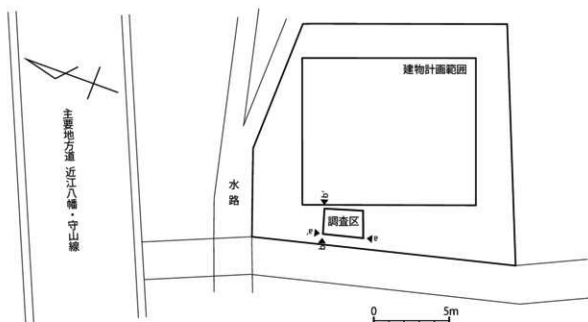
遺構面に相当すると見られる黄褐色土の上面で精査を試みたが、遺構を検出することはできなかった。また、その直下の灰色砂の上面においても遺構は確認できなかった。遺物も出土していない。

当調査地の周辺約 50 m の範囲内では、遺構・遺物を顕著に確認している。いずれも遺構面を形成する土層は固く締まった状態であったが、当調査地の土層は一様に締まりがあまく、湿り気が多い状態であった。下層に砂が堆積している状態からも、当調査地が一定の面積を有する地形的な落ち込みの範囲に存在することがうかがえる。

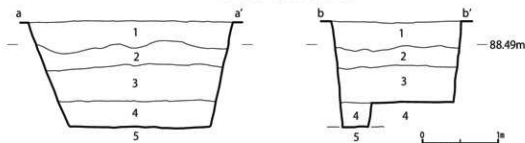
(福永)



第1図 調査地位置図



第2図 調査区配置図



第3図 周壁土層断面図



調査地全景



調査区全景



調査区全景

土層凡例；

1. 黄灰色 [2.5Y4/1] 土
2. 暗灰黄色 [2.5Y4/2] 土
3. オリーブ褐色 [2.5Y4/3] 土
4. 黄褐色 [2.5Y5/3] 土
5. 灰色 [5Y5/1] 砂

34. やぶ 八 夫 遺 跡

調査地 野洲市八夫字今林 1444 番の一部
 調査原因 住宅建設に伴う発掘調査
 調査期間 令和 4 年 5 月 24 日

1. 調査経過

八夫遺跡は旧野洲川が南流・北流に分岐地点の東に南北 1.8km、東西 0.9km にわたって広がる弥生時代から近世の遺跡である。遺跡は北東に延びる古野洲川の氾濫原の起因する微高地に立地する。調査地は遺跡の北部、現八夫集落内に位置する。1989 年度に実施した調査地南西部の試掘調査では、遺構を確認しておらず遺構確認を主眼に調査を行った。調査は建物建築部分に 3.1×4.0 m の調査区を設定し調査した。

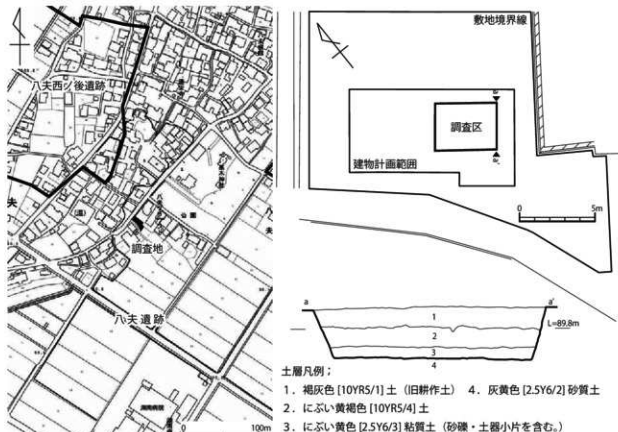
2. 調査結果

堆積土は、上層から第 1 層：褐灰色土（旧耕作土）、第 2 層：にぶい黄褐色土、第 3 層：にぶい黄色粘質土、第 4 層：灰黄色砂礫質土層である。第 3 層中に〈微細な〉土器片が認められ、第 4 層の灰黄色砂礫質土上面（標高約 89.4 m）を精査したが遺構は認められなかった。

3. まとめ

今回の調査地は八夫遺跡内の遺構空白域にあたとみられる。

（進藤）



第 1 図 調査地位置図 (左)・調査区配置図 (右上)・調査区周壁土層断面図 (右下)

34. 八夫遺跡



調査区全景（北西から）



調査区全景（北東から）



周壁土層断面（西から）

35. 常楽寺遺跡

調査地 野洲市富波字馬場甲 962 番 8
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 4 年 6 月 7 日

1. 調査経過

常楽寺遺跡は、中世の寺院跡・集落跡と周知されている。遺跡の規模は東西 500 m、南北 400 m にわたり、北は三堂遺跡、東は野々宮遺跡、南は富波東遺跡、西は富波遺跡と隣接する。調査地は遺跡のほぼ中央に位置する。

周辺の調査事例では、令和 2 年度に実施した宅地造成に先立つ発掘調査で、堀の可能性のある湿地帯や数基の土坑・ピットを検出し、14～16 世紀を中心とする土器、巴文をもつ軒丸瓦、宝珠と青海波の水波文をもつ軒平瓦、羽子板状木製品などが出土している(1)。

調査は個人住宅建設に伴う試掘調査で、建物建築範囲に約 6.0m²の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

2. 調査成果

基本層序は第 1 層が造成土、第 2 層が灰オリーブ色砂混粘質土(図 2-1)、第 3 層が灰色粘質土(2)、第 4 層が灰オリーブ色粘土層(3・4)、第 5 層が灰オリーブ色砂礫層(5)である。第 4 層上面が遺構面であり、標高約 91.3 m(地表面下約 1.4 m)である。

遺構は落ち込みを 2 基検出した。落ち込みの埋土からは黒色土器等の中世の遺物が出土したが、いずれも小片のため図化することはできなかった。遺構は完掘せずに工事の計画深度内の掘削に留め、調査を終了した。

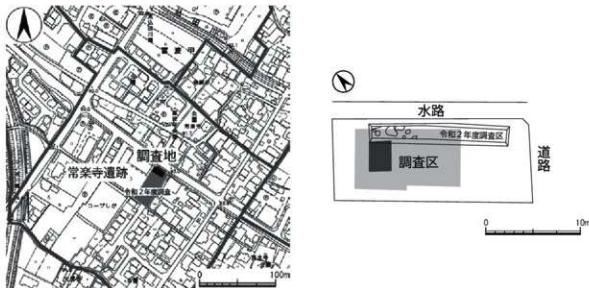


図 1 調査地位置図・調査区配置図

35. 常楽寺遺跡

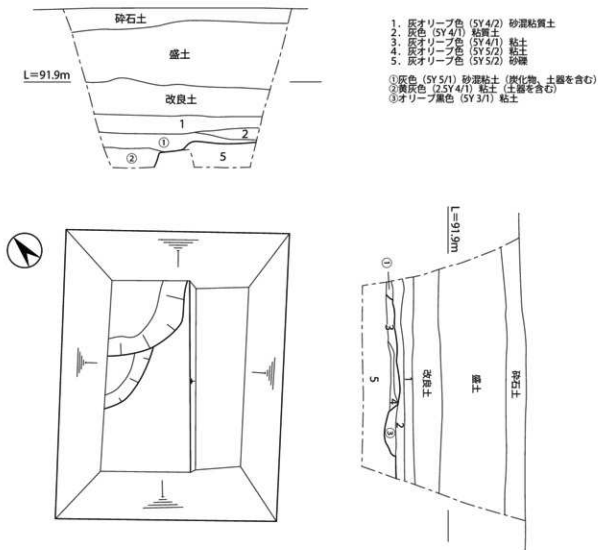


図2 調査区平面図・壁面土層断面図

3. まとめ

本調査の契機となった個人住宅が建設される造成地は、令和2年度に道路敷設部（T-1）と擁壁敷設部（T-2）において発掘調査実施している。T-1は、調査区全体が湿地帯で堀の可能性がある。T-2では一部湿地帯が続くものの、北西側で遺構面を確認し数基の土坑・ピット、軒丸瓦等が出土している。本調査地は当造成地内においてT-2に最も近い区画であり、遺構面が残存していること、寺院関連遺物の出土が予想された。

調査の結果、遺構面を確認し遺構を確認することができたが、寺院関連遺物は出土しなかった。調査区の南東側では砂礫の堆積が認められ、土層の様相はT-2よりもT-1に類似しており、湿地帯の一部が本調査区まで及んでいる可能性がある。堀の実態の解明が今後の課題となろう。

（芦塚）



全景（北東から）



東壁土層断面



北壁土層断面

36. 久野部の遺跡

調査地 野洲市久野部字畑ヶ田 150 番 98
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 4 年 6 月 9 日

1. 調査経過

久野部遺跡は、弥生時代から室町時代にかけての集落跡と周知されている。

調査地は久野部遺跡のやや南側に位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。

現地での調査は令和 4 年 6 月 9 日に行った。

2. 調査成果

調査は、建物建築部分に約 6.0㎡の調査区を設定して調査をおこなった。地表面下約 1.0m まで掘り下げた結果、地表面下約 0.7m までは造成土でその下に褐灰色粗粒シルト層（3 層）が堆積していた。その下の地表面下約 0.9m で遺構面である明橙色粘土層（4 層）を検出した。遺構面ではピットを一基検出したが、それ以外の遺構は確認できず、本調査地は遺構が希薄であると判断された。そのため、図面等の記録を作成したのち埋め戻して調査を終了した。遺物は確認できなかった。

3. まとめ

本調査地周辺は既往の調査で中世の掘立柱建物や弥生時代の溝などの遺構が確認されており⁽¹⁾、今回の調査でもそれに類する遺構が検出されるのが想定されたが、本調査地では性格がわかる遺構は確認できなかった。

本調査地は久野部遺跡の集落の一角と判断される。

(渡邊)

(1) 野洲市教育委員会 2019『平成 30 年度 野洲市埋蔵文化財調査概要報告』

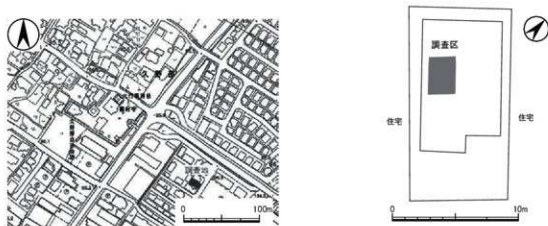


図1 調査地位置図・調査区配置図

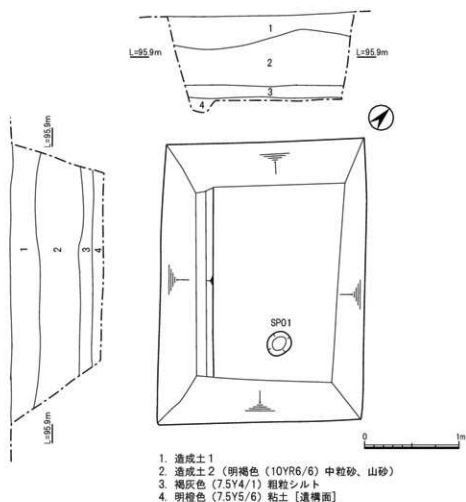


図2 調査区平面図・壁面図



調査区全景 (南東から)



東壁土層断面 (南東から)

37. 乙 窠 遺 跡

調 査 地 野洲市乙窠字ノ内 194 番 7
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 4 年 6 月 10 日

1. 調査経過

乙窠遺跡は、野洲川が形成した微高地上に位置する奈良時代から江戸時代にかけての集落跡と周知されている。遺跡の規模は東西 400 m、南北 500 m にわたり、吉地薬師堂遺跡、光明寺遺跡、小比江遺跡、鷹部屋敷遺跡などと隣接する。調査地は遺跡の中央やや南に位置し、付近には佛性寺、牛尾神社がある。

周辺の既往の調査では、平成 18 年度の試掘調査で江戸時代後期の畝条遺構とこれに伴う溝が検出されている(1)。同じく平成 18 年度に実施された試掘調査では、遺構は未確認であるが中世後期～近世にかけての土師器が出土(2)し、平成 21 年度の試掘調査においても、遺構は未確認ながら土師器片、須恵器片が出土している(3)。以上のように少量の遺物は出土しているものの、明確な集落遺構は確認されておらず、遺跡としての実態は未だ未解明な部分は多い遺跡である。

調査は個人住宅の建設に伴う試掘調査で、建物建築範囲に約 6.0m の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

2. 調査成果

地表面下約 1.6 m までは盛土が堆積しており、その下層で灰色粘土層を確認した。灰色粘土層上面で精査を行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。

3. まとめ

調査の結果、本調査地は乙窠遺跡の縁辺部と考えられる。

(芦塚)

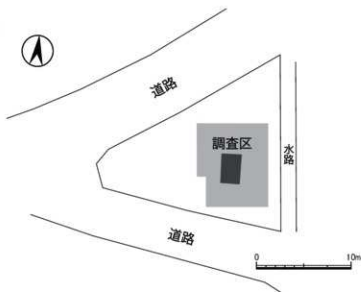


図1 調査地位置図・調査区配置図

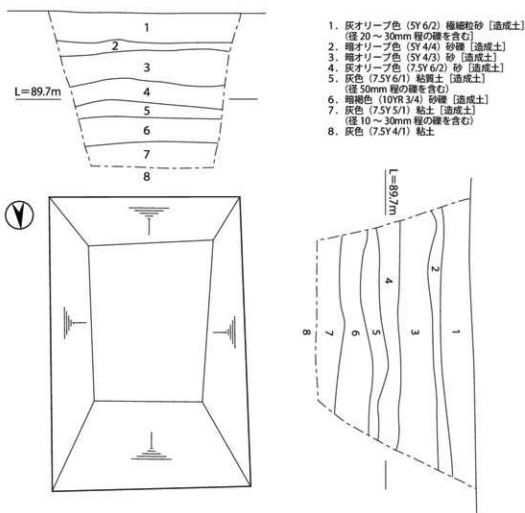


図2 調査区平面図・壁面土層断面図

- (1) 野洲市教育委員会 2008「9. 乙窪遺跡」『平成 19 年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』
 (2) 野洲市教育委員会 2008「14. 乙窪遺跡」『平成 19 年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』
 (3) 野洲市教育委員会 2011「10. 乙窪遺跡」『平成 22 年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』



全景（北より）

38. 富波東遺跡

調査地 野洲市富波字町乙 281 番の一部
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 4 年 6 月 16 日

1. 調査経過

富波東遺跡は弥生時代から室町時代にかけての集落跡と周知され、野洲市のほぼ中央に位置している。遺跡の規模は東西 600 m、南北 900 m にわたり、東は辻町遺跡、西は富波遺跡、北は常楽寺遺跡・野々宮遺跡に隣接する。調査地は遺跡の北西部にあたり、朝鮮人街道沿いに位置する。

近隣の既往の調査では、宅地造成に伴う平成 25 年度の調査で、12 ～ 13 世紀を中心とする掘立柱建物群や 7 世紀頃の井戸、土坑が検出されている(1)。

調査は個人住宅の建設に伴う試掘調査で、建物建築範囲に約 8.0m²の調査区を設定し、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

2. 調査成果

地表面下約 1.4 m まで掘削を行った結果、最上層に盛土が約 0.8 m 堆積しており（1 層）、その下層に改良土（2 層）、暗灰黄色砂層（3 層）、黄褐色砂層（4 層）、褐色川砂層（5 層）、灰色粘土層（6 層）が堆積していた。遺構・遺物は確認できなかった。

3. まとめ

本調査地は富波東遺跡の縁辺部と考えられる。

(芦塚)

(1) 野洲市教育委員会 2014 「第 3 章 富波東遺跡」『平成 25 年度 野洲市埋蔵文化財調査概要報告書』

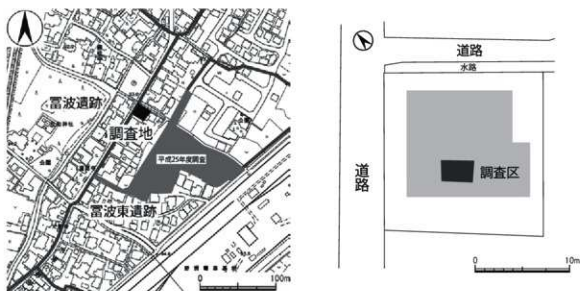
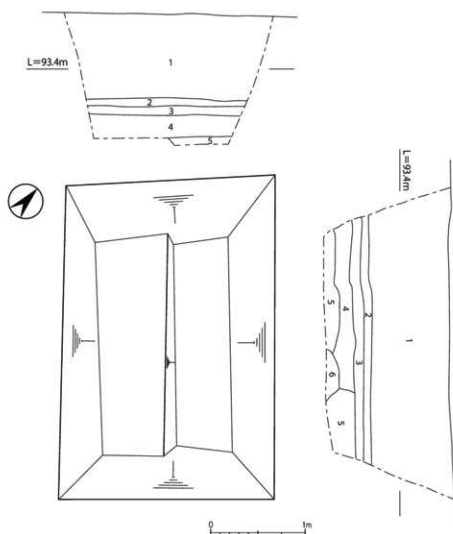


図1 調査地位置図・調査区配置図



1. 盛土 (山砂) 2. 灰色 (5Y 5/1) 粗粒砂 (改良土) 3. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 砂
4. 黄褐色 (2.5Y 5/3) 砂 5. 褐色 (10YR 4/4) 川砂 6. 灰色 (7.5Y 5/1) 粘土

図2 調査区平面図・土層断面図



調査区全景 (北西から)

39. と ば ひがし 富波東遺跡

調査地 野洲市辻町 522 番地 1
 調査原因 工場
 調査期間 令和 4 年 6 月 20 日・21 日

1. 調査経過

富波東遺跡は、弥生時代から室町時代にかけての集落跡と周知されている。

調査地は富波東遺跡の北東側に位置する。周辺には大岩山古墳群の一つである大岩山古墳や辻町山ノ中古墳などがあり、当地域には古くから連続と人が居住していたことがうかがえる。調査は工場建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。

現地での調査は令和 4 年 6 月 20 日・21 日に行った。

2. 調査成果

調査は工場建築部分に約 45㎡、事務所棟建設部分に約 8㎡の調査区を設定した。

事務所棟建設部分（調査区①）では、地表面下約 0.7 m まで掘り下げた結果、地表面下約 0.2 m までは耕作土で、その下に褐色灰色極細砂層（4 層）、明黄褐色粘土ブロックを含む黒褐色粘土層（7 層）が順に堆積し、地表面下約 0.6 m で遺構面である明黄褐色粘土層（10 層）を確認した。この層では溝を一条検出したが同時に本調査地は遺構の密度が低いことが判明したため、調査区は拡張せず、図面等の記録を作成し埋め戻しをおこなった。

工場建築部分（調査区②）では、地表面下約 0.7 m まで掘り下げた結果、地表面下約 0.2 m までは耕作土で、その下に灰色シルトブロックを含む明褐色粘土層（6 層）、灰色シルト層（9 層）が順に堆積し、地表面下約 0.4 m で灰白色細砂層（13 層）を確認した。この層が遺構面と考えられるが、遺構・遺物ともに確認できなかった。

3. 遺物

調査区①からは重機掘削中に土器が出土した。図 3-1 は円筒埴輪の底部である。やや斜め方向に直線的に立ち上がる。外面はタテハケ、内面にはユビオサエが残る。底部径は 12.0cm とかなり小型

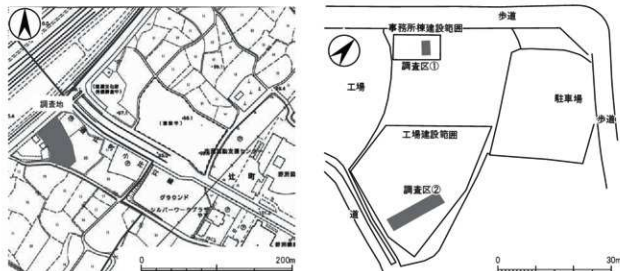
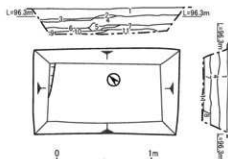


図 1 調査地位置図・調査区配置図

調査区①



1. 褐灰色 (5YR5/1) 極細砂
2. 褐灰色 (10YR5/1) 極細砂
3. にぶい黄褐色 (7.5YR5/4) 極細砂 Φ~2mmの硬澱じる
4. 褐灰色 (7.5YR5/1) 極細砂
5. 黒褐色 (10YR2/2) 粘土
6. 灰褐色 (7.5YR4/2) 粗粒シルト
7. 黒褐色 (10YR2/2) 粘土 (明黄褐色(2.5Y7/6)粘土ブロック含む)
8. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂
9. 暗褐色 (10YR3/3) シルト
10. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粘土
11. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 細砂

図2 調査区① 平面図・土層断面図

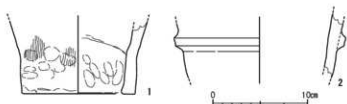


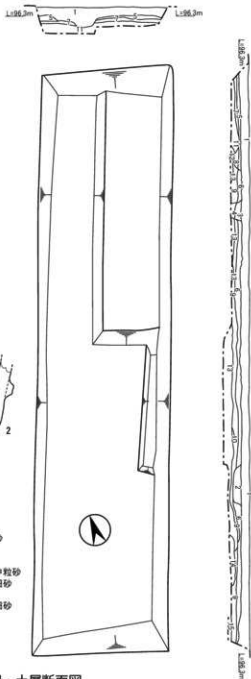
図3 調査区① 出土遺物実測図

1. 耕作土 (黒褐色 (7.5YR3/1) 極細砂
2. 明黄褐色 (10YR5/3) 粘土
3. 明黄褐色 (10YR5/6) 中粒砂
4. 褐色 (7.5YR6/6) 細砂
5. 明褐色 (10YR7/6) 粘土
6. 明褐色 (10YR7/6) 粘土 (灰色(5Y6/1)シルトブロック含む)
7. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細砂
8. 明黄褐色 (10YR6/6) 中粒砂
9. 灰色 (5Y6/1) シルト
10. 明褐灰色 (7.5YR7/1) 細砂
11. にぶい黄褐色 (10YR7/4) 中粒砂
12. にぶい黄褐色 (10YR6/4) 細砂
13. 灰白色 (10YR7/1) 細砂
14. にぶい黄褐色 (10YR7/3) 細砂
15. 灰白色 (10YR7/1) 粘土



図4 調査区② 平面図・土層断面図

調査区②



である。黒斑は確認できない。図3-2は円筒埴輪である。突帯の断面は台形となる。内外面とともに摩耗が著しく調整は不明である。黒斑は確認できない。

4. まとめ

本調査地周辺には辻町山ノ中古墳や大塚山古墳などがあり、今回の調査で埴輪片が出土したことから、本調査地でも古墳時代の活動が示唆される。

また、調査区①と②では遺構面の高さが若干違うことから、地形が北西側にかけて緩やかに傾斜していると推測される。

(渡邊)

39. 富波東遺跡



調査区① 全景（西から）



調査区① 北壁土層断面



調査区② 全景（南から）

40. 吉地薬師堂遺跡

調査地 野洲市六条字東塔ノ本 990 番 9
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 4 年 6 月 23 日

1. 調査経過

吉地薬師堂遺跡は、古墳時代から室町時代にかけての集落跡と周知されている。

調査地は吉地薬師堂遺跡のやや北よりに位置する。調査は個人住宅建設に伴うものである。建物建築範囲に調査区を設定し、試掘調査を実施した。

現地での調査は令和 4 年 6 月 23 日に行った。

2. 調査成果

建物建築部分に約 6.0m²の調査区を設定した。地表面下約 1.2m まで掘り下げた結果、地表面下約 0.5m までは造成土でその下に灰色極細砂層（2 層）、灰色シルト層（5 層）、灰色シルト層（7 層）が順に堆積し、地表面下約 1.0 m で灰色粘土層（8 層）を確認した。この層が遺構面と思われるが、遺構・遺物とともに確認できなかった。図面等の記録を作成したのち、下層確認のため地表面下約 1.8 m まで掘削をおこなったが、同様に遺構・遺物は確認できなかった。

3. まとめ

本調査地から北東側約 80 m 地点で行われた調査では 13 世紀前半の建物を検出しているが⁽¹⁾、本調査地では遺構等は確認できなかった。このことから本調査地は吉地薬師堂遺跡の遺構が希薄な箇所にあたると考えられる。

(渡邊)

(1) 野洲市教育委員会 2010『平成 21 年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』



図1 調査地位置図・調査区配置図

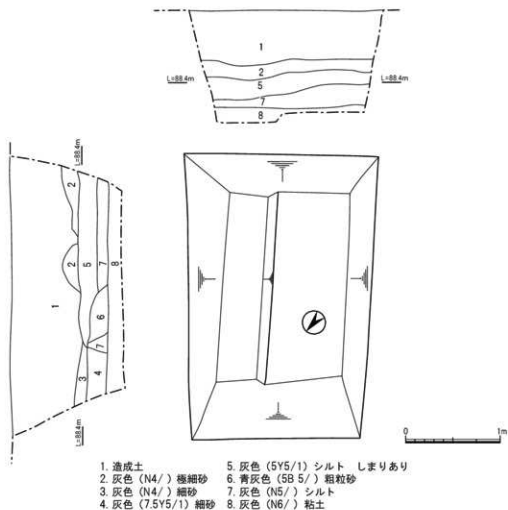


図2 調査区平面図・壁面図



調査区全景 (南東から)



南壁土層断面 (北西から)

41. 三上山西・本命寺遺跡

調査地	野洲市三上字中日より168番2、字山原213番1、214番、215番、216番、228番1、228番2、228番3、229番、230番、231番、232番1
調査原因	ガソリンスタンド
調査期間	令和4年7月11日

1. 調査経過

三上山西遺跡・本命寺遺跡は三上山の南西麓に位置し縄文から近世にかけての集落跡と周知されている。調査はガソリンスタンド建設に伴うものである。ガソリンタンク埋設部分に調査区を設定し、試掘調査を実施した。

2. 調査成果

約10mの調査区を設定して調査をおこなった。地表面下約0.7mまで掘り下げた結果、地表面下約0.3mまでは耕作土でその下に黄褐色極細砂層（2層）、灰黄褐色粗粒シルト層（3層）、黒褐色中粒砂（5層）が順に堆積しており、地表面下約0.6mで遺構面であるにぶい黄褐色粗粒シルト層（6層）を確認した。遺構はピット数基を確認した。ピットから遺物は出土しなかったが、重機掘削時に中世の所産と思われる土師器片が出土している。

3. まとめ

本調査地の西側では令和4年5月に試掘調査を行っている。当調査では遺構・遺物とともに検出できていない。また、隣接した北西側でも平成22年度に試掘調査をおこなっているが⁽¹⁾、同様に遺構・遺物とともに検出できていない。このことから本調査地から北西側に向かって集落の閑散地になると判断できる。

本調査地では遺構・遺物が確認されたため、後日改めて本調査を実施することとなった。

（渡邊）

（1）野洲市教育委員会 2011『平成22年度 野洲市内遺跡発掘調査年報』

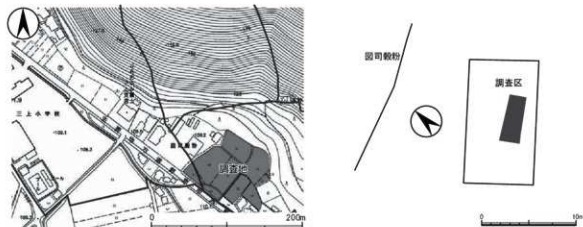


図1 調査地位置図・調査区配置図

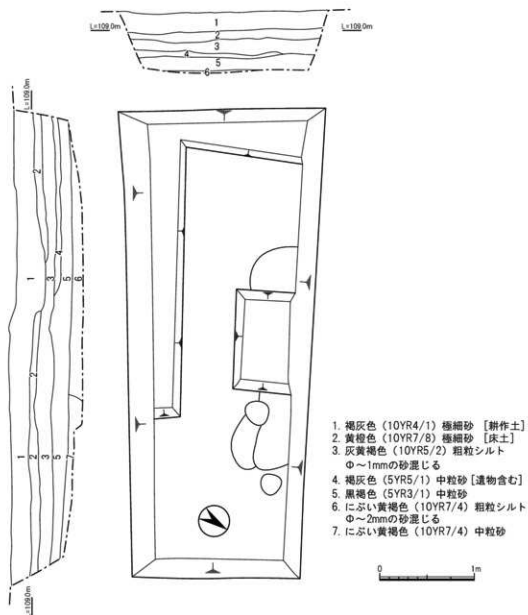


図2 調査区平面図・壁面図



調査区全景 (北東から)



東壁土層断面 (北から)

42. 井口遺跡

調査地 野洲市井口字東内畑 618 番 2
 調査原因 住宅建設に伴う発掘調査
 調査期間 令和 4 年 7 月 14 日

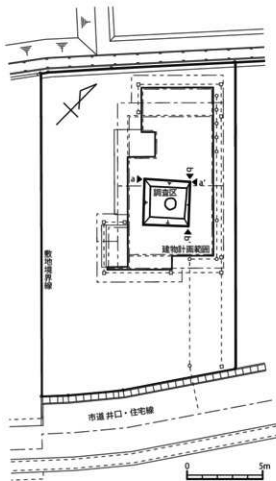
1. 調査経過

井口遺跡は、野洲川下流が竹生地先で南北に分岐する旧北流右岸の標高約 88 m 付近に位置する奈良時代から江戸時代にかけての集落遺跡である。これまで遺跡の東域で、鎌倉時代の土坑や柱穴を検出しているが、詳細はなお不明な点が多い。

令和 4 年 3 月 3 日に井口字東内畑 618-1 番を調査した結果現地表下 1.1m の暗オリーブ褐色細砂層上面で室町時代の柱穴 1 基と土器を検出した（本書収載「23. 出口遺跡」参照）。今回の南にあたる井口字東内畑において住宅建設に伴う届出があり調査地を実施した。調査は、建物建築部分に東西 3.0 m 南北 3.0 m の調査区（約 9.0 m²）を設け調査を行った。

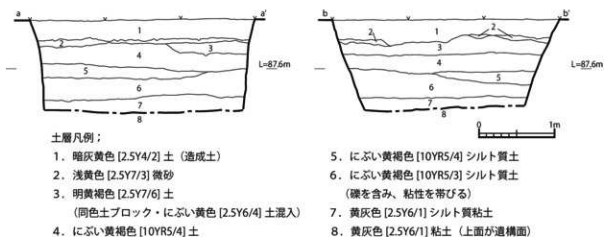


第1図 調査地位置図



第2図 調査区配置図

42. 井口遺跡



第3図 調査区周壁土層断面図

2. 調査成果

調査区は、上層から第1層：暗灰黄色土、第2層：浅黄色微砂、第3層：にぶい黄色土（明黄褐色土ブロックを含む）、第4層：にぶい黄褐色土、第5層：にぶい黄褐色シルト質土、第6層：にぶい黄褐色シルト質土（礫を含み粘性を帯びる）、第7層：黄灰色シルト質粘土、第8層：黄灰色粘土の順に堆積していた。

第7層中（標高約 86.9m）から径約 70cm の円形木組井戸を検出した。井戸は検出面から 30cm 下で径約 60cm の井戸枠を設けている。井戸内から遺物は認められなかったが、直上の7層中に近代の陶器が認められ近世から近代に構築されたと考えられる。

第8層の直上（標高約 87.0 m）で古代の甕や中近世の土師器片が少量認められたことから、8層上面を精査したが遺構は検出できなかった。また第8層の下層に堆積する青灰色粘土層上面においても精査を行なったが遺構・遺物は認められなかった。

3. まとめ

調査地の北隣接地からは今回の第8層上面に対応する暗オリーブ褐色細砂層上面（標高約 87.0m）で室町時代の柱穴を検出しており、近辺に中世から近世にかけての集落遺跡が存在すると考えられるが、今回の調査では、中世に遡る明確な遺構は捉えられなかった。

(進藤)



周壁土層断面



遺構検出状況（西南から）



下層遺構面（南から）

43. なか はた ふる さと 中畑・古里遺跡

調査地 ゆきはたあざたかみちした 野洲市行畑字高道下 799 番 5

調査原因 住宅建設に伴う発掘調査

調査期間 令和 4 年 8 月 8 日

1. 調査経過

令和 4 年 7 月 26 日住宅建設を目的とする埋蔵文化財発掘届を受理した。当該地中畑・古里遺跡の一角にあたり、工事が現地地表下 1.75 m まで地盤改良を行う計画であることから調査を実施した。調査は、建物建築予定地に 5.2 m × 2.9 m の調査区（約 15m²）を設け調査を行った。

2. 基本層序

基本層序は、上層から第 1 層：にぶい黄色土、第 2 層：濁黄灰色土、第 3 層：濁褐灰色礫混じり土、第 4 層：明黄褐色土、第 5 層：褐色土、第 6 層：黄褐色土であった。隣接地の調査により第 6 層の黄褐色土上面（GL-1.5 m、標高約 99.8 m）が遺構面に相当する。

3. 調査結果

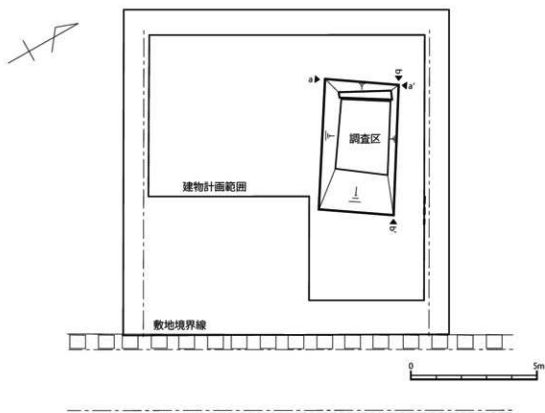
平成 13 年度に調査地の東南約 20m に位置する妙光寺塚越古墳の確認調査で、今回の調査区との間を調査した結果（第 1・第 4 調査区）、標高約 100.3 m で遺構面とみられる灰白色シルト質粘土を検出しているが遺構は検出されていない。また南西にあたる市道市三宅妙光寺線の調査（2005 年度）および市道を隔てた行畑字柿ノ内の発掘調査では、標高約 100.3m で弥生時代の土坑と 13 世紀から 14 世紀後半の堀立建物群や現在の地割に沿った溝跡を検出している。

4. まとめ

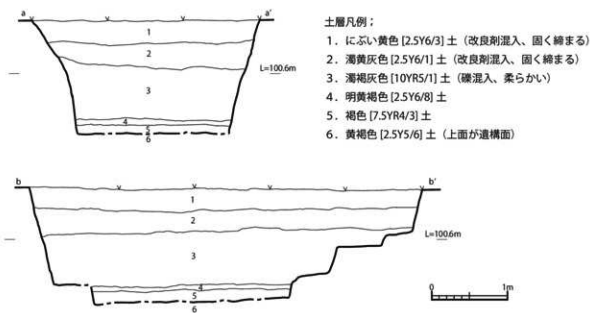
今回の調査地点では標高 99.8 m の黄褐色土上面まで掘下げ、遺構検出を行なったが遺構・遺物ともに認められなかった。これらのことから調査地から妙光寺塚越古墳にかけ、中世集落と古墳間は空閑地となっていた可能性が高い。



第 1 図 調査地位置図



第2図 調査区配置図



第3図 調査区周壁土層断面図

43. 中畑・古里遺跡



塚越古墳・三上山を望む



調査区全景（南東から）



調査区全景（南から）

44. 光明寺遺跡

調査地 野洲市西河原字川ヶ中 1036 番 16
調査原因 住宅建設に伴う試掘調査
調査期間 令和 4 年 8 月 29 日

1. 調査経過

光明寺遺跡は、野洲川旧北流右岸の微高地に位置する奈良時代から江戸時代の集落遺跡で、東に太田遺跡・湯ノ部、西に乙窪遺跡、南に小比江遺跡、北方には西河原・光相寺遺跡が広がる。調査地は光明寺遺跡南部、県道守屋・中主線沿いの住宅地の一角に位置する。調査は建物建築部分に東西 2.8 m 南北 4.1 m (調査面積約 11.5m²) の調査区を設定し調査を実施した。

2. 基本層序

基本層序は、上層から第 1 層：碎石造成土、第 2 層：濁灰色土 (旧耕作土・部分的に遺存)、第 3 層：灰オリーブ色砂混じり粘質土、第 4 層：濁灰オリーブ粘質土混じり灰色砂質土、第 5 層：灰色土、第 6 層：オリーブ灰色微砂質シルト、第 7 層：黄灰色砂礫で、第 4 層 (GL-1.2 m) までは現代の品を混入する攪乱土層である。厚さ約 20cm を測る第 5 層中には微細な土師器が認められ、中近世の水田耕作土と考えられる。GL-1.3 m の第 6 層上面 (標高約 89.0m) を精査したが生活遺構は認められなかった。また部分的に下層の確認を行った結果、GL-1.6 m で第 7 層の砂礫層 (標高約 88.7 m) を検出したが遺構・遺物ともに認められなかった。

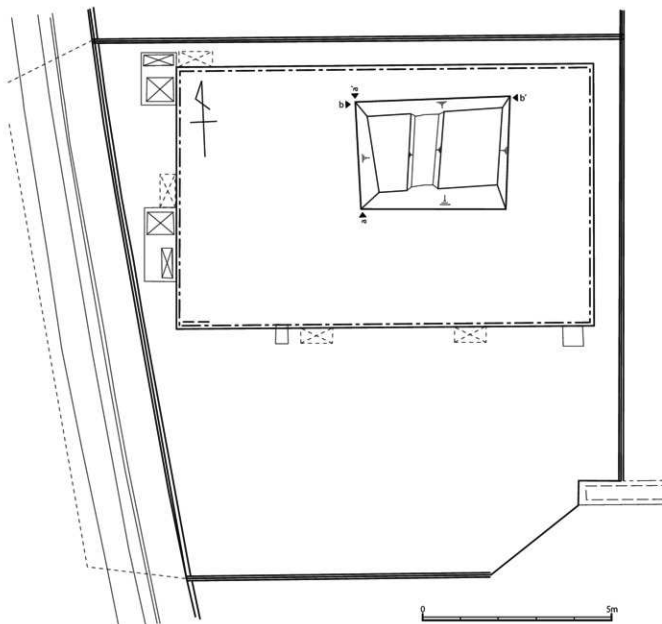
3. 調査結果

調査地から北域にかけては、古野洲川による砂礫層が基盤の微高地を形成し、中世期にはその上面に集落が営まれたと考えられるが、調査地からは遺構が認められず、集落に近接する耕作地であったと考えられる。

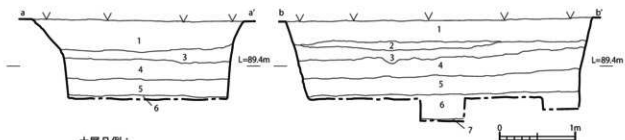
(進藤)



第 1 図 調査地位置図



第2図 調査区配置図



土層凡例：

- | | |
|---|---------------------------|
| 1. にふい黄褐色 [10YR5/3] 砂礫 (造成土) | 5. 灰色 [7.5Y5/1] 土 (旧耕作土) |
| 2. 濁灰色 [10Y4/1] 土 (旧耕作土) | 6. オリーブ灰色 [5GY6/1] 微砂質シルト |
| 3. 濁灰オリーブ色 [7.5Y5/2] 粘質土 (砂混入) | 7. 黄灰色 [2.5Y6/1] 砂礫 |
| 4. 灰色 [10Y4/1] 砂質土
(濁灰オリーブ色 [7.5Y5/2] 粘質土混入) | |

第3図 調査区周壁土層断面図



調査区全景（南から）



調査区全景（東から）



下層確認状況（南から）

45. の の みや 野々宮遺跡

調査地 野洲市富波字殿町甲 182 番地 7
調査原因 分譲住宅
調査期間 令和 4 年 9 月 16 日

1. 調査経過

野々宮遺跡は野洲市富波の東部に位置している。周辺には北西側に三堂遺跡、西側に常楽寺遺跡があり、これらは中世の遺跡である。一方南西側には富波東遺跡、南東側には辻町遺跡があり、これらは弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物が認められる遺跡である。当遺跡は昭和 59 年度から昭和 61 年度にかけて大規模な宅地造成に伴う発掘調査を実施している。調査の結果、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物を確認しており、弥生時代後期から古代にかけての建物跡、弥生時代後期では墳墓を検出している。遺物も豊富な量・種類が出土しており、一定の規模で集落が継続的に営まれていた様相がうかがえる。当調査地は、前述の大規模な宅地造成開発地の北西側に隣接している。遺構の分布範囲の中心からは外れており、密度は次第に低下する傾向にある。

調査は分譲住宅建設に伴うものであり、建物計画範囲に 1 か所の調査区を設定して実施した。調査区の面積は約 9 m²である。

2. 調査成果

調査区の基本層序は、地表面から約 1.0 m まだが造成土である。1.0 ～ 1.2 m の深さでは褐灰色土が認められる。地表面下約 1.2 m（標高約 93.0 m）において灰色砂質土があり、この上面が近辺で検出される遺構面に相当すると見られる。その直下では、地表面下約 1.4 m（標高約 92.8 m）において灰白色粗砂が認められる。

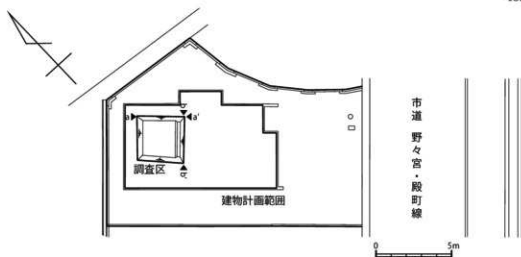
遺構面に相当すると見られる灰色砂質土の上面で精査を試みたが、遺構を検出できなかった。また、その直下の灰白色粗砂の上面でも遺構は確認できなかった。遺物も出土していない。

当調査地は野々宮遺跡の中心域から外れ、集落跡の縁辺にあたるものと考えられる。

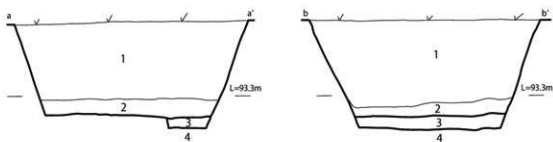
（福永）



第 1 図 調査地位置図



第2図 調査区配置図



土層凡例：1. 造成土 2. 褐灰色 [10YR4/1] 土（上層に耕作土の残り）

3. 灰色 [5Y6/1] 砂質土 4. 灰白色 [5Y7/1] 粗砂

第3図 調査区周壁土層断面図



調査地全景



調査区全景



周壁土層断面



下層確認作業

46. 比留田遺跡

調査地 野洲市比留田字口切 1213 番
 調査原因 住宅建設に伴う試掘調査
 調査期間 令和 4 年 9 月 20 日

1. 調査経過

比留田遺跡は、比留田集落を取り囲む弥生時代から近世にかけての遺跡である。

調査は建物建築部分に東西 3.1 m 南北 4.1 m（調査面積約 12.7㎡）の調査区を設定し調査を実施した。

2. 基本層序

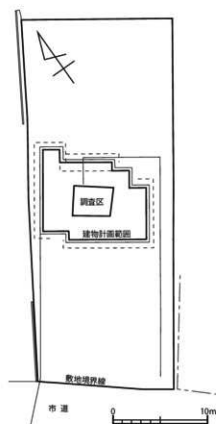
調査地点は南西の道路面から約 68cm 盛土されており、上層から深さ約 1.2 m まで造成盛土であった。盛土の下部には土師器細片を含むオリーブ灰色粘質土が堆積し、この下層には灰色粘質土が堆積していた。

3. 調査概要

遺構は、調査区の南東部でオリーブ灰色粘質土上面（GL-1.3 m、標高約 86.0 m）から切り込む落込みを検出した。落込みは調査区の南東に続き北壁断面で深さ約 50cm を図り、下層に褐灰色シルト質土が堆積し、上層が黄褐色土で覆われていた。埋土中から黒色土器碗と土師器小皿、中世須恵器裏の破片が出土した。



第1図 調査地位置図



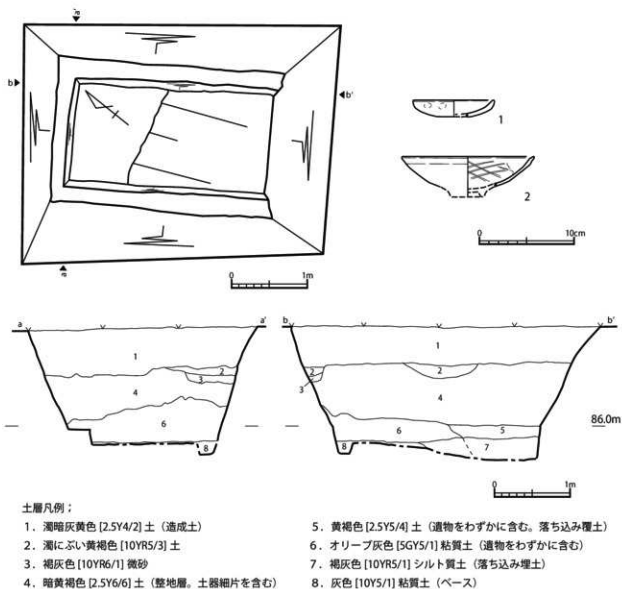
第2図 調査区配置図

1・2は落込みから出土した土師器碗と皿である。1は口径8.4cmの小皿で、肥厚した口縁端部を僅かに引上げる。2は黒色土器碗で内面に放射状のヘラ磨きをとどめる。

4. まとめ

調査地の南西道路面はかつて琵琶湖に連なる水路であった。落込みは道路面と比べ約66cm下層にあたる。オリーブ灰色粘質土上面で落込みを確認したことは、現比留田集落の北端部まで鎌倉時代から生活面が形成されていたことが明らかとなった。

(進藤)



第3図 調査区平面図・調査区周壁土層断面図

第4図 遺物実測図 (右上)

46. 比留田遺跡



遺構完掘状況（南西から）



遺構完掘状況（東南から）



出土遺物

47. 比留田遺跡

調査地 野洲市比留田 645 番 1
調査原因 住宅建設に伴う試掘調査
調査期間 令和 4 年 9 月 26 日から令和 4 年 9 月 27 日

1. 調査経過

比留田遺跡は、野洲川北流と日野川下流域にはさまれた平野部に位置し、古野洲川の氾濫によって形成された自然堤防上に立地する。自然堤防は南東から北東方向に、比江・乙窪・西河原・比留田へと延び、比留田集落で水田面（標高約 86.3 m）と現況地盤（標高約 87.0m）には約 0.7 m の比高差がある。

比留田は享保 19 年（1734）年の『近江輿地志略』では「東の方を比留田村といひ、西の方を重高村といふ」とあり、集落は大きく重高、東出（北東の高橋・河原）、上出、中出（下出）の 4 組（番・番中）に分かれ、江戸時代末期には組ごとに 4 基の曳山を有していた（うち重高・中出の 2 基の曳山が現存）。

また集落内には蓮長寺（浄土真宗本願寺派）、西徳寺（天台真盛宗）、常楽寺（真宗木辺派）、善明寺（真宗木辺派）の 4 寺院と、集落の南に浅殿神社が鎮座する。浅殿神社は「延喜式神名帳式内社」小七座にみえる「比利多社」に比定される。

今回調査地の一角には西徳寺比留田薬師堂があり、堂内に平安時代後期（11 世紀半ばから後半）の重要文化財木造薬師如来坐像（像高 88.0cm）を安置する。また薬師堂の東には鎌倉時代の石造宝篋印塔（野洲市指定文化財）をはじめとする石仏群が集積されている。

調査地近隣の調査事例としては、北に面する比留田字上出 638 番 2 において、標高約 85.6m の淡茶灰色砂質土層上面で、11 世紀中葉から 12 世紀の井戸、13 世紀の溝と土坑、近世の土坑と耕作溝を検出している。

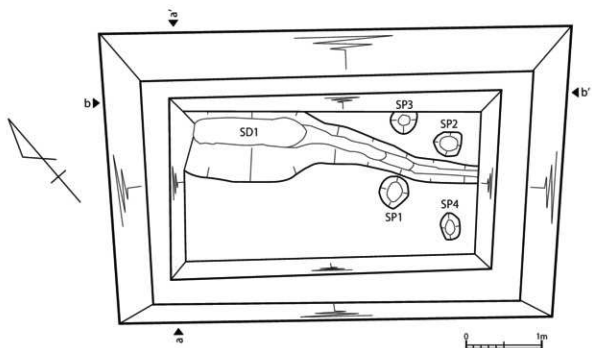


第1図 調査地位置図

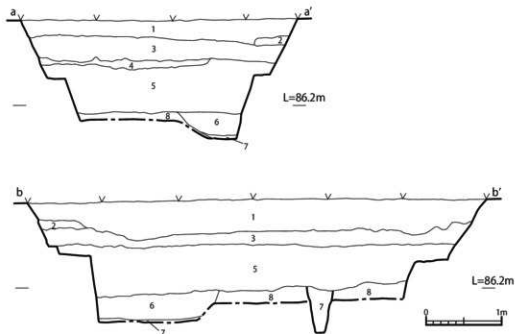


第2図 調査区配置図

47. 比留田遺跡



第3図 遺構平面図



土層凡例：

- | | |
|---|------------------------------------|
| 1. 暗灰黄色 [2.5Y5/2] 土 (造成土；礫灰黄色シルト混入) | 7. 灰黄褐色 [10YR5/2] 粘質土 (SP3・SD1 下層) |
| 2. 灰黄色 [2.5Y6/2] シルト質土 (造成土；ブロック状に堆積) | 8. 黄灰色 [2.5Y6/1] シルト質土 (上面が遺構面) |
| 3. にぶい黄褐色 [10YR5/4] 土 (造成土) | |
| 4. 濁オリブ灰色 [2.5GY6/1] 土 (造成土；ブロック状に堆積) | |
| 5. にぶい黄褐色 [10YR5/3] 土 (造成土；土師器細片混入) | |
| 6. 暗灰黄色 [2.5Y5/2] 土 (SD1 上層)；褐灰色 [10YR6/1] 粘質土混入) | |

第4図 調査区周壁土層断面図

2. 調査成果

今回の調査は、近接地で検出した中世遺構の広がり、対象地内に存在する平安時代後期の薬師如来や鎌倉時代の宝篋印塔との関係解明を主たる目的として実施した。調査は建物建築部分に東西5.0m、南北6.0mの調査区(約30㎡)を設け、盛土下から遺構検出を試みた。

上部の堆積土層は現地表面から1.2mまで、にぶい黄褐色土を基調とする造成盛土(整地層)であった。整地層の下部を占める第5層:にぶい黄褐色土には土師器細片を含み、その下層に第6層:黄灰色シルト質土上面で遺構を検出した。

検出した遺構には溝1条とピット4基がある。SD1は、南東から北西に流れる溝で、南東では細くて浅いものの北西では幅0.8m以上深さ35cmを測り、下層に灰黄褐色粘質土が堆積し、褐色灰色粘質土混じりの暗灰黄色土で埋まっていた。

埋土からは、東播系須恵器鉢、土師器小皿、黒色土器碗の破片が出土した。

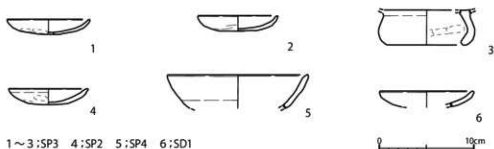
ピットは調査区の南東で検出した。このうちSP1・2・3は、直径約25cmで検出面から深さが約40cmを測りともに灰黄褐色粘質土で埋まっていた。SP2の最下層には礎板とみられる木材が遺存していたことからこれらは掘立柱建物の柱穴と考えられる。柱穴内からは土師器の皿や羽釜・黒色土器碗・東播系須恵器鉢の破片が出土した。

出土遺物は6点図化した。1・2・3はSP3出土の土師器皿で、3は強く内湾する台付皿の脚部である。4はSP2から出土した土師器皿。5はSP4から出土した黒色土器碗。6はSD1出土の土師器皿である。これらの遺物は11世紀後半から12世紀中葉のものが主体を占めている。

3. まとめ

東隣接地の調査と合わせると薬師堂を取り囲む調査地一帯が、比留田遺跡内でも平安時代末から鎌倉時代の集落の主要部分を構成すると考えられる。現存する薬師如来坐像や石造宝篋印塔を建立・崇拝した集落と見なすものである。

(進藤)



第5図 出土遺物実測図

47. 比留田遺跡



調査地と比留田薬師堂



薬師堂・石仏群



遺構完掘状況（南から）



遺構完掘状況（北から）



SP2 完掘状況



出土遺物

令和4年 工事立会一覧

No	道跡名	届出地	事業内容	基礎深度 (GL-m)	対象面積 (㎡)	届出者	立会日	立会結果
12	小篠原道跡	小篠原字沢町 1522番	宅地造成	0.8	445.06	K-サイド不動産㈱	20211116	GL-0.8mまで掘り 下げ。道構・遺物 なし。
13	堤道跡	堤字里ノ内410番	携帯電話 基地局設置	3.0	0.12	㈱楽天モバイル	20211126	GL-1.1mまで掘り 下げ。道構・遺物 なし。
14	野々宮道跡	富波字殿町甲 182番1	宅地造成	0.8	532	アヤハ不動産㈱	20211130	道構・遺物なし。
15	安城寺道跡	小篠原979番1～ 876番1外	ガス管理設	0.8	53	大阪ガス㈱	20211130	道構・遺物なし。
16	富波道跡	富波字小澤乙 389番1	携帯電話 基地局設置	3.0	2.25	㈱楽天モバイル	20211220	GL-3.0mまで掘り 下げ。道構・遺物 なし。
17	乙窪道跡	乙窪字里ノ内194番1、 194番8、195番	駐車場	1.2	655	佛性寺	20220110	GL-1.2mまで掘り 下げ。道構・遺物 なし。
18	小篠原道跡	小篠原2213番～ 2219番2	ガス管理設	0.8	163	大阪ガス㈱	20220112	GL-1.4mまで掘り 下げ。道構・遺物 なし。
19	斎ノ神道跡	妙光寺字下六反田 302番1、303番1	鉄塔敷地境 界線手直し	0.9	28.6	関西電力送配電㈱	20220124	GL-0.8mまで掘り 下げ。道構・遺物 なし。
20	三上山西道跡	三上388番	電柱設置・ 支線設置	2.6	0.3	関西電力送配電㈱	20220208	GL-2.6mまで掘り 下げ。道構・遺物 なし。
1	街道道跡	大篠原1887番1	看板新設	1.3	0.2	㈱関西西広告社	20220705	GL-1.3mまで掘り 下げ。道構・遺物 なし。
2	比留田道跡	比留田字重高755番1、 755番3	露天資材 置き場	1.8	691	㈱style	20220719 ～0721	GL-1.8mまで掘り 下げ。道構・遺物 なし。
3	比江道跡	比江1093番	電柱設置	2.6	0.75	関西電力送配電㈱	20220720	GL-2.6mまで掘り 下げ。道構・遺物 なし。
4	久野部道跡	久野部332番	電柱新設・ 建替え	1.0～2.8	1.00	関西電力送配電㈱	20220721	GL-1.6mまで掘り 下げ。砂礫のみ検 出。道構・遺物なし。
5	久野部道跡	久野部331番	電柱新設・ 建替え	1.0～2.8	0.25	関西電力送配電㈱	20220721	GL-1.6mまで掘り 下げ。砂礫のみ検 出。道構・遺物なし。
6	三上山西道跡	三上340番1	電柱設置	2.8	0.75	関西電力送配電㈱	20220723	道構・遺物なし。
7	三堂道跡	富波甲891番1	電柱設置	1.0～2.8	0.75	関西電力送配電㈱	20220826	GL-2.6mまで掘り 下げ。道構・遺物 なし。
8	小比江道跡	小比江606番1、 606番2	電柱設置・ 支線設置	2.6	1.50	関西電力送配電㈱	20221004	道構・遺物なし。
9	小比江道跡	小比江地先	電柱設置・ し	2.8	1.50	関西電力送配電㈱	20221007	GL-2.6mまで掘り 下げ。道構・遺物 なし。
10	富波東道跡	富波字山口甲550番、 551番、551番1、 562番	個人住宅	0.42	187.15	個人	20221013	既存の盛土内のみの 掘削。遺物なし。

報告書抄録

ふりがな	れいいわねんど やすしないいせきはつくつちようきねんぽう
書名	令和4年度 野洲市内道路発掘調査年報
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	教育委員会文化財保護課
編集機関	教育委員会文化財保護課
所在地	〒520-2492 滋賀県野洲市西河原2400番地 北部合同庁舎2階 In 077-589-6436
発行年月日	西暦2023年3月

所収道路名等	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	道路番号					
水原御殿跡 水原御殿跡	水原寺馬場ノ内1030番4、 1032番2、1032番3、1032番9	252107	343-029	35°09'09"	136°03'55"	20210712～ 20230329	108.84	史跡の 内容確認
下々塚遺跡 下々塚遺跡	行畑2丁目字下々塚1127番4	252107	343-101	35°06'29"	136°02'20"	20211006	6.25	個人住宅
井口遺跡 井口遺跡	井口字内畑554番2、554番5	252107	342-039	35°11'07"	136°00'15"	20211007	9	個人住宅
十八田遺跡 十八田遺跡	野洲字浅田1700番1、1701番1、 1702番4	252107	343-081	35°06'62"	136°00'10"	20211021	20	倉庫建設
長島遺跡 長島遺跡	長島字大町387番、387番1	252107	343-023	35°09'54"	136°06'23"	20211028	6	個人住宅
十八田遺跡 十八田遺跡	野洲字浅田1716番、1717番、 1718番、1719番	252107	343-081	35°06'68"	136°00'03"	20211102	6	露天駐車場
野田遺跡 野田遺跡	野田字里ノ内1681番、1682番	252107	342-031	35°12'32"	136°01'67"	20211110	6	個人住宅
富波東遺跡 富波東遺跡	富波乙236番	252107	343-056	35°07'74"	136°03'39"	20211118	6	個人住宅
富波東遺跡 富波東遺跡	富波字町乙355番の一部	252107	343-056	35°08'00"	136°03'57"	20211119	10	個人住宅
吉川遺跡 吉川遺跡	吉川字里ノ内985番の一部	252107	342-045	35°12'54"	135°59'10"	20211124	6	個人住宅
比留田遺跡 比留田遺跡	比留田字上大込1372番2、 1372番3、1372番5、1373番2	252107	342-017	35°11'30"	136°02'25"	20211208	9	個人住宅
富波東遺跡 富波東遺跡	富波字山口乙353番の一部、 342番2の一部、352番3	252107	343-056	35°08'01"	136°03'59"	20211209	6	個人住宅
小篠原遺跡 小篠原遺跡	小篠原字附毛1403番9、 字狭間1373番2	252107	343-102	35°06'74"	136°02'82"	20211214～ 20211220	63	個人住宅
光明寺遺跡 光明寺遺跡	西河原字川ヶ中921番5、 921番6	252107	342-014	35°09'88"	136°01'05"	20220112	9	宅地造成
小篠原遺跡 小篠原遺跡	小篠原字附毛1403番8、 字狭間1376番5	252107	343-102	35°06'74"	136°02'81"	20220119～ 20220131	73	個人住宅
六条遺跡 六条遺跡	六条字杉ノ木758番1	252107	342-040	35°10'69"	136°00'83"	20220214	9	個人住宅
西河原遺跡 西河原遺跡	西河原字六反田883番4、885番1、 886番1の一部、887番1	252107	342-009	35°10'10"	136°01'42"	20220214～ 20220216	82	宅地造成
西河原遺跡 西河原遺跡	西河原字坊ノ前711番7、 711番8、711番14	252107	342-009	35°10'20"	136°01'59"	20220216	5	個人住宅
吉川東出遺跡 吉川東出遺跡	吉川字西浦1451番2	252107	342-044	35°12'05"	135°58'95"	20220222	6	個人住宅
長島遺跡 長島遺跡	長島字大町364番	252107	343-023	35°09'50"	136°06'20"	20220225	4	個人住宅

21	八夫西ノ後道跡	八夫西ノ後道跡 八夫西ノ後1381番3、 1382番8	252107	342-028	35°09'28"	136°02'02"	20220302 ~ 20220310	40	個人住宅
22	井口道跡	井口字東ノ内畑606番	252107	342-039	35°11'10"	136°00'33"	20220303	6	個人住宅
23	井口道跡	井口字東ノ内畑618番1	252107	342-039	35°11'00"	136°00'26"	20220303	6	個人住宅
24	三上道跡	三上字寺田299-19-11番	252107	343-062	35°04'72"	136°02'94"	20220307 ~ 20220309	33.7	寺院建立
25	比留田道跡	比留田字八ノ前568番1	252107	342-017	35°11'12"	136°02'74"	20220406	24	個人住宅
26	西河原・番ノ部道跡	西河原字天皇前2026番外11番	252107	342-009 342-010	35°10'06"	136°01'58"	20220413 ~ 20220525	570	宅地造成
27	久野部道跡	久野部字南出228番1外3番	252107	343-104	35°07'38"	136°02'41"	20220415	15	集合住宅
28	小篠原道跡	小篠原字南毛1403番7、 字扶間1376番4	252107	343-102	35°06'72"	136°02'81"	20220419 ~ 20220421	26	個人住宅
29	井口道跡	井口582番	252107	342-039	35°11'16"	136°00'26"	20220426	9	個人住宅
30	小篠原道跡	小篠原字沢戸1522番2	252107	343-102	35°06'70"	136°03'09"	20220510 ~ 20220511	12	個人住宅
31	三上山西道跡	三上山西原234番4外8番	252107	343-064	35°04'45"	136°03'26"	20220513	10	工場
32	大篠原南道跡	大篠原字野村2853番2、2854番	252107	343-015	35°07'64"	136°06'10"	20220519	15.2	個人住宅
33	西河原道跡	西河原字西浦562番1の一部、 外3番	252107	342-009	35°10'26"	136°01'39"	20220523	4.5	個人住宅
34	八夫道跡	八夫字今様1444番の一部	252107	342-030	35°09'15"	136°02'14"	20220524	12.4	個人住宅
35	常楽寺道跡	富波寺町南962番8	252107	343-050	35°08'16"	136°03'53"	20220607	6	個人住宅
36	久野部道跡	久野部字畑ヶ田150番98	252107	343-104	35°07'27"	136°02'70"	20220609	6	個人住宅
37	乙窪道跡	乙窪字里ノ内194番7	252107	342-005	35°09'86"	136°00'73"	20220610	6	個人住宅
38	富波東道跡	富波字町乙281番の一部	252107	343-056	35°07'94"	136°03'52"	20220616	8	個人住宅
39	富波東道跡	近町522番1	252107	343-056	35°07'90"	136°03'95"	20220620 ~ 20220621	53	工場
40	吉地兼師堂道跡	六条字東字ノ本990番9	252107	342-012	35°10'61"	136°00'70"	20220623	6	個人住宅
41	三上山西・本金寺道跡	三上山西ヤリ168番2外11番	252107	343-064 343-066	35°04'40"	136°03'26"	20220711	10	ガソリン スタンド
42	井口道跡	井口字東ノ内畑618番2	252107	342-039	35°11'01"	136°00'25"	20220714	9	個人住宅
43	中畑・吉里道跡	中畑字高道下799番5	252107	343-084	35°06'12"	136°02'53"	20220808	15	個人住宅
44	光明寺道跡	西河原字川ヶ中1036番16	252107	342-014	35°09'89"	136°01'01"	20220829	11.5	個人住宅
45	野々宮道跡	富波字殿町甲182番7	252107	343-052	35°08'30"	136°03'85"	20220916	9	分譲住宅
46	比留田道跡	比留田字口切1213番	252107	342-017	35°11'28"	136°02'33"	20220920	12.7	個人住宅
47	比留田道跡	比留田645番1	252107	342-017	35°11'07"	136°02'27"	20220926 ~ 20220927	30	個人住宅

令和4年度
野洲市内遺跡発掘調査年報

印刷・発行 令和5年(2023)3月
編集・発行 野洲市教育委員会文化財保護課
滋賀県野洲市西河原2400番地
〒520-2492 TEL.077-589-6436
印刷・製本 奥野印刷株式会社